傲岸不屈、一世を睥睨するの慨あり、といはれたほどの重蔵が、何を苦しんで、自家廣告にひとしい、石像をつくつた上に、自分から之れを祀つたかといふに就ては、各人の見るところは、それ〴〵に異なつて居るであらうが、私は、之れを善意に解釋したい、と思つて居る。

身分は、一個の與力で、弓奉行に引上げられても、重藏の希望には、副ふて居なかつた。二つ無い生命を的にして日本の北境、千島の端までも押出したが、さらに對岸の樺太に渉り、大に爲す可く、非常な覺悟を有つて居たのだ。然るに、その志は容られずして、泰平の餘技にもひとしい、内地の弓奉行にされたのであるから、それに滿足の出來る筈はなく、却つて、不平の高まるのは、當然の事であつた。

而も、弓奉行は罷められ、小普請入となつては、いよ〳〵、磊塊の志は、酬られる時なく、その一生は、捨扶持の一幕臣として、空しく死期を待つ外になかつたのが、いよ〳〵不平の氣は長じて、我儘の振舞に出づるは、いかに豪快な男子としても、要するに人間の事であるから、また止むを得ざる次第といふべきであらう。

石像を見せられた人々は、少なからず驚いた。只だ獨り文晁のみは、自分の畫いた、肖像が、斯ういふ風になつて來たのであるから、心中頗る得意であつたに違ひない。

この事は、それからそれへ、と傳へられて、友人知己の見物に來るものは、ます〳〵多く、それ丈けに評判の廣まるのも早く、忽ち幕吏の知るところとなつて、ひそかに其實際を、見に來たものもあつた事は、いふ迄もない。

寺社奉行の松平伯耆守は、役目の手前、之れを見逃し得なかつた。

伯耆守は、深く重藏に同情して、可成くは罪に陷入れたくないので、免に角、一應は役宅へ呼んで、懇談的に事情を聞いて見たい、と思つたから、重藏を迎ひにやつた。

いかに、重藏を嫌つて居るものでも、その博覽廣聞には、敬服して居るのであつた。傲腹にして上司を輕んずる失はあつても、その剛腸鐵心は、多く比す可きもの〻無い、といふことも、よく判つて居たので、尋常一樣の小身者、

と同一には、見て居なかつた。

殊に、幾分の同情を有つ人の眼には、有爲の人材として、その過失が、大きければ大きい丈けに、之れを惜むの情は有つたのだ。

『瀧之川の隱宅に、甲冑を着けた、石像が在る、とのことであるが、それは眞實の事か、どうか』

『仰せの通り、石像は、確かに在ります』

『庭内の、いづれに備へあるか』

『洗れに臨み、一つの洞窟が御座る。それに備へ在ります』

『その石像は、何者の形貌を寫したものか』

『拙者の形貌を寫して、彫刻いたさせました』

『諸人をして、禮拜せしめたといふことは眞實か』

『禮拜せしめたことはありませぬ』

『然らば、どういふのであるか』

『只だ庭内へまゐるものは、隨意に逍遥して、之れを見る、といふに、すぎませぬ』

『併し、諸人を案内して、禮拜せしめて居る、といふことはなきか』

『左樣な事は、決して御座らぬ』

『それにいたしても、一應は内屆をいたす可きものとは、思はなかつたか』

『自分の庭内へ、自分の石像を置くに、内屆の必要はないものと、存じ居りました』

『不相應の儀とは、思はぬか』

『それほどに、重き事とは存じ申さず、極めて輕き事と思ひ居ります』

『取除く考へはないか』

『毛頭御座りませぬ』

事を輕く濟まさう、として、伯耆守が誘ひをかけたけれど、その效なく、重藏は、はつきり答へてしまつた。

五

若し重藏が、早速に取除く、といふたら、事件は、その儘に消してしまふ考へで、伯耆守の腹は、定まつて居たのだが、重藏の答へが、あまりに判然して居て、而かも、取除く考へはない、といはれてしまつたから、それ以上に、いかんともしやうがなかつた。

『たとへ、自分の庭内にもせよ、石像を祀る、といふことは、不相應の儀と思ふ。いかなる考へを以て、左樣の事をいたしたか、その次第を承知したい』

此時、重藏は、膝を正して、

『過ぐる寛政十年、初めて蝦夷地へふみ込み、更に文化四年に、再度の渡航を試み、或時は、激浪と鬪ひ、また或時は、降雪に身を危くし、猛獸の襲ふところとなり、千島群島へ渡りし際は、ロシア人と爭ふて、擇捉、得撫を取戻し、宗谷の海峽に、我が武威を輝かしたる、その間の苦辛は、言語に述べ盡し得ぬほどで御座つた。身には、甲冑を着けし儘、寢食の苦、天候と嚴寒の艱みに堪へ、九死に一生を得て、使命を果せしにも不拘、御呼戻しの御沙汰を蒙り、急ぎ立歸れば、意外の役替にて、浪華の地に赴き、忽ちにして勤め方不相應とあつて、小普請入の身と相成り、半生の希望も、今は水の泡と化し、不遇の裡に、日は逝れど、いよ〳〵忠勤を勵むの心は深きゆゑ、魂は、常に遠く北海の果にさまよひ居りまする。當時の苦辛を、永く子孫へ傳へて、文武を勵み、御奉公を忘れざるやう深く心腦けさするの考へから、甲冑に身を堅めたる石像を、庭内へ安置して、子孫を戒める心から、斯かる事を仕りましたのが、却つて公儀の御咎をうけるに至るとは、まことに以て、心外千萬で御座る』

と、激越の口調を以て、涙と共に慷慨する。その容子を見ては、伯耆守も、坐に同情する外なかつた。

『子孫へ殘す武功の形見、それすら相成らぬとの御沙汰なれば、謹んで御咎めはうけまする。罪の石像は、筏へ乘せて、東海へ流すも惜くは御座らぬ』

『その志は、よく相判つた。事情は、さらに書面に認め、此方へ差出すことにいたせ』

『ハツ、早速に書面は差出します』

其日の訊べは、それですんだが、屋敷へ歸ると、書面を認めにかゝつた。數日の後、伯耆守の手許へ、書面は提出された。それには、斯ういふことが書いてあつた。

『私、墓地構の内、洞穴へ差置候、甲冑を着け候石像之儀は、去寛政十午年、蝦夷地御用の爲め、彼地へ被差遣候砌、東は魯西亞境、西は韃靼境まで罷越、地勢見究め、右異國境取締の筋可申上段、御主意に付、私一人罷越候節、夷狄の地に於て、非常之節、甲冑弓鐵砲相用候は、當然に候得共、私、小身者の儀故、鐵砲は伺の上、持越申候、松前より東海凡四百里、エトロフ島と申候は、古來、日本船更に往來無之離島に候得共、私儀、初て渡海仕り候より先、島々相進候手配之處、大體是迄も渡海無之程の場所にて、格別難海荒汐の瀨戸に、私一人、繩織の夷船に乘り、風波を凌ぎ打渡候儀故、若し身を海底へ沈め、餌を鯨鯢に葬り候共、四夫下臈の身柄も同樣にては、武門の恥辱のみに無之、御用先御威光にも拘り候儀と、中流に於て、甲冑取出し着用仕、加之多年アツケシと申處の酋長イトマイと申者、夷人を殺害の上、甲冑とも用意仕、手下七八十人召連、同島へ立籠り居り候に付、毒矢射かけ可申も難計段、案内の夷人申聞候間、猶更用心致、甲冑の儘上陸仕候、其節は八朔にて、生憎大風荒吹、四方より逆浪捲上、夷船は、水底に沈み候如く、汐風强き故、鬚髮半面霜の如く相成夷人も半死半生にて、船押候得共、渦卷候汐路、何分楫取不申、既に覆沒にも可及處、私儀、甲冑の儘長刀を拔き

夷人を指揮仕船方不精に於ては、忽ち切捨申旨申渡、九死一生にて、漸く渡海仕、中々以て唯今書面に相認め候樣なる綏やかなる事にて無御座候、其段歸府後、立花出雲守殿へ、委細申上候處、松平伊豆守殿へ其咄被成候得ば、覺悟宜敷御噂候段、御同人私へ御物語りに御座候。一體、エトロフ島之儀は、在來更に往來無之離島ゆゑ、私、罷越候砌も、初めて日本人を見請候程の偏境にて、百年來、魯西亞より段々手に入、同所夷人を手懷け、其風俗も、彼國の髮形着服に仕立て、又鐵砲を渡置き候も有之、既に魯西亞より段々に鑿食併合せらる可き樣子に相見得候處、私儀着岸、先以て右の鐵砲佛像をも取上、魯西亞人建置候榜示並に邪宗門の印杭等打倒し右品は江戸表へ相廻し、御用部屋へ差出申候、且彼國の風俗に成來候夷人共を伺の上、日本風俗に相改め、剩へ日本の表柱を、カムイツカオイと申、高山へ押立、其段も言上に及び、其外魯西亞人へ服屬候、チユフカと申す島の夷ども歸服爲致候上、私一人にて、周圍凡そ二百卅里の孤島を新規開發仕、濱方十七ケ所まで取立、夷人撫育、御德化を施し申候、當時にては土人も、近藤島と申なし候由承及申候。

右體、遠海離島に於て、夷人を引請、猛獸の群に立入、夷狄を屈服爲仕、殊に後詰の助も無之、不敵に夷狄の內へ、私只一人罷在候儀に付、度々甲冑弓鐵砲相用、御威光を示し候儀に御座候、後には土人共、私異名を、コンカネコヤンカムと申候趣に御座候。

夫より十ケ年後、私、小普請方相勤罷在候節、文化四卯年、蝦夷地へ魯西亞人來寇亂暴に及び、右御用の爲又候俄に蝦夷へ被差遣候處、其砌は騷擾後、南部津輕兩家人數は勿論、佐竹勢、庄內とも甲冑弓鐵砲の懸引陣立、堀田攝津守殿御見分も有之程の儀にて、私儀は、松前より西海凡二百里許の奧蝦夷地リイシリ島近く、魯西亞人亂暴の場所見分の爲可罷越旨、堀田攝津守殿御旅宿に於て被仰渡、則ち彼地へ罷越、右御用向相勤候上、雜粗國境取調、同國へ往來仕候、砌、異國防戰の手配最中故、數度甲冑着仕候、右は甲冑相用候程の儀に候得ば、一所懸命の覺悟に及候は勿論にて、其段は、若年寄中は勿論、世上の

人も存知罷在候儀に御座候。

右之通、泰平二百年の御時節に當り、御奉公筋にて十ケ年の間、再度甲冑着用仕、異國境又は外寇の虎口へ罷出、且は漫々たる氷海雪浪の難を凌ぎ、渺々たる霜雪を褥と仕、或は地理を見究候爲、イシカリ河原より、深山幽谷百八十里の間、昆迄人跡無之處の雪野に宿り山越仕、カムタンと申大難所にて夷船覆沒に及び、御朱印までも、水中に濡候程の次第にて、數日糧米を絕、魚食のみ仕、其外極寒中に通船無之處は、氷上を步渡、雪中丸小屋に野宿仕、又クナシリ島アトヘヤと申處よりネモロまで凡九十里餘、急御用にて立戻り候節、夷船にて晝夜風波を厭はず押切り、其外千辛萬苦屈指に不遑候。

畢竟、國境の地勢相糺申べき爲、人跡無之深山幽谷に踏入、古來往還無之離島へ押渡り、御用害の筋、專要に取調、私一人の力を以、東夷西戎を折衝仕候、意外右樣人の知らざる艱難に出逢候儀に御座候、是併し武門に於ては、比類なき勤勞と存候得者、弓矢の面目不過之、御威光の程難有、責ては子孫へ武功の程をも相傳彌忠勤を勵ませ可申と右像彫刻仕候、死後は、棺中へ埋候心得にて御座候。

然る處、私、式の小官微祿に罷在ながら、身の程をも顧ず、古名將勇士の武功を慕ひ候迚、不相應なる御用向をも相勤め、只管天下國家の爲、志勤仕可と粉骨碎身、東夷西戎を橫行仕、異國御取締の筋、最初私見込通り屹度相立候上、元來寬政巳年、文化子年兩度、松平伊豆守殿、戶田采女正殿へ東西蝦夷地御處置の儀、私存寄の趣き御取用に相成、則ち右御用被仰出、松前土地同所奉行をも被仰付、右御用先に於て、現在甲冑相用候程の列敷御用無滯相勤候儀に御座候處、犬馬の骨折は鷹隼と違ひ、天命不運とは申ながら、私、堪へ情薄き生質にも候や、年來に不相應老折に及び、邊島の霜雪に氣血枯れ候や、白髮蹉跎に罷成、聖時の御時節、功官は有之間敷候得共、邊功も水の泡に相成、其上、又去る巳年四月、勤方不相應に付小普請入差控被仰付候、乍去、老ては彌壯とは心懸候得共、天命何程に可有之候哉、しからば子孫へ武功の形見殘し、彌志勤の志

を起させ候端にも可相成やと建置候石像も、是亦不相應など申事に候はゞ、右石像は、筏に乘せ、東海に浮ばせ候ても不苦候、右石像は、鹿の角の前立物に事寄せ候筋には無之、輪貫前立物、私家紋鹿の抱角金紋打ち候譯、前書の次第に御座候趣に付、此段申上候、以上』

重藏から伯耆守へ、差出した書面の全文は、以上の通りであるが、言々句々、平生の氣性が現れて居て、今日の時代に、之れを讀んでも、痛快の感が有る。一歩を誤れば、幕府の嚴譴を蒙る可き、この場合に臨んでも、猶且つ、斯うした事を上言して、さらに憚からぬところに、彼の侵す可からざる氣節が、躍如として居るではないか。

或は、風雪の辛苦を說いて、幕府の武威を、ほのめかしつゝも、自己の勇を誇り、或は、犬馬の功は、鷹隼と違ひ云々、と喝破して、滿腔の不平を、言外に示し、或は、不相應の文字を、しきりに用ひて、暗に石像の事は、不相應に非ざることを、力說して居るなど、いかに窮するも、傲岸の氣は、さらに屈せず、いふ丈けのことは、いつて退ける底の心事、歷々として見る可く、眞に大丈夫の魂を有つ人は、すべて斯くの通りである。

昨今の人間が、巧言令色のみに長じて、言動に表裏あることを、それとなく誇るやうになつたのは、全く世の末といふて可いが、啼に老成の人ばかりでなく、青年の輩までに、左樣した氣分の漲つて居ることを、私は、常に見て居るから、斯ういふ文章も、時には、見せて置く必要がある、と思つて、此に全揭した次第である。

六

元來、重藏は、熱血性の人であつて、自分の一身について、非常に興奮する所があると、同時に、他人の事についても、人一倍の苦勞をしたものである。

長崎奉行に從いて、同地に出張して居た時、これだけの土地を、開拓した人物に對して、土地の者が、存外に冷淡である、といふ事を憤慨して、非常な熱心と、費用を吝まず、遂に長崎甚右衛門と、その弟織部の墳墓を、探し

出して、之れを改修した、といふやうな事もあつて、その人間味の深い所が、重藏の價値であつた。

幕府が、その武功に對して、あまり重く見て居なかつた事が、彼としては、非常に不滿であつたに違ひない。唯だ徒らに、自分の功績を、表賞して貰ひたい、といふやうな事ばかりが、彼の希望ではなく、更に進んで、その進言した事項を、幕府の方針として、實行して欲しい、といふのが、本來の志願であつたにも拘らず、その進言は、多く用ひられず、却つて、自分は、敬遠されてしまつたのだから、滿腔の不平は、事毎に發して來るのが、當然の事であつた。

石像事件の如きは、今日の事情からすれば、何でもない事であるが、その當時には、重大な事件として、見られて居たのである。殊に、大阪以來の行動が、幕吏の眼には、奇怪な事として、見て居られたので、從つて、石像の事が大きな事件として、取扱はれるやうになつたのであらう。

寺ぴにして、伯耆守が、重藏に、深い同情を、有つて居た爲めに、之れを公の問題として、取扱ふ前に、自分の役宅へ呼出して、懇談的に調べてくれたから、重藏も、思ひの儘に、その不平を吐く事も出來たし、別に書面まで出して、鬱勃の氣を、充分に披瀝する事が出來たのである。

伯耆守は、重藏の提出した、長い書面を見て、愈々同情の念が起り、これまでに苦心して、幕府の御用を、勤めたにも拘らず、それに對する、充分の報いもなく、却つて邪魔もの扱ひにされて、居る、その境遇に立つ者としては、この位の我儘は、大目に見てやつても、決して苦しからぬ、といふ考へから、石像事件は、伯耆守の計らひとして、遂に有耶無耶の裡に、葬り去つてしまつたのである。その後、この石像は、豐島郡瀧之川村正受院の境內に遷されて明治年間まで、保存されてあつたが、今ではどうなつたか。

併し、重藏の墳墓は、別に駒込追分町の西善寺にあるが、これは、妻の加來國子が建てたものであつて、近藤守知の墓碑と、並び立てられてあるのが、それである。その墓石には、自休院峻峰玄逸禪定門と刻んであり、肩書には、

文政十二丑年六月十六日とある。

石像の形は、二尺餘りの腰掛姿で、甲冑を着けた、嚴しいものであるが、三尺四方の自然石の上に、安置されてあつたのを、今猶ほ記憶して居る。

少し物語が先走つて、石像の行方や、墓場の話になつてしまつたが、まだ物語は盡きた譯でなく、これから其末路について、詳しい事を、述べる事にしよう。

或日、重藏は、郊外散策に出掛けた。何處といふ當もなく、雜木林や、田園の間を、只だブラ〳〵と歩くのは、鬱屈した氣分を、慰めるにはよいもので、其頃は、瀧之川の附近は、一向に人家も少なく、郊外散策としては、適當の地であつた。

何を思ふてか、重藏は、凝乎と行手の道を、睨めて立停つた。向ふから來るのが、御鷹匠の一列であつた。其頃の御鷹匠なるものは、非常な權力を持つて居て、町人や百姓には、土下座をさせたものである。

昔から、虎の威を藉る狐といふ、諺がある。狐は、大して怖ろしいものではないが、後からやつて來る、虎が怖ろしい爲めに、百獸が道を讓る、といふ事を、かういふ風に、云ひ傳へてあるのだが、それにも增して、狐以上威張つたものは、幕府時代の御鷹匠であつた。

將軍の鷹を、預つて居る、といふ爲めに、その威張りが利くのであつて、御鷹匠の前には、どんな者でも、道を讓つて、相手にならぬやう、心掛ける所から、此役を勤める奴は、それを良い事にして、莫迦々々しい程、巾を利かせて、諸人に迷惑を掛けるのが、常例であつた。重藏の前に、その一列が、やつて來たのである。

『御鷹、御鷹』

と、聲を掛けたのは、暗に、道を避けろ、といふのであるが、重藏は、之れに應じて、

『御人、御人』

と、大きな聲で、叱りつけるやうに言つて、更に道を避けなかつた。其一列の中には、重藏を知つて居る者も居て、遂に、御鷹匠の方で、道を避けてしまつた。

斯うした事は、稍々兒戲に類しては居るが、滿腔の不平を抑へて、面白くない月日を送る、士人としては、獨り重藏ばかりでなく、よく斯うした行ひを爲るものはあつた。

七

肥後熊本の城主、細川越中守の家來に、宇野八十郎といふ者が居た。劍術は、一刀流の極意を究めて、餘程の達人であつたが、平生は、極めて柔和しい質で、他を押退けて、事をするといふやうな風はなく、どちらかと云へば、引込み思案の方であつた。只一つの癖は、酒を飲むと、少しく氣が荒くなつて、さまでゞもない事に、腹を立てる所から、成る可く慎んで、酒席に出るやうな場合はあつても、盃を執る事は、控へ目にして居たから、甚だしい失敗もなく、勤め向は、手堅い方で、上司の氣受けも、惡い方ではなかつた。

家老の長岡監物が、藩中の武藝者を呼んで、一席の宴會を開いた。招かれた三十人餘りの中に、宇野も加はつて居た。長岡は、却々心掛けのよい人であつて、斯うした催しを、自發的に開いては、武藝者の心を收める事に、努めて居たのである。

重役の中に、牧山彈正といふ者が居た。軍學に就いての造詣は、可成りに深かつたが、それを鼻の先に懸けて、頗る慢心して居たので、自分の役柄と、その力を恃んで、他を侮る氣分があり、これが爲めに、藩中では、ひどく憎む者はあつたが、牧山の位地が高いので、誰も遠慮して、大概な事は、その爲すに委せて居た所から、愈々高慢の鼻を高くして、多く藩士の集まる席などでは、人の眼に餘るやうな振舞も、少なからずあつた。

宴會は、今が酣である。無禮講の觸れ出しであつたから、醉の廻るに伴れて、各々に、隱し藝などを出して、笑

ひさゞめいて居た。宇野は、斯うした場合にも、眞面目な態度で、初めは愼んで居たが、それでも、盃の數は、可成り重なつたらしく、大分醉も廻つて、一旦赤くなつた顏が、だん〳〵青くなつて來て、眼の据つて居る容子からすると、持前の癖が出るのも、斯ういふ時ではないかと、思はれる程であつた。

『宇野氏、ちと隱し藝でも出されては、どうぢや』

と、聲を掛けたのは、例の牧山であつたが、宇野は、平生から牧山を、嫌つて居たので、

『拙者は、遊藝人では御座らぬ』

何の愛想もなく、突離した一言に、牧山は、額に疳癇筋を出して、

『誰れが、足下を、遊藝人と申した。拙者は、足下に、隱し藝を出しては如何か、と申したのぢや』

『拙者は、武藝の外に、何事も存じて居らぬ。遊藝などは、士人の恥づる所で御座る』

『これは、可怪しな事を言はつしやる、御主人の長岡殿から、無禮講のお許しがあつたので、各自に、隱し藝を出して居らるゝから、足下にも、何か隱し藝があるか、と存じて、お勸め致した迄の事で御座る。足下に、どれ程の武藝があるか、左樣な事は、拙者の知つた事では御座らぬ』

二人の爭ひが、だん〳〵激しくなつて來て、果は双方、膝を立て直して、高聲になつたから、座中の二三子が、その仲裁に入つて、双方を宥めに掛かつたが、充分に醉の廻つて居た二人は、容易に納まらず、互ひに罵しり合つて居る中に、牧山が、

『藝無し猿』

と罵しつた、言葉尻を捉へて、宇野は承知せず、仲裁の人を押退けて、牧山に迫つた。

『藝無し猿とは何事であるか、苟も武士たる者に對して、猿とは聞き捨てにならぬ雜言、拙者が、猿であるといふ、理由を承りたい。その說明に依つては、重役として黙無相成らぬ』

宇野は、火のやうになつて、怒り出したから、牧山の方でも、負けずに罵しり返す、といふ有樣で、どうしても、納まりがつかなくなつた。そこで、長岡が、仲裁に入つて、双方を宥めに掛つた。長岡に對しては、二人共に、遠慮があるので、やうやく爭ふ事は止めたが、折角の酒宴は、これが爲めに、興も褪めて、滅茶々々になつてしまつた。

牧山が、その婦りに襲はれて、闇擊に遭つた事が、忽ち評判になつて、藩中の騷ぎは、實に大い事になつて來た。其夜の中に、宇野の行方が、判らなくなつたから、その下手人は、宇野である、といふ事に極まつて、すぐに行方の詮議に掛つたが、宇野は、何處へ行つたか、遂に判らず仕舞になつた。

尤も、牧山に對する、平生の反感があつたので、其晩の爭ひは、宇野の方にも、少し出過ぎた點はあつたが、牧山の斬られた事を、密かに愉快がる連中は、宇野の行方を、尋ねる事に、多少の妨害を與へたのは、云ふ迄もない。

八

九州屈指の雄藩たる、細川家の重臣が、暗擊に遭ふて、路上に横死を遂げたばかりでなく、其下手人が、行方を晦まして捕へられなかつた、といふ事は、他藩への聞えもあり、旁以て、これは重大な變事として、藩の重役は、草を分けての詮索に、十分の手は盡したけれども遂に宇野を、捕へ得なかつた。

各種の情報を、綜合して見ると、もはや細川の支配内には居らず、東へ向つて走つた、といふ見込がついたので、江戸の、藩廳へ、詳しく其趣を傳へて、宇野を捕ふべき、嚴しい命令を發したのであつた。

宇野は、牧山を斬つて、其場から、巧みに行方を晦まし、各所を漂流して、東へ、東へと、急ぎ急いで、江戸表へ向つたが、何分にも日陰の身であり、細川家の追跡が、嚴しい事は、想像する迄もなく、追手に捕へられた場合には、熊本へ引戻されて、醜骸を曝す事になるのであるから、如何に急いでも、路は思ふやうに捗らず、やうやくにして、江戸へ着いたのが、半年も過ぎてからの事であつた。

如何に、武藝が出來ても、人目を忍んで、かくれ歩く身としては、萬事が不如意で、果は、衣食の料にも、差支へるやうになつて來て・江戸へ着いた頃は、甚だ見苦しい風態であつた。それにしても、流石に、大江戸の事であるから、町道場を、覗いて歩くだけでも、相當の數があり、一本の手合せに、食事も得られゝば、又幾らかの草鞋錢も貰へるので、一二箇月は、無事に過す事が出來た。

一日、王子の附近に、やつて來て、どこを尋ねると、いふでもなく、あちらこちらと、歩いて居る中に、不圖、細川家の武士に出遭つて、跡を尾けられたので、宇野は、急ぎ足になつて逃げよう、としたが、脹やかな町中と違つて、見透しの田舍道であるから、逃げ通す事は難かしい。宇野も、すつかり覺悟を極めて、此上は、刀に掛けて遁れよう、と、身構へをした時、すぐ後の垣根越に、武士らしい人の影を見たので、其垣根について、ぐるりと一廻りして見たら、小さい門が、開いた儘になつて、居たので、早くも門の内へ飛込んで、身を匿さうとした、途端に、

『何者ぢや』

と、聲を掛けられたので、ハツと思ひながら、其人を見ると、骨骼の逞しい、立派な武士であつたから、

『些と仔細あつて、人に追はれ、身を匿す者で御座る。武士の情、一時お匿まひ下さらば、千萬辱ない』

と、腰をかゞめて頼み込んだ。

『よし、匿まふて遣はす。いづれ仔細は、後から聞く事に致さう』

廣々とした庭内、その一半は、樹木が鬱蒼として、多く人工は加へてないが、自然の幽趣はあり、いづれ大身の江戸武士が、その別莊に、當て居る處であらう。

間もなく、宇野の跡を、追ふて來た、細川の家臣は、宇野と同じやうに、垣根へついて、一廻りすると、小さい門があつて、宇野の姿が見えなくなつたから、さては此門内へ、逃げ込んだものだと思つて、バラ〳〵ツと、駈込む途端に、立派な武士が、ノソリと出て來た。

『お控へなさい』

凛とした聲で、叱るやうに言はれて、細川の家臣は、足を停めた。

『此の一構は・拙者の城廓に等しき住居で御座る。何者の許しを得て、お入りなされた』

『ハツ、これはお咎めに預つて、甚だ恐縮仕る。只今、一人の武士が、此構内へ、逃げ込みました故、それを追ふて參つた爲めに、御挨拶も仕らず、甚だ御無禮で御座つたが、何卒御許し下さい』

『拙者は、最前より庭内を、散歩して居つたが、左樣な武士は、更に見掛け申さなかつた。何かお見違ひになつたのではなからうか……』

『イヤ、慥かに此庭内へ、逃げ込んだに相違御座らぬ』

『併し、拙者は、左樣な武士を、更に見掛けなかつたのであるから、他をお尋ねなさい』

『左樣仰せがあつては、押して申すも御無禮ながら、念の爲め、庭内を一應、探して見度く存ずるが、お許し下さるまいか』

『それは相成らぬ』

『エツ相成らぬとは……』

『いづれの御藩中か、存ぜぬが、その仔細も語らず、強ひて庭内の捜索をなさらうとは、無禮千萬、許す事は罷ならぬ』

その動作といひ、又言葉振りの沈着といひ、普通の武士とも思へず、細川の家臣は、少し怯んで、

『強ひて、疑ふといふ次第では御座らぬが、慥かに御庭内へ、逃げ込んだものと存ずるが、左樣仰せられては、如何とも致し難く、此儘に引取り申すが、而て、御手前の御姓名は、何と仰せらるゝか、我々は、肥後熊本、細川の家臣で御座る』

『ハヽア、細川家の御家臣で御座つたか、拙者は、公儀の御抱へ、近藤重藏と申す者で御座る』

『さては、先生が、有名な近藤重藏殿で御座つたか』

九

豫て、近藤の名は、聞いて居るし、殊に、幕府の直臣とあつては、如何に、細川の藩士でも、睨みは利かず、これには少し困つたが、猶ほ一應は、念を押して見たい氣もして、ムヅ〳〵して居るのを見て、重藏は、

『此上に、猶ほお疑ひがあらば、庭内の搜索は、お許し申すもよいが、萬一、搜索の結果、左樣な武士が、居らぬとなつた場合には、何と爲さるつもりか、先づそれを伺つてから、御返辭申さう』

と、斯ういふ風に出られては、對手が近藤だけに、ウツカリした事は出來ない。

『それ程迄に、仰せられる以上は、お疑ひ申すも失禮、此場は、一時引揚げる事に仕るが、或は再度お訪ね致すやも計られず、其節は、更に御面會下さるやう、豫めお願ひ致し置く』

『何時でも、お訪ね下さい』

澁々歸る、細川の藩士を、ぢツと見送つて、重藏は、靜かに母屋の方へ、足を運び始めた。處へ、樹木の繁つた中から、宇野は、出て來て、重藏の前へ進んだ。宇野が、何か云はうとするのを、重藏はそれを抑へるやうにして、

『仔細は、緩り承る。拙者の跡から、從いて御座れ』

軈て母屋へ來て、客間へ入ると、重藏は、靜かに宇野に向つて、

『どういふ仔細があつてか知らぬが、苟も、武士たるべきものが、逃げ匿れをするといふのは、卑怯千萬の儀と存ずる。一應はお助け申したが、足下を追ふて來た武士は、細川の家臣であると、名乘つて居られたが、足下は、どういふ身分の御仁であるか、又如何なる仔細で、逃げ匿れを爲さるのか、それを承りたい』

『苟も、大小を手挾む身として、逃げ匿れを致す、といふのは、仰せの如く、卑怯千萬で御座るが、これには仔細の

ある事で、お尋ねに從ひ、詳しく其仔細を申述べまする』

これから、宇野は、牧山を斬つた顚末から、江戸表へ逃げて來た、事情を語り、此日に計らずも、細川の家臣に出遭つて、庭内へ逃げ込み、一時の難を免れた迄、事落ちもなく物語つた。

『右樣の次第で、實は、牧山を討ち果した際、潔く切腹致してしまへば、此苦しみは見ずに濟んだので御座るが、何分にも、其際は、切腹致す覺悟もつかず、其場より逃走して、只今では深く後悔いたして居るが、今更に甚だ恥かしき次第で御座る』

『フヽム、左樣で御座つたか。いづれにしても日蔭の身、此先如何なさる心算か、それを承りたい』

『別に、これと申して、深い考も御座らぬが、牧山の一族が、立派に名乘つて、仇討を致す、といふのならば、何時にても、相手を致す覺悟は、持つて居れど、藩の役人に捕へられて、縛り首になる事は、何としても遁れたいと思つて居るので御座る。萬一にも、其他に、然るべき事柄で、此命一つ、御用に立つならば、お使ひ下さるやう、偏にお願ひ申す』

重藏は、宇野の容子を、ぢツと瞶め乍ら、その言ふ處を聞いて居て、何か頻りに考へて居るらしかつた。

『若し、細川家に於て、足下の罪を赦す、と申したら、再び同家に、仕へる所存であるか。それともに、どこ迄も、浪人して終るつもりか。其覺悟を、聞いて置きたいが、どうぢや』

『縱令、細川家に於て、罪を赦し下されても、再び同家に仕へる考は御座らぬ。生涯を、浪人して送りたく、それが、自分の希望で御座る』

『これから先、いづれへ行く考へか』

『何處と申して、行先の的もなく、相變らず、漂浪の身で、其日を送る外は御座るまいが』

『よし、其所存を承つて、置けば、今後の事は、拙者が、何とか心配して遣はさう』

『ハツ、有難き仰せ、お言葉に甘えて、萬事宜しくお願ひ致す』
『當分は、此家に匿れて居たらどうぢや』
『お差支へなくば、左樣に願ひたい』
『食ふ事と、飲むことだけには、不自由はあるまいが、迚も滿足の行かぬ事は、豫め含んで置いて貰ひたい』
『恐れ入ります』

宇野は、言葉の重い方で、重藏の親切に對しては、餘り喋々しく、禮を云はぬけれど、眼には感謝の涙を光らせて、心から喜んで居るのは、その態度でも、判る程であつた。斯くて、宇野は、重藏の保護を受け、安心の日を送るやうになつた。それにしても、細川家との關係は、どういふ事になるか。

一〇

重藏が、蝦夷から連れて歸つた例の正木平太夫は、その後、松平信濃守の手附となり、北地の事情に明るいところから、蝦夷掛りの役人として、最も重きを爲すに至り、本格の幕臣と同樣に取扱はれて、今では下谷の御徒町に、屋敷を貰つて、何一つ不自由のない、立派な身分になつて居た。

是れといふのも、つまりは、重藏の推擧と辨疏が、信濃守を、動かした爲めであるから、重藏の恩義に對しては、束の間も忘れたことはなく、重藏が、不遇の身の上になつて、瀧之川へ引籠つてからも、公務の餘暇ある毎に、訪ねて來ては、慰めることを怠らなかつた。宇野を救ふて、匿まふたに就ても、一應の話を聞いて、その義心に感じ、自分から進んで、宇野と、交つて居たほどである。

今日は、離れの一室に、正木を迎へて、重藏が、心を打明けての相談であつた。

『獨て兼知の通り、宇野の件に就て、折入つての相談ぢやが、手を貸してくれることは出來ないかな』

『手を貸せ、といふのはどういふことをいたせといふのて御座るか』
『これは、堅く秘密を守つて貰ひ度い』
『金打いたしませうか』
『イヤ、それには及ばぬ』
『必ず他言はいたしませぬ』
『それで宜しい』

重藏は、ぐいと膝を進めた。

『斯うして匿まふてはあるが、何時迄も、此儘にはして置けぬゆゑ、何とかして青天白日の下、大手を振つて、歩けるやうにしてやりたい、と思ふて、いろ〳〵考へても見たのぢやが、尋常一樣の手段では、容易に運びもつくまいから、寧そ權略を用ひて、細川家を、抑へつけるの外あるまいと、覺悟を極めたのぢや……』
『而て、この權略といふのは、いかなる事をなさるのて御座るか』
『上野凌雲院の使者と僞稱して、法親王の御名を拜借いたすのぢや。些と危い橋を渡るの感はあるが、斷じて行へば必ず目的は達し得る、と思ふ』

之れを聞いて、正木は、非常に驚いた。流石に、しばらくは詞もなく、ぢツと考へに沈んだ。

『どうぢや、同意してくれるか』
『先生が、自から使者と稱して、行かれるので御座るか』
『無論、拙者が行くの外あるまい』
『……』
『同意出來ぬか』

『同意、不同意は、しばらく措いて、先生が自から其危道をふまれるといふのは萬一の場合を考へまするとくは定められませぬ』

『然らば、不同意といふのぢやな』

けはしい眼を光らせて、重藏は、正木を睨んだ。

『其使者は、拙者が勤めませう』

『それは不可よ』

『何故いけませぬか』

『この使者は、わしに限る』

『併し、萬一の場合に……』

『萬一の場合には、わしが罪をうければよいのぢや』

『それ迄の御覺悟をなさらずとも……』

『人の生命を救ふには、自分が、捨身になる外はないものぢやよ、ハツハ、、、、』

『その御決心を承る上は、強て御留はいたしませぬ』

『同意してくれるか』

『ハイ』

『それは忝ない』

『拙者の役目は』

『家來頭として、從いて行つて欲しいのぢや』

『承知いたしました』

『凌雲院と申すは、輪王寺宮家の勘定方元締をいたして、居るところから、その權力は、三十六坊中の第一位に居り大名旗本等とも、種々の關係を有つて居るので、世に謂ふ寺侍なるものも、少なからず使つて居るのぢやから、わしは、その寺侍に、化けて行かうと、考へて居るのぢや』

『なる程』

『長柄の輿、從者十數名の用意は、足下に賴む。それらの費用として、此に五十金ある』

と、いつて、二十五兩の包を二つ出して、正木の前へ置いた。

『此金子は、事を終つてから頂戴いたしませう』

『とに角、收めて置いてくれ』

『この位の務めをいたすのは、萬分一の報恩と存じます。殊に、自分の昔に比べて、宇野氏を救ふ手傳ひは、愉快の感に堪へませぬ』

『併し、差當り費用は掛るのぢやから、これ丈けは、收めて置いて欲しい』

『拙者も、昨今にては、多少の貯へはありますゆゑ、その御心配には及びませぬ』

『左樣か、然らば強ひては申さぬ』

供廻りのことや、その他の打合せをして、正木は、自分の屋敷へ歸つた。

一一

肥後熊本の城主、九州屈指の雄藩、細川家の上邸へ、上野の凌雲院から、俄に使者が來た、といふので、重役の鳥山庄左衞門が、先づ使者を迎へることになつた。

凌雲院は山内の三十六坊中、最も權威ある寺で、殊に宮樣の勘定方を、一切引受けて居る丈けに、各方面の信用も

厚く、大概の場合、宮樣の御使を勤める事も、ひろく知られて居た。宮樣を背景にして居るところから、どこの大名へ行つても、相當の敬意は拂はれて居たのである。

殊に、此日の使者は、何か深い仔細のあるらしく、北原敬藏といふ侍が院主に代つて來たのである、と聞いて、鳥山は、心中頗る疑ひを抱きつゝ、書院へ、その使者を招じて、應對することになつた。

『手前は、鳥山庄左衞門と申しまする。遠路の御使ひ御苦勞千萬に存じまする』

『凌雲院の名代、北原敬藏と申す者で御座る』

鳥山が、その北原を、つく〳〵見ると、實に立派な風采であるから、流石に凌雲院は、斯ういふ侍を使つて居るのかと、思つて、非常に感心した。

『御使者の御用件を、承りたう存じます』

と、先づ鳥山から、尋ねて見ると、北原は少し膝を進めて、

『實は、院主が、自ら參る可きのところ、本日は止み難き、宮樣の御用事にて、拙者へ、代理として參るやうにと、院主よりの申付けに依つて、斯く罷出ました。その用件は、御當家の御召抱、宇野八十郎と申す者、先般熊本に於て、牧山某を、討ち果して、出奔いたしたる爲め、貴藩に於ては、その行方を尋ねて御制配なさる趣、然るに、宇野は、その後江戸表へまゐり、輪王寺宮樣に縋り、昨今にては凌雲院に、寄食いたし居りますが、何卒同人の罪は御赦し下されて、萬事は、凌雲院へ御預け下さるやう、切にお願ひ申せと、使命を帶びて、態々推參仕りましたが御前へ、宜敷御取做しを、願ひ度い』

と、輕い調子で、いひ出しては居るが、詞の底には、却々力を有つて居る。

斯うした事について、どういふ理由から、凌雲院が、これ迄に力を入れるのか、その點について、多少の疑ひもあり、また宇野が、宮樣の袖の下にかくれた事情も、一應は、聞いて見たく、鳥山は、北原の容子を、靜め乍ら、極め

て丁寧に、問ひ返すのであつた。

『宇野の件につきましては、すでに藩の方に於ても、それ〳〵處分を定め、その行方を搜して居りますが、さらに手懸りなく、頗る當惑の折柄、只今の御掛合にて、いよ〳〵迷惑を感ずる次第で御座るが、宇野は、いかなる關係にて、宮樣へ、お縋りいたしたので御座るか、その點について、くはしく、承りたう存ずる』

『宮樣へ、どういふ事情から、お縋りいたしたか、といふことについては、くはしく申述べることは、御免蒙る。但し、凌雲院へ、直接に御尋ねあれば、或ひは御答へいたすやも計り難いが、若し左樣の場合に立到れば、この件は表向の爭ひにも相成る可く、御當家の御迷惑は、一段の儀と存ずるが、それにても宜敷ば、御當家の御考へ通りになされても一向に差支へは御座らぬ』

萬事に、突ツ刎ねて、斯樣な質問を、物に爲ぬところは、さすがに重藏である。鳥山も斯う出られては、取りつくところがないから、しばらくは考へて居た。

『九州の雄藩、殊に、幽齋公以來の御名家、といはれて居る、御當家の重役が、藩中の者に斬られたとあつては、他家への聞えも、いかゞ御座らうか。また藩臣の取締不行屆の事とも相成り、宇野の陳述一つにて、どういふ御迷惑の起らぬと、いふ限りもなく、双方の不爲此上なし、と存ずるが、貴下の御考へはいかゞで御座る』

と、遠廻しに持ちかける、掛合の妙は、鳥山の心を巧に捉へてしまつた。それにしても、鳥山が、輕々しく承知することも出來ず、斷然はねつけることは、猶更出來ないので、一先づ歸つて貰はうと考へて、

『いづれ當家より、凌雲院樣へ、御答へいたしまする迄、一先づ御引取り下さるやう、願ひ上げたう存ずる』

『それは相成らぬ』

『ゑツ……』

『拙者は、凌雲院の名代で御座ス。從つて、院主も同樣、この場に於て、萬事を決しまゐるのが、使者の本旨で御座

れば、否か應かの御返事を承りたい』

と、高飛車に出て、烏山の頭を、びしやりと抑へてしまつた。

一二

人間といふものは、一人宛汝れて居ると、どれ丈けの違ひがあるか、ちよツと解り難いが、相對して膝を突合せる時、すぐに其差が解る。俗に謂ふ、位負けといふことがあるのは、卽ち其れである。同じ事を言ふのでも、その人に依つて、對手に強く響くといふのが實に不思議である。那の人には、何となく貫祿が無い、といつたやうなことを、世間の人は能く言ふが、その貫祿といふのが、最も大切なものであつて、どれほど偉い位地を占めて居ても、貫祿が無いと、其人らしく思はれぬ。

細川家の重役として、烏山も、相當の人物ではあらうが、何しろ近藤重藏の押手には、受けて堪へる丈けの、力が乏しかつた。今迄に、聞いたことも無い、北原敬藏といふ人、而かも、要が寺侍であるから、烏山の身分に比べたら、非常な相違はあるのだが、斯うして差向ひになると、その人の貫祿で押してゆくから、重藏の北原には、烏山も及ばなかつたのである。

對手の怯んだのを見ると、北原は、もう一つ押してゆくのであつた。

『貴下の御取計ひに相成らず、また、御重役の方々にも御迷惑とあらば、越中守樣に、御目通りいたしたい。大藩の名君は格別の御仁心も御座らうから、拙者より、親しく願ひ上げて見よう。

元來、この事は、貴藩の重役が、酒席の爭論から、身分の卑きものに斬られた、といふのであつて、あまり名譽の事では御座るまい。さればとて、その重役の遺子が、仇討の爲めに、本人所在を搜すといふのでもなければ、左迄にむづかしき事では、御座らぬやうにも思はれる。況して輪王寺宮樣の御醫掛りでもあれば、彼等一人位、御見

遇し下さるとも、貴藩の名折れにも相成るまい。どうあつても、それは相成らぬ、といはれるならば、越中守樣に直々拜謁の上、御願ひ申上ぐる外は御座らぬ』

と、槓杆でも動かぬ、北原の態度を見ては、烏山も、今は何と答ふ可き詞もなく、ぢツと考へ込んでしまつた。しばらくあつて、烏山は、

『然らば、重役の者共へも、篤と申聞けまして、何分の詮議に及びます迄、暫時お待ちうけ下さるやう、願ひ度い』

『何分宜しく、お願ひ申す』

烏山は、その場を去つた。跡に、重藏は、悠然として控へて居る。どこ迄も大膽な態度で、自分が、僞の使者であるなどいふことは、少しも考へて居ないらしい。評議は、大分に手間取つて、やうやく烏山は、出て來た。

『赦し難き者には御座れど、折角の御談示故、一切を宮樣に、おまかせいたして、弊藩よりは、何事も申出ぬことに仕る。此儀、凌雲院殿へも、宜敷お取次ぎ下されたい』

『それは、有難き御沙汰を蒙りまして、本人は、申す迄もなく、院主に於ても、嘸滿足に思はれませう』

この談判は、重藏の思ひ通りで、宇野の一身は、完全に救はれたのである。供頭の正木平太夫も、重藏から、始終を聞いた時には、その大膽な振舞に、只だ驚くばかりであつた。宇野は、之れを聞いて、男泣きに泣いた。

『この御慰は、如何にして報ず可きか。まことに仁義の御取計ひ、千萬難有く存じまする』

と、いつた切り、涙にくれてしまつた。翌日になると、正木は、すツかり服裝を改めて、訪ねて來た。

『先生、この上の御思案は……』

『この上の思案とは……』

『斯樣の事は、やがて露見いたすに違ひない。然る時は、由々敷大事にも相成りませうが、先生は、どうなさる御覺悟か』

『別に一案がある。心配御無用ぢや』

『而て、その一案とは、どういふ事で御座るか』

『凌雲院に、この始末を打明けて、呑込ませてさへ置けば、それで宜しい』

『左樣な事が、出來まするか』

『始めから考へてあるのぢや』

『ふふーむ』

『さ、これから上野へまゐらう』

『……』

『足下も、同道なさい』

『はッ』

斯うなると、正木も、好奇心に驅られて、重藏が、凌雲院に對して、どういふことを爲るか、それが見たくなつたので、進んで同道する事になつた。

一二三

世間といふものは、多く粉飾に依つて保たれ、人間といふものには、皆表裏がある。清淨無垢、生れた儘の純眞は、育つてゆくに從ひ、何時か不知、虛僞に落ち、詐に流れるものだ。

昨今の世態人情は、殊に其れの甚太しきものがあり、油斷も隙もならぬ、恐ろしい世になつてしまつた。多くの人の代表者たる議員に、正しいものが爲有て、大概は、その場限りの塗合せで、胡麻化して居るものばかりだから驚く。人民の代表となつて、良い事を爲る、といふのではなく、その肩書を利用して、自分の爲めを謀るのであつて、その

外には、何も考へて居らぬ。左樣した人を推上げるものゝ方でも、その人を利用して、何か行つて見たい、と思つて、選擧に驅け歩くのであるから、その結果は、想像し得るのである。叩頭、買收、馳走、因縁、これ丈けの事を、除いて、本統の信認投票で、選ばれて來る議員が、果して幾何あるだらう。また、投票する方の人が、よく人物を見立て、誤りなき公正の一票を、行使するものが幾何あるだらう。考へて見ると、莫迦らしくなる。

教育家に、教育家らしい心を有つ人が、どれほど在るか、赤裸々にして見て、眞の教育家といはれるものが、今の教育家中に、果して幾人あるであらうか。その內面にはいつて見ると、驚く可き腐敗で、とても本統の教育家らしいものは、曉天の星と一般、まことに心細いほどである。我等は、斯うした教育家に據つて、子供を託して置くのである。

末世の坊主は、葬式の事務員たるにすぎぬが、それにしても、靈界の人として、多少は敬意を、拂はれて居るのだ。その坊主なるものゝ多くは、みな破戒墮落の輩であつて、口には、道理らしいことを吐かしても、その行ふところは、俗人も及ばざるほどに、汚ないものである。

貰ふことは知つて居るが、與へることは知らない。人を苦しめることは、よく行るが、人に惠むことは、さらにしない、といふのが、末世の坊主の常例であつて、物慾と色慾の外に、何物も無い、といふ狀態である。大震災の當時、寺地を利用して、惡錢を貪り、災後の借地人を虐待して、放外の利得を謀つたのは、坊主の地主に多かつた。佛に使へる身で、高利貸を行つたり、貸家業を營むものは、今でも少なからず在る。檀家を虐めて、金品の寄捨を仰ぎ、それに依つて、一身の榮耀を謀り、或は、寺に傳はる、重代の物を賣つて、女狂ひを爲るものは、殆んど軒並といつて、よい位だ。

寺院に依つて、衣食して居る坊主が、代議士になるのだ、といつて、さかんに蠢動したのは、昨年の事であつた。靈界に在つて、その人らしい行ひの出來ぬものが、政界へ乘出して、何事を爲るつもりであるか。實に苦々しい事で

ある。

德川の末世に及んで、坊主の墮落は、實に甚太しきものがあつた。阿部伊勢守や、大鹽平八郎の手に依つて、一と通りは叩きつけられたけれど、これとても、普遍的に行はれたのでなく、江戸と大阪の一部に留り、ほんの申分的に、一と掃除されたに、すぎなかつた。

上野の凌雲院主は、僧正の位地に在り、法親王の管財人として、その勢力は、實にすばらしいものであつた。東叡山寛永寺の本坊は、卽ち輪王寺であつて、此處には、公現法親王が居られる。那れ丈けの地積を擁して、三十六坊を有し、東照權現を祀れる關係から、德川家の保護は厚く、而かも、宮樣を、御門跡に戴いて居るのであるから、舊幕時代の全盛は、今から顧て、只だ驚嘆の外はないほどである。

從つて、その收得も少なからず有つたことは、改めて、いふ迄もない。凌雲院は、其出納の總てを、扱つて居たのだから、之れが爲めに、無限の權力を有ち、實際に於ては、法親王以上に、その權威を揮つて居た。精算は、年末に、一度爲る丈けであるから、その間の融通は、思ひ通りになされて、凌雲院の本業は、高利貸であつた。貸附の歩合取り、延期の手數料、その他の收入は、擧げて數へ難きほどあつて、凌雲院の內福は、羨望の的になつて居た。年末の精算には、帳面と金包を、法親王の內覽に供へるのであるが、帳尻と、金の折合はぬ時は、銅片を包んで、小判包みと代へ、その數に依つて、總計算を爲る事に、なつて居たのだ。貧乏な大名や、旗本の輩は、多く此金を、利用して居たので、左樣した方面にも、凌雲院の勢力は、延びて居たのである。

重藏も、二百兩餘りの金を借りて、凌雲院とは、知合の間柄であつた。たび〳〵院主に逢ふて、凌雲院の內情を、知つて居るところから、不圖思ひついたのが、僞使者の一幕であつた。

俗に謂ふ、宮樣の御名前騙りで、その對手が、雄藩の細川家丈けに、忽ち露見するのは、必定である。普通の人の氏名を僞るのさへ、却々にやかましい事であるのに、況して、宮樣の僞使者といふのであるから、之れが露見したら、それこそ一大事である。重藏にも、その覺悟はあつたに違ひない。之れを手傳つた正木は、重藏に救はれて、今日の身分になつたのであるから、報恩のつもりで、手傳はしたのであるが、それにしても、重藏の身に誤ちのないやうと、心から望んで居た。

然るに、本人の重藏は、存外に、落付いて居て、充分に成算はあるやうに見えるが、果して巧く切拔け得るか、どうか、正木の心配は、相當に深かつたのである。凌雲院の僧正を談じつけて、諾といはせることは、容易であるまい。いよ〳〵不可となつたら、正木は、死を以て、重藏を救はう、と考へて居たらしい。

正木の心配するほどでもなく、重藏は、凌雲院へ出かけるについて、正木にも同行しろ、といふて、平氣な顏をして居るから、斯うなると正木は、重藏が、どういふ事を爲るか、それを見たくもなつたので、氣輕に、同行する旨を答へたのである。

重藏は、豫て貸借の事で、院主には、いくたびか逢ふて居るので、この日も、たやすく面會を許された。その前から來て居る、十人餘りの客は、すべて借金の言譯と、新たに借入れよう、と爲るものばかりであつた。葬式の申込や、法事の相談で忙しい、といふのなら、どこの寺院にも、有勝ちの事で、別に不思議とす可きでないが、貸借の關係者が、斯ういふ風に詰かける、といふのでは、高利貸の玄關に異ならぬ。坊主のくせに怪しかることである。

奥の一室には、院主の僧正が、帳面を前にして、算盤をパチ〳〵、彈いて御座る。

『さア、どうぞ……』

と、いつて、僧正は、帳面と算盤を、傍へ寄せた。

重藏は、しづかに席へついて、丁寧に、時候の挨拶から始めた。

『拜借の二百兩、だん〳〵の遲延で、何とも申譯御座らぬ』

『その御挨拶では、却つて痛み入ります。利子は、滯りなく運んで下さるので、當方には、何の不都合も御座らぬ。手堅い御方を、對手に致すと、此上もなく安心ぢや、と、何時も乍ら、お噂ばかりいたして居ります、ハツハ、、、、』

『手元が、不如意の爲め、返濟の期限は來て居るが、如何ともいたしがたい。もう少し延ばして、戴くことは出來まいか、いかゞで御座らう』

之れを聞いて、僧正は、少し厭な顏付になつたが、聲をひそめて、

『利子の方は、どうなりますかな』

『持參いたしました』

『ははア、利子は、御持參下されたのか』

『左樣う』

『それならば、別に差支へはない筈ぢや』

『利子は持參いたしたが、再三の遲延で、まことに恐縮いたす』

『返金の遲延は、いくらもあることで、貴下一人といふ譯でもないから、帳面の方は、よいやうにいたして置きませう』

『何分宜しくお願ひいたす』

『併し、御返金が、餘り長引くと、御本坊の方へ、何となく不都合にもなりますから、一時のところ御返金のあつたことにいたしてさらに、改めて貸出した、といふことに仕るから、その段は、豫め御承知下さい』

『萬事然る可く……』

御本坊の名を出しても、宮樣か、貸出しを知つて居られるのではない。僧正は、手箱のうちから銅片を包んで、その上に金額を記したものを取出した。

『この包みへ、近藤重藏殿返金と記しますから、御覽下さい』

重藏は、輕く首肯いて、僧正の爲る儘にして置くと、百兩の包みが、二つ出來て、それを膝の傍に置いた。

『さ、斯ういたして置けば、御本坊への見せ金は出來たから、もう安心で御座る』

利子の外に、いくらか包んで、重藏は、僧正へ渡した。

『イヤ、お堅いことで御座る』

と、いひ乍ら、ニコ〳〵顏で、その手數料と利子は、別の箱へ納めた。

『時に、御院主へ、折入つて願ひの筋が御座る』

『どういふことですかね』

『人一人、お助け下さらぬか』

『ははア、人を助けろ、とは、どういふ事で御座るか』

一五

『實は、斯ういふ次第で御座る。細川家の重役、牧山某と申すものを討つて、熊本を立退いた劍士、宇野八十郎といふ者が、拙者の許へ來て居るので、これを助け遣はさう、と存じて、お願ひいたすので御座るが、つまりは、大した宿意もなく、謂はゞ酒席の爭ひから、武士の意氣地で、斬つたといふ丈けの事、その事情から考へて、之れを助けたところで、別にどうといふことのある譯でもなく、また牧山の遺族が仇討を申出て居る次第でもない。細川家の體面としては、重役を勤めるものが斬られたので御座るから、一と通りは搜し尋ねる、といふのも、無理の無

い處ぢやが、此に相當の人物があつて、其取拔ひをいたしたら、細川家に於でも、輕く承知いたす、といふ見込みもあり、旁以て、貴僧の御配慮を願ひ度いので御座るが、御承知下さるまいか』

僧正は、之れを聞いて、苦い顏をした。

『これは迷惑千萬の御頼みで御座る。愚僧は、僧侶の身として、左樣の事に與るのは、甚だ困る。殊に、細川家とは、何等の因緣もなく、假りに愚僧が、乘出すといたしたところで、何の甲斐も御座らぬ。折角の御頼みではあるが、御免蒙り度い』

『貴僧の御詞は、一應御尤もであるが、拙者にいたしても、細川家に、何の關係もないが、拙者の懷裡へ、飛込んで來た窮鳥を、獵夫の前へ出す事は出來ぬ。貴僧も、御出家の御身として、人一人の生命を、救ふことで御座るから、理窟は、暫らく措いて、一と肌脫いで戴き度いのぢや』

『愚僧が、細川家へまゐつたとて、何の甲斐も御座るまい』

『宮樣の御名代として、御乘出し下されば、即座に極る事で御座る』

『ゑツ、宮樣の御名代……』

『左樣う』

『と、と、とんでもない事ぢや』

『不可ので御座るか』

『これは、斷然おことわりいたす』

重藏は、ぐツと膝を進めた。

『どういたしても……』

『いけません』

『いかなる次第で……』

『宮樣へ、左樣の事は、願ひ出られぬ』

『世間の事には、表裏が御座る。宮樣の御名代と稱して、貴僧の一と言があれば、人一人が助かるのぢや』

『たとへ、何といはれても是ればかりは、おことわりいたす』

『人を救ふ爲めの方便で御座る』

『左樣な方便はなりませぬ』

『併し、宮樣の御仁心として、この位の事は、おゆるし下さらう』

『御ことわりいたします』

『どういたしても、いかんといはれるか』

『いけません』

『然らば、拙者へ、宮樣御名代の御使といふ名儀を、この件限り用ゆる事を、おゆるし下さい』

『猶更ら怪しからぬ儀ぢや。貴い宮樣の御名は、左樣の事に使へませぬ』

『宮樣の御名は、それほど貴いもので御座るか』

『勿論の事ぢや』

『左迄に貴い宮樣が、高利貸を爲なさるのは、何事で御座る』

『ゑツ……』

『宮樣と高利貸と、その釣合は、いかゞなものか、ハツハ、、、、、』

僧正は、顏の色を變へた。重藏の膝が、ずツと進んだ。眼光炯として、凄い光りを放つ。武道に鍛へた鐵腕は、何時延びてくるか判らない。僧正は、その恐ろしさと、宮樣高利貸の一言に、心臟の搖ぐほどに驚いて、只だワナ〳〵

と慓へて居るばかりであつた。重藏は、僧正の膝元に在つた、例の銅片の包みを取つて、之れを僧正の前へ、ずつと突き出した。

『僞金使ひの大山師ツ、公儀へ持出して、詮議をうける事にいたす』

と、いつて、立上りかけた。僧正の驚きは、いよ〳〵頂天に達した。これを公然の沙汰にされたら、それこそ一大事である。

『お、お、おまち下さい』

『何事か、御用で御座るか』

『少々おまち下さい』

『御用とならば承らう』

『それを公然にされては、宮様の御名も出ませうし、愚僧の身分にも關する事で御座る。ま、少しおまち下さい』

『待てといはれるなら、おまちいたすが、どうなさらう、といふのか』

窮所を押へて、退ツ引させぬ、重藏の計略は、すつかり中つた。斯うなつては、さすがの僧正も、承知する外はあるまい。僧侶にあるまじき高利貸、而も、宮様の名を利用して、宮様の金を利用して、私利を謀る。不義の行爲に、一大痛棒を加へられたのである。

一六

銅片を包んで、之れに百兩と記し、帳面尻の計算を合せて、現金の如く見せかけるのは、いかなる事情から爲るにしても、立派な僞金使といふことになるのであるから、その窮所を押へられて『さア何うだ』とやられたのでは、どれほど偉い僧正様でも、恐れ入る外はない。疎に、その對手が近藤重藏といふのでは、いかんともしやうがなかつ

た。公儀の方へ、一應の申譯は立つとしても、御本坊詰の人が承知しまい。法親王様へは、何とも相すまぬことになるから、自分の位地は、いづれにしても失ふのである。

重藏は、銅片の包みを、しツかり握つて、落付き拂つて居るが、僧正の顏は、丸で生きて居る人の色でない。

『ま、ま、おまち下さい』

『待てとは……』

『拙僧が、悪う御座つた』

『悪いといふのは、何が……』

『貴下の御賴みを斷つたのは、拙僧が悪かつたのです』

『否といはれる以上、いたし方が御座らぬ』

『さ、さ、さやうに仰せられずと、ゆつくり御相談下されば、また分別の取直しやうも御座らうから、まア、席につき下さい』

其處に、落ついて來るものと、始めから考へてかゝつたことであるから、僧正が、すつかり弱り込んで居る容子を視て、重藏は、しづかに席へ着いた。

『宇野を助けることは、御承知下さるか』

『宜しう御座る』

『宮様の御思召として、萬事を御取扱ひ下さるか』

『承知いたした』

『それは、千萬忝ない』

『而て、どういふ方法を取れば宜しいか、宜しく御指圖下さい』

『貴僧から、細川家へ御挨拶下されば、それで宜しう御座る』
『挨拶とは……』
『北原敬藏を以て、宇野八十郎の件に付、かねて申入れたる一條、早速の御承知で忝ない。宮樣に於かせられても殊の外の御喜びで御座つた、と申遣はし下されたら、それで宜しう御座る』
『北原といふ御人は、どういふ御方か……』
『即ち拙者の事で御座る』
『ゑツ』
『凌雲院僧正の名代、北原敬藏と稱して、既に細川家へ參り、宇野は、救ひ得たので御座る』
『そ、それは……』
『宮樣の御名前を拜借して、もはや事濟みになつて居るので御座る』
『驚き入つた事ぢや』
『只だ此上は、それが僞りでない、といふことに相成れば、それで宜しいのぢや』
『へへ――』
僧正は、ひとへに呆れて、重藏の大膽な遣口に對しては、何と詞も出ないほどであつた。事茲に到つては、いかんともいたし方なく、殊に、ひどい窮所を抑へられて居るのであるから、どうしても承知する外はない。それにしても、宮樣の御名前を騙つて、斯ういふ事を行つたのは、實に驚く可き事であつて、公然の沙汰にならぬうちに、何とでもして伏せてしまはなければ、自分にも迷惑の及ぶことであるが、再び此事の爲めに、宮樣の御名を使ふのは、まことに恐れ多い事とは思ふけれど、重藏のいふ通りに爲る外はない、と、僧正も、覺悟を定めてしまつた。
『貴下のいふ通り、萬事の運びは、つけまするに依つて、どうか僞金使ひといふことは、仰せ下さらぬやうに、願ひ

度い』
『それは、お詞までもなく承知いたして居るゆゑ、御安心なさい』
『その包金は、こちらへ御返し下さるやう、ぜひお願ひ申す』
『念書を頂戴いたしたい』
『念書とは……』
『二百兩受取つた旨の、證書で御座る』
『二百兩の受取書で御座るかな』
『左樣う』
『……』
『それともに、銅片の包金、二個の念書でも、宜しう御座る』
『……』
重ね〳〵の難題に、僧正は、ます〳〵弱つたが、今は何といたしやうもないので、重藏のいふが儘に、證書を書いて與へた。重藏は、それを受取ると、別室に控へて居た、正木を呼んで、改めて僧正に紹介した。僧正が、萬一にも裏切つた場合には、正木を證人と爲るつもりであつたらしい。兩人の居る前で、僧正は、細川家へ、挨拶の使僧を出したから、それを見屆けて、重藏と正木は、瀧野川へ引上げて來た。
『先生、大い事をしましたな』
『ハツハ、、、、、、慾張りの莫迦坊主には、この位の懲罰は、當然の事ぢや』
幕府へ對する、不平が嵩じて、社會を呪ふ心の起つて來た、重藏は、知らず〳〵のうちに、斯ういふ事も行るやうになつた。

一七

大概な人には、癖癖がある。嘸と逆上た時、大きな聲で、怒鳴するものがあり、または鐵拳を揮つて、人を打つものがある。いづれにしても、癖癖といふ奴は、よくないものである。靜かに考へれば、それほどでもないことに立腹して、對手を叱咤するものがあるのも、その癖癖から起るのであつて、昔から短慮功をなさず、といつて戒めてはあるが、癖癖を忍ぶのは、却々むづかしいものだ。十人のうち七八人までは、癖癖の持主であるから、可笑しい。併し、年の功に依つて、それのおさまる人があり、年と共に、ひどくなるものがある。人さま〴〵の癖癖は、百害あつて一利なきものであるから、愼める丈けは、愼む可きである。

重藏にも、この癖があつて、どうかすると、之れが爲めに、過失を釀すことがあつた。幕府との關係も、實は癖癖の爲めに、上司と同僚から、忌避されるやうになつた事も、いくたびかあつて、終には全く遠ざけられてしまつた。學問、武術、膽力、識見、すべて備つて居た人であるが、何分にも此癖のあつた爲めに、上司に突ツかゝり、同僚と衝突する事があつて、自分から嫌はれるやうに、仕向けて行つた傾きもある。

況して、不遇の身となり、逆境に落ち込むと、一層、其癖が強くなつて、動もすれば叱咤怒號するので、徒らに人を恐れしめる。平生は親切で、よく人の世話も爲るが、癖癖の爲めに、叱り飛ばしてしまふ事が、少なからずあつた。籠師の平助といふのが在つて、重藏の家に出入し、其氣性を呑込んで、よく事へるところから、重藏も、眼をかけて世話をして居たのであるが、花籠を註文されて、平助は、期限を過まつて、ひどく叱り付けられ、やうやく出來したので、それを持つて來ると、註文に違つて居た、といふので、また叱られて、すツかり造り直して、持參すると矢張り重藏の思つた通りに、出來て居なかつた。

『貴樣は、拙者のいふ事を、何と聞いて居るのぢや。斯んなものは役に立たぬ』

と、いつて、その花籠を、踏み潰してしまつた。平助も、少し癪に觸つたので、

『お氣に召さなければ、それ迄の事ですが、何も踏み潰すには及びますまい。わたくしも、丹精を凝して、造つて來たのですから、そんな事を爲れると、宜い心持はいたしません。いくら旦那樣の爲さることでもあまりひどいではありませんか』

『默れツ、貴樣は、拙者の註文通りの物を、つくつて來ないのみならず、彼是れ抗辯するとは怪しからぬ、今一言申さば、その分には差措かぬぞ』

『……』

『拙者が、註文いたした通りの物を、さらにつくつて來るか、どうぢや』

『わ、わたくしには、とても出來ません』

『何ぢや、出來ぬ』

『ヘイ』

『出來ぬといふたな』

『ヘイ』

『それへ直れ』

重藏は、刀の柄に手をかけて、平助を睨みつけた。

『無禮千萬な奴ぢや、斬つてしまふ』

『だ、だ、旦那樣、斬るの丈けは、御勘辨下さい』

『イヤ、斬つてしまふ』

重藏の眼は、凄く光つて、今にも刀を拔きさうであるから、平助は、慄へ上つてしまつた。

『よ、よろしう御座います。さツそく造りますから、御勘辨下さい』
『可し。然らば花籠を持つて來る迄、助けて使はす』
『有難う存じます』
『必ず間違ひなく、五日の間に、つくつてまゐれ』
『ヘイ』
平助は、生命からゞ〳〵立歸つた。果して重藏が、心から怒つたか、どうかは判らないが、脅しの爲めに、斯くいふたにもせよ、一つ間違へば、斬りかねないのが、重藏の氣性であるから、平助も、弱り込んで、引受けたのである。五日經つて、花籠を持つて來た。重藏は、それを見て、非常に喜んだ。
『よく出來た』
『お氣に入りましたか』
『すツかり氣に入つた』
前日の氣色とは、全く打つて變つて、ひどくやさしい。褒美だといつて、花籠の代金の外に、一兩包んで與へ、さらに馳走をして、しきりに平助の技倆を賞めた。何事にも、斯うした調子があつて、これが重藏の、惡い癖であつた。

一八

總てが、斯うした調子で、家庭の取締は、殊の外に嚴しかつた。長男の富藏は、父の氣性を受けて、豪放不羈であつたが、重藏の如く、學殖は深くなかつた。母の國子も、却々良い婦人ではあつたけれど、重藏が、多く家に居らなかつたので、子供等は、長ずるに及んで、我儘の振舞が多く、殊に、富藏の放縱は、可成り酷いものであつた。どこの家でも、總して母親といふものは、子供に甘い。父親が、どれほど嚴ましくいつても、母親は、蔭へ廻つて、子供

を甘やかすものである。道樂を爲る子供には、眼前の智慧があつて、母親を、欺くに巧みなものが多い。また母親は子供の愛に引ずられて、知らず〳〵に子供の惡い事を、手傳ふやうになるものである。富藏は、十九歳にして女を覺え、夜毎に、吉原通ひをはじめた。遊び友達は、みな旗本の次男や三男であつた。
元祿の頃から、江戸の侍は、やうやく遊蕩に、身を持崩し始めて、幕末に近づくほど、それがはげしくなつて來た。德川と終始し、幕府と運命を、共にす可き筈の旗本に、柔弱の輩が多く、御家人なるものに至つては、言語道斷箸にも棒にも掛からぬ奴が、頗る多かつたのは、芝居や講釋の上にも、よく現れて來るので、誰れも知つて居るであらう。相馬の金さんや、色男の直侍は、その代表的人物ともいふ可く、三河以來の豪俠な氣分は、藥にしたくも、見ることは出來なかつた。多くのうちには立派な人物も在つたが、概して獸目な奴ばかりであつた。若いうちの遊蕩三昧、誰にしても多少の經驗はあるが、程度を越えての莫迦遊びは、深く愼しむ可き事だ。
富藏の遊蕩は、日にはげしくなつて、終には母親も、持て餘すほどに、なつて來た。いくら隱すやうにしても、絕對に、隱し得るものでない。何時か、重藏の耳にも入つて、眼に餘る事があつたので、重藏は、國子と富藏と、並べて置いて、
『富藏は、今後、わしの許しを得ずに、夜遊びを爲ることは相成らぬ。たとへ如何なる事情があつても、富藏の爲めに、一文半錢たりと雖も、國子は、わしの耳に入れず、みだりに與へては相成らぬ』
と、嚴重な申渡しをした。この一喝で、富藏の外出は、しばらく無かつたが、それも僅の一時で、友達の誘惑と、女の呼出しが、はげしい爲めに、父の眼を盜んでは、家を空けるのが續くやうになつた、『廓の金には、詰るが習』と、昔から諺の通り、富藏は、すつかり行詰つてしまつた。今迄のやうに、母親を騙して、融通することも出來ず、自分は、部屋住の身で、いかんともしやうがない。
一日、兩親の不在を幸ひ、拜領の紋服を持出して、金の才覺に出かけた。葵の紋の附いた衣服、重藏が、北邊探險

の功勞に對して、將軍から下渡された物である。下谷車坂の佐野屋へ持込んで、それを金に代へよう、とするのであつた。質屋の方では、あまり良い顧客とは思はないが、對手が、近藤重藏の忰である、といふ爲めに、いつも調子を合せて、ほどよく扱つて居たのだ。

『オイ、賴みがあつて來た』

と、いひ乍ら、店の上り口へ、どつかと腰を下ろした。

『これは、お久しう御座いましたな』

『質草も、もう置盡して、不沙汰をいたしたが、今日は、折入つての賴みがあつて來たのぢや』

心のうちには喜ばないでも、そこが商賣柄で、追從笑ひをしながら、番頭は、

『どういふ事で御座りますか……』

『外の事でもないが、これを預けて置くから、二十兩ばかり用達て貰ひ度いのぢや』

『ゑッ、二十兩ですツて』

『うむ』

『それは大した事ですが、この御品は、何で御座いますか』

『まア、開けて見るがよい』

『それでは失禮ですが、拜見いたします』

番頭は、包みを披いて見たが、びつくりした。

『これは、大した物で御座います』

『二十兩は附けられるだらう』

『と、と、どういたしまして、とんでもない事を仰しやる。斯やうな物は、お預りいたす事は出來ません』

『値打がない、といふのか』

『値打の判らない物で御座います』

『それぢや、もつと貸す、と、いふのか』

『御勘辨下するやう、平に御勘辨を……』

一九

富藏は、少し氣色ばんだ。

『斷ると申すのか』

『ヘイ』

『二十兩の擔保には、不足の品か』

『どういたしまして、結構すぎるほど大した物では御座いますが、この御紋服は、お預り出來ませぬ』

『何故か』

『尊い御紋服で御座いますから、後日の御咎が、恐ろしう御座いますので……』

『左樣な事は、決して無い』

『あなた樣は、左樣に仰せられましても、萬一の事が御座いますと大變ですから、どうぞ御勘辨を願ひます』

『これは、拙者の父が、拜領いたせし品故、不正の物とは違ふ』

『さう承りましては、猶更ら御免蒙りたう存じます』

『然らば、この御紋が不可といふのぢやな』

『ヘイ』

『よし』

富藏は、紋服を取上げると、定紋の上から、小さい紙を張つた。

『これなら可いぢやらう』

『ヘイ』

『どうぢや』

『……』

『さア、二十兩貸してくれ』

歳は若くても、武士の子であるから、下手な扱ひを爲れば、すぐ拔くに定まつて居る。父の氣性をうけて、ずゐぶん激しい人だ、といふことも知つて居るから、店の者は、みな慄へて居るのだ。その對手に、なつて居るものは、一だんの迷惑であるが、今更に逃げることもならぬ。斯うした物を持つて來て、彼是れいふのには、初めから覺悟があつて、やツて來たに違ひないから、うツかりした事はいへないので非常に弱つて居るのだ。番頭の返辭が、容易に無いところから、富藏は、頗る焦れ込んで來た。

『オイ、どう爲るつもりか、貸すか貸さぬか、はツきり返辭をせい』

『どうぞ、御勘辨を願ひます』

『貴樣の家は、質店をやつて居ながら、質物を持つて來て居るのに、金は貸せぬ、といふのか』

『この品物では、まことに迷惑いたしますので……』

『御紋服であるから不可と、申すのか』

『ヘイ』

『それぢやから、御紋は隱してしまつた。それでも貸せぬのか』

『……』

『よし、もう何も申さぬ。主人に面會いたさう』

『……』

『さア、主人を出せ』

眼が光つて、聲が高くなつて來た。此時に、佐野屋の表へ通りかゝつたのが、父の重藏であつた。

久振りで、御徒町の正木を訪ねて、その歸りがけに、猶ほ一二の友人を尋ねるつもりで、丁度通りかゝつた時、圖らずも佐野屋の店先から、漏れて來た聲に、耳をすまして聞くと、悴の富藏らしいから、そゾと足を停めて、よく聞けば、いよ〳〵それに違ひない。刹那に、何かはげしい物音が爲ると、店のものが騷ぎ始めた。重藏は、店の格子戸を開いて、ぬゾとはいつた。富藏は、腰の長刀を拔いて居た。

『これツ』

と、聲をかけられて、富藏が、振り返ると、それは父であつたから、これには、流石の富藏も驚いた。

『何をいたして居る』

『ハツ』

重藏が、ヂロリと睨む。富藏の前に、取散してあるのは、拜領の御紋服であつたから、重藏の疳癪玉が、一時に破裂した。

『莫迦ツ』

大喝すると同時に、富藏を、その場へ引据ゑた。恐縮して居る、富藏の頭に、鐵拳は加へられて、髮の元結は切れた。

『店の衆ツ』

『ヘイ』
『駕籠を二挺、頼んでくれ』
『ヘイ』
『はやくいたせ』
『ヘイ』
出入りの駕籠屋へ、子供は飛んでゆく。すぐに、二挺の駕籠は來た。
『さア、乘れッ』
富藏は、默つて刀を納めた。父のいふ儘に、駕籠へ乘る。重藏も乘つた。
『瀧之川迄、大急ぎぢや』

二〇

重藏父子の行つた跡、佐野屋の雇人等は、みな喜んだ。
『跡から來た御武家は、何者でせう』
『顏付が、よく似て居たから、那れが評判の近藤重藏といふ、御方に違ひない』
『左樣すると、親子ですね』
『無論、左樣に違ひない』
『强さうな人だが、那アいふ悴を持つて、さぞ御心配だらう』
『恐ろしい顏をして居たから、家へ歸つたら、ひどい目に逢ふことだらうが、斯うなると、お氣の毒だね』
『弱い者虐めの人困らせだから、少しは、ひどい目に逢つた方が、宜いだらうよ』

『それも左樣だな、ハツハ、、、、、』
今迄懷へ上つて居たものも、斯うして蔭口を叩く。
二挺の駕籠は、瀧之川へ來て、近藤の屋敷へ、下ろされた。重藏は、定めの賃錢の外に、いくらかの酒手をやつた。
駕籠屋は、喜んで歸る。
妻の國子は、二人を迎へた。重藏の顏色が惡く、富藏は、ひどく恐れ入つて居るから、何事かと思つて、さすがに女氣の、心配も深く、わざと避けて、自分の部屋へ行かう、とした。
『國ッ』
『おまへは、今日居らなかつたのか』
『ハイ、ちよつと……』
『外出して居たのか』
『ハイ』
『左樣か』
『ちよツと、用事に出ましたが、何か不都合でも御座いましたか』
『在つた』
『ゑッ、不都合が御座いました』
『うむ』
『そ、それは、どういふ事が……』
『此奴が、拜領の御紋服を持出したのぢや』
之れを聞いて、妻の國子は、顏の色の變るほど驚いた。

『まア〳〵、とんだ事を……』

『而かも、それを質入れいたさう、といたしのぢやが、幸ひわしがそれを見付けたので、取押へて連れ歸つたのぢや』

富藏の方へ、向き直つた母親は、

『大それた事をしてくれて、それではわたしが、獨り困るではないか』

泌々といふ母親の詞は、今更に富藏の胸へは、釘を打つたやうに應へて來る。

『おまへは、しばらく默つて居れ』

と、妻の詞を遮つて置いて、重藏は、忰の方へ向つた。

『この御紋服はどうして、拜領いたしたか、その仔細を、貴樣は、知つて居るであろう。どういふ譯で、之れを質入れをいたさう、といたしたのか、その次第を語れ』

『……』

『言はぬか』

『……』

之れは、何と責められても、富藏の口からは、いひ得まい。父が、艱難辛苦して、天下の爲めに働いた、その功勞に對しての拜領品、而かも葵の御紋服を、吉原行きの費用にする爲め、質入れしようとしたのであるから、斯う改まつて訊かれても、その儘には、スラ〳〵といへる譯がない。

『うぬッ、言はぬか』

すッと立上つた重藏は、忰の襟頭を掴んで、ぐッと引倒した。續いて鐵拳を、二つ三つ、力にまかせて打つたのであるから、骨に應へるほどの痛さであつた。けれども富藏は、見付けられた時から、既に覺悟して居たので、グーともいはず、父の爲すにまかせて居た。やがて、富藏の着衣を、すッかり脫がせて、濡いのを一枚丈け與へた。

『あちらで、謹慎して居るのぢや、一歩でも外へ出ると、ゆるさぬから覺悟して居れ』

如何に、富藏が可愛くても、母親は、口の出しやうもなく、重藏の爲す通り、涙を呑んで、見てゐる外はなかつた。

『おまへにも、ついでにいふて置く。子供といふものは唯だ可愛がる丈けでは不可。甘いうちに辛いところが無ければ、子供の心は引締らぬ。このたびの事はおまへにも、責任があるぞ』

『何とも申譯が御座いませぬ』

夫婦は、共に食事をすませて、はやく寢てしまつた。

夜は、だん〳〵更けてゆく。時しも、嚴寒の候、濡い衣物一枚で、寢具まで取上げられて、富藏は、寒い一夜をすごすのであつた。

夜半になつて、重藏は、不圖眼をさました。厠へはいつて用事をすませ、雨戸をくつて、手水鉢の小柄杓を取らうとした時、庭の井戸端に、誰れか水を浴びて居るものが在る。寒月は、中空に高く、夜半の風は、骨を刺すかと思はれる。さすがの重藏も、ぞつとするほどであつた。

二一

『富藏ッ』

と、不意に聲をかけた。

只見れば、寒の夜更に、裸體で、水を浴びて居るのだ。骨まで冷えて、四肢は、凍えて居る可き筈であるのに、富藏の元氣は、驚く可きほどであつた。

聲をかけてから、重藏は、井戸端へ近付いた。最初の聲に、釣瓶繩を放して、しづかに振返つた時、父の姿の近づくのを見て、富藏は、流れる水の上に、ぴたりと坐つた。

『父上、おゆるし下さい』
『貴樣は、何の爲めに、水を浴びて居るのか』
『……』
『一室のうちに、謹愼いたし居れ、と申付けたのに、何故、斯やうな事をいたして居るのか。その仔細を語れ』
『ハツ』
『どうぢや』
『謹愼して居る可き身が、夜中に堂を出て、水を浴びるのは、あまりの寒さに、暖を取る爲めでありました』
『何と申す。暖を取る爲めに、水を浴びて居た、と申すのか』
『ハイ』
『ふふーむ』
『薄衣一枚に、火の氣もなく、隙間漏る寒の夜風は、どうしても凌ぎ得ませぬ。そこで考へつきましたのが、水浴でありました』
之れを聞いて、重藏は、しきりに首肯いて居たが、
『暖かになつたか』
『ハイ、少しは凌ぎよくなりました』
『その氣性を、有ち乍ら、放蕩に身を持崩して、御紋服まで質入れいたさう、としたのは、何といふ愚な事ぢや』
『恐れ入りました』
『惡かつた、と、思ふか』
『ハイ』

『話す事がある、此方へ來い』
『ハツ』
富藏は、體を拭いて、傍らの樹の枝にうちかけて置いた、薄衣を取つて着た。その擧動を、重藏は、ぢつと見て居る。
やがて、父子は、書齋へ入つて、對坐になつた。これから重藏は、泌々と意見を加へた。それを聞いて、富藏は、心から悔たらしく、ひとへに恐縮して居た。
その事があつて十數日の後、朝はやく出かけた重藏は、夜遲くなつてから、歸つて來た。
『富藏ツ』
『ハイ』
『ちよツと參れ』
父の前へ出た、富藏は、
『今日は、いづれへおいでなされました』
『どこといふことなく、漫歩きに、一日をくらしたのぢや』
『而て、御用は……』
『土産物を求めて參つた』
『ははア、土産物を……』
『うむ』
『母上も、さぞお喜びで御座りませう』
『イヤ、貴樣の喜ぶ物を、求めて參つたのぢや』

『ゑッ、わたくしの喜ぶ物とは、何で御座りますか』
『只今、見せて遣はす』
と、重藏は、立上つた。書齋を出て、庭石傳ひに、垣根の外へ出ると、男の從者を連れて、一人の婦人が立つて居た。
『さぞ、寒かつたであらう』
女は、少しはにかみ乍ら、
『いゝゑ……』
『さ、もうよいからはいれ』
『ハイ』
男の方へ向つて、
『遠方を御苦勞であつた』
『ヘイ、どういたしまして、へ、、、、、』
『これは、少しばかりぢやが、ほんの志ぢや。この寒さでは凌ぎがつくまい。どこぞで一ぱい飲つてまゐれ』
『あ、ありがたう存じます』
『一同にも宜しう申してくれ』
『ヘイ〳〵、よく申します』
男は、急ぎ足に立去つた。
『さア、まゐれ』
『ハイ』
女を連れて、重藏は、元の書齋へ戻つた。父の振舞を、少し不審に思つて居る、富藏は、深い注意を有つて、父の

戻つて來るのを、待つて居たのだ。父の背後から、從いて來た女を、富藏が、一と目見て、
『ハツ』
と驚いた。その女といふのは、自分が馴染んで通つた、芳原の娼婦であつた。
『富藏ツ、どうぢや』
『……』
『父の土産物は、この品ぢや、ハツハ、、、、、』

二二

富藏の身にして見れば、全く思ひ設けぬ事で、あまりの意外に、父の心を汲みかねて、何と答へのしやうもなかつた。
『どうぢや、氣に容らぬか』
『恐れ入りました』
『今後は、身を慎んで、家名を汚さぬやう、心がけてくれ』
叱る時は、峻嚴此上もなく、癇癪にまかせては、打ちも爲れば、蹴倒すこともあるが、何事もない時は、まことに物靜かであり、人に對しても、親切を盡す、妻や子に對する場合も、矢張り其通りであつて、癇癪から放れた重藏は、實に良い人であつた。元來が、學者肌の武人で、世帶の苦勞とか、米櫃の心配とか、左樣したことに直接の關係は有たなかつたが、北邊の探險に、人の知らぬ苦辛はして居るから、存外に、思ひ遣りの深い所もあつて、俠氣にも富んで居た。
悴の富藏が、御紋服質入れの一條から、ひどく父の怒りに觸れて、寒夜の薄衣に堪へず、月光を浴び乍ら、庭の井

戸に掛かつた。雄々しい氣性が、父の怒りを和げて、それから娼婦を連れて來る迄のことは、世間並の親には、ちよいと見られぬことである。獨り胸を痛めて居た、母の國子も、良人の扱振りを見て、やうやく安心した。富藏は、ひとへに恐縮したが、併し、心のうちの喜びは、改めて言ふ迄もない。

瀧之川の生活にも厭きて、どこかへ移らうと、考へたのは、その前からであつたが、富藏に妻を迎へさせて見ると、猶ほ更、移轉の必要はある譯だ。庭内は、可成り廣かつたけれど、家は、その割に狹く、親子で、二た夫婦となつては、猶更の事であるから、急に引移りの計を立てることになつた。

どうせ差控の身の上で、これといふ役目もないのであるし、それに郊外の生活を、やつて見ると、市中の屋敷住ひは、とても煩はしくて、爲る氣になれぬ。健脚を、誇つて居る人であるから、自身に、搜し歩くことになつた。郊外の寂しい田舍道を、ブラ〳〵と歩いて居るうちに、一日のことであつたが、圖らずも例の文晁に出逢つて、それから目黒の不動尊に拜詣することになり、那の邊を、どういふ定まりもなく、一と廻りして、やうやく氣に容つた所を、見付けた。

『オイ、文晁』

『先生、何てすかな』

『この邊が、至極良いと思ふが、貴公は、どう思ふ』

『小さい丘を控へて、一面に見渡す、田園の眺めは、實に千金に價ありでげす』

『どうぢや、この邊を、ずつと手に入れて、住居にいたさうか』

『宜しいでげしやう』

『地主を、聞いてくれぬか』

『へー、承知いたしやした』

文晁は、氣輕に駈け拔けて、向ふの田圃に居る、百姓男の傍へ、立寄つた。

『モシ、そこのお百姓さん……』

『はア、何だな』

『那のおさむらひの立つて居なさる邊りは、何といふ人の持地所かね』

『この邊は、ずうつと半之助さんのもんでがすよ』

『半之助さんでは判らないが、どこの半之助さんだね』

『澁谷村の三田村半之助といふのでがすよ』

『ははア、澁谷の半之助といふのかね』

『へー』

『それは有難う』

『旦那』

『何だね』

『持主を尋ねるからは、地所でも買はうといふのかな』

『先づ、そんなところだ』

『ナカ〳〵慾張りだから、そのつもりで掛合ひなさいよ』

『左樣かね』

『この邊ぢやア評判の剛慾者だからな』

『そりやア、御親切に有難う』

文晁は、重藏へ、その通りを執次いだ。

『先生、對手が惡いやうでげすから、止めたらどうでげす』

『イヤ、左樣な事は構はぬ』

『剛慾者だ、といつて居やしたが……』

『多く與へたら、それでよいのぢや』

『ハツハ、、、、、、相變らずでげすな。先生の一流て、話は早解りでげすが、あんまり高いのはつまらないから然る可き人に頼んで、掛合つて見るですな』

『萬事は、貴公にまかせる』

『宜しい、萬事は拙者が、下話をいたしやせう』

『たのむ』

二三

文晁の骨折で、地所は、やうやく手に入れた。普請好きの重藏は、殆んど毎日のやうに、詰めかけて世話を燒く。瀧之川の別邸で、さらに新らしい、知識を得て居るので、この普請には、一だんの工夫が積まれた。

本業の畫は、不性で容易に書かぬが、普請に趣味を有つ文晁は、頼まれもせぬのに、わざ〳〵世話燒の手傳もすれば、設計の相談にも乘つた。

大工は、技倆のすぐれたのを選んで、物解りの爲る重藏の事であるから、下方の心附けも、充分に行屆くので、普請は、思つたより早く出來上つた。瀧之川から移ると、友人を呼んで、披露の宴も開いた。忰の嫁は在り、住居は薪らしくなる。重藏の氣分も、しばらくは明るかつたが、此に意外の凶變が起つて、一家の破滅を來たす事になつた。

富藏と地主半之助との關係に、とんだ紛れが生じて、思ひも寄らぬ、殺傷沙汰が、その因をなしたのである。

昔でも、今でも變らないのは、慾張りの地面持ちが、人の困るのは、百年も堪へる、といつた調子で、不當の利得を貪る事である。殊に、徳幕時代の地面持ちには、一種の權威が有つて、謂ゆる地主樣なるものゝ尊敬されたことは昨今の比ではなく、これを良いことにして、地主の威張ることも、大いものであつた。半之助の持つて居る地面は、可成り廣いもので、祖先からの大百姓として、澁谷から目黒へかけての大地主では、屈指の方であつた。

那の邊が、昨今になつての開けやうは、實に驚くの外はない。昔は一反幾兩で、賣買された田畑が、今では、一坪何十圓でも、羽毛が生へて飛ぶ。その發展振りは、恰で夢のやうである。江戸が、東京と變つて、四十年の間に、世相は、全く一變した。日清日露の二大戰役を經て、商工業の範圍が、世界的になつて來た爲めに、市内の住居は追々に至難しくなり、郊外へ、移る人の多く、折も折とて、世界の大戰爭は、さらに各人の生活に迄、一大影響を起して、郊外の發展は、人口の激增も伴つて、著しく眼について來た。

それに續いて、例の震災が、郊外住居を促して、大概なものは移りゆく。從つて、地價の騰貴は、日を追ふて甚だしくなり、貧しい百姓でも、相當の金を得て、持地を手放し、大きな地面持ちは、一躍して數十萬の富をなす、と、いふの有樣で、僅少の收得をせゝくつて、小作人を虐めて居たものが、今では富有の身になつて、安樂の生活に、入つて居るものも、少なからず在る。

併し、幕末の頃の目黒は、そんな譯には往かず、土地の繁昌も、僅に不動樣の御蔭を、頼みに爲る位ゐであつたから、月に三度の參詣者も、交通不便の時代とて、よほど信仰の熱いものでなければ、目黒まで、足を延ばすものは少なく、深川詣りで、間に合はせるものが多かつた。その代り、幽閑靜寂の境地としては、この上もなき、良い土地であつた。

重藏の新居に選んだ、廣い庭内に、富士山を、其儘に移したやうな、高い丘の在つたところから、富藏の思ひ付きで、これを更に大きくして、その頂上へ、富士神社を祀り度い、と考へて、父の意見を求めた。

『父上わたくしの考へは、いかゞで御座います』
『少し俗に墮する恐れはあるが、貴樣の樂みとして爲ることには、敢て故障はいはぬから、取り掛かつても可からう』
『御ゆるしを得まして、有難く存じます』
『高い丘を、さらに高くする、といふ丈けならば、別に差支へはないとしても、神社を祀る、となれば、社寺の掛り へ屆を出して、そのゆるしを得なければ相成るまい』
『その儀は、宜しく願ひ上げまする』
兎に角、願書を認めて遣はすから、貴樣が代つて、御掛り役人へ願つて見ろ』
『何分お願ひいたします』
『可し』
重藏は、富士神社を祭祀する旨の願書を認めて、富藏へ渡した。その頃には、いかなる名義を以てするにしても、祭祀を新たに設けよう、と爲るものは、掛り役人のゆるしをうける事に、なつて居て、此事丈けは、士人の資格あるものに、限られて居たのである。
一般の町人や百姓は、祭祀を設けることは出來なかつたので、それが爲めに、士人の名義を借りて、願出の形式丈け、つくる事になつて居たが、これは全く近藤家の爲ることであるから、直にゆるしをうけたので、富藏は、その工事に着手した。

二四

工事は進んで、もう落成に近くなつた。
昔の江戸ッ子には、信神心が深く有つて、神詣は、年中行事の一つになつて居た。どういふ爲めの信神か、それは

能く判らないけれど、とに角、神佛へ詣ることは、誰れも皆な爭ふて行つたものである。殊に、夏季の大山詣りと、富士登山は、勇みな江戸ッ子が、誇りの一つであつて、之れをした事のないものは、人前に出て、大きな口を叩き得ぬ位であつた。
今のやうに、新聞の無い頃ではあるが、目黑に『お富士樣が移つてくる』といふ評判は、忽ちに傳へられて、未だ落成もせぬうちから、垣根越しに拜みに來るものも、追々に多くなつて來た。そこで、富藏は、不圖考へついて、之れを公開して見たくなつた。然るに、その富士山は、庭内の一隅に在つて、すぐ隣地は、半之助の所有になつて居たから、拜詣するものゝ爲めには、頗る都合が惡く、さればといつて、庭内を横切つて、さうした人を入れる、といふのは、世間の思惑もあり、旁以て、半之助の地所を、利用する必要が起つて來たので、富藏は、さつそく半之助を訪ねて、この相談に及んだ。
要するに、富士神社へ詣るものは、半之助の地所を通る事になるから、それに向つて、裏門を設け、入口をつくつて、一般の參詣者を入れよう、といふのであつた。
『それは、結構な事で御座います』
『左樣いふ事にいたしても、宜しいであらうか』
『神樣を信仰することは、わたくしも、人一倍深いのでありますから、左樣いふ事に相成りますならば、まことに結構と存じて居ります』
『然らば、さつそく工事をさせる事にいたさう』
『併し、若樣へ、御願ひが御座います』
『どういふ事か』
『裏門の前へ參詣人の休み茶屋をつくつて、わたくしが、そこへ出張る事にいたしたいのですが、いかゞで御座いま

せう』

『それは、差支へない』

『その代り、儲けの半分は、若樣の方へ、收めることにいたしませう』

初めから、富藏は、そんな事を考へて居たのではない。參詣人の懷裡を狙つて、一文半錢の利をせゝらう、といふやうな事は、さらに思つて居なかつたが、斯ういはれて見ると、そこが、人間の淺ましさで、いくぶんの慾も出て來る。

『新たに家を建てゝ、それだけの備へを爲るには、相當の費用も要るであらうから、その一部は、わしの方でも、引受けることにいたさう。』

『左樣いふ事に相成りますれば、まことに結構で御座います』

『費用の明細書を見て、負擔をきめる事にいたさう』

『有難う存じます。就きましては若樣へ、御相談が御座います』

『それは』

『神社の方へ、參詣にゆきます人達は、それ〴〵に、お賽錢を上げませうが、若樣が、御自分で、それを彼是れなさるのは、却つて御迷惑でありませうから、わたくしの方で、一切を取扱ひまして、すつかり勘定をしてから、その半分を、持參いたす事にいたしましたら、いかゞで御座いませうか』

『左樣してくれたら、此方は、極めて好都合であるに依つて、一切は、おまかせいたす事にしよう』

『それでは、わたくしが、御引受けいたしました』

是れで相談はすんだが、それから半之助は、江戸中の講社を覗け歩いて、それ〴〵に跡りをつけて見ると、存外に人氣が湧いて、充分の見込みも附いたから、大がゝりに支度を始めた。不動の講社が、江戸には多く在つて、それへ

跡りをつけたのであるから、この計畫は、思ひ通りに大當りであつた。開帳の時の賑はひは、また格別であつたが、それにつれて、不動樣の方へも、參詣人がゆくから、双方の利益は、いふ迄もなく、半之助の儲けは、頗る多かつた。

珍らし物好きの江戸ッ子は、追々に傳へ聞いて、參詣の人は、日に殖えるばかりである。それに山氣の多い半之助が、間斷なく運動して居るから、目黑の富士神社は、忽ちに知られて、不動樣の外に、また一つの名所が增した、といふ評判であつた。

けれども、茶店の利益は、半之助一人占であつて、神社の賽錢も、半之助が、毎日やつて來ては、引上げてゆくばかりで、さらに計算も示さず、その割前も、持つて來る容子がないので、富藏も、少し疑ひを有つやうになつた。

二五

富士神社が繁昌して、參詣人の足が續くほど、その收入は、多くなる譯で、半之助の懷裡は、頗る溫かいやうであるが、富藏の方へは、一文の分配も無く、何時迄も、此調子で居ては、甚だ詰らない、と考へたので、富藏は、半之助へ、使ひを出して、呼び付けよう、とするが、詞を左右にして、容易に出て來ないから、富藏の疑ひは、いよ〴〵深くなつた。

半之助が、富藏の前へ出ると、

『若樣』などといつて、しきりに煽て上げ乍ら、蔭に廻れば『莫迦樣』といつて、舌を出し乍ら、嘲つて居る事は、富藏の方では、少しも知らなかつたのである。初めから、引ッ掛る氣で、半之助は、富藏を綾なして居たのだが、世間不見の富藏には、それが解らなかつたのだ。

元來、半之助は、心の良くない奴で、附近の人も、多くは對手にしないほどであつた。澁谷から目黑へかけて、大きい地面持ちではあつたが、放蕩に身を持ち崩して、その地面も、大概は質入れしたり、他に賣渡したりして、既う

身代は、左り前に、なつて居たのであつた。女と酒の道樂ばかりでなく、賭博を好んで、どこの賭場へも出入して、交はるものは多く、博徒の下廻りであつた。

半之助の妻、お龜といふのが、またしたゝか者で、元は新宿の橋本に、女郎をして居たのを、半之助が、通ひ詰めた揚句、少なからぬ金を投じて、家へ引入れ、親類のものが拒むのを斥けて、妻とした位で、役者は、半之助より一枚上であつた。今度の事件も、實は妻の指金であつて、半之助を、表面に跳らせたのであるが、計畫は思ひ通りに行つて、富士神社の收入は、存外に多くなるところから、夫婦の鼻息は、頗る荒く、出入の博徒も、酒の勢ひを借りて騷ぎ廻つて居るほどであつた。

お龜は、神社裏の掛茶屋に詰めて、參詣の客を、ほどよく扱らつては、茶代を絞り上げて居るので、半之助も、殆んど此方へ、入り浸りになつて居た。

『お前さん、ちよツと行つておいでなさいよ』

『どこへ……』

『どこツて……ぼんやりして居ちやアいけないぢやないか、那のばか樣のところへ、菓子の折の一つも持つて行つて、何とか胡麗化して來るのでさアね』

『うむ、左樣か、昨夜も使ひが來たツけな』

『それだから、先手を、うツて置かなけりやいけないぢやないか』

『お金のことを、いひ出せないやうに、うまくやツておいでなさい』

『よし、承知した』

『この次には、わたしが行くから、今度丈けは、お前さんが、行つておいでなさい』

『よし〳〵』

半之助は、お龜に煽りつけられて、富藏のところへ、やつて來た。

『どうも、若樣、御ぶさたをいたしまして、何とも相すみませんでした』

座敷へはいり乍ら、揉み手をして、追縱口を叩く。

『さ、これへ……』

『へイ〳〵、恐れ入ります』

と、いつて、席についた半之助は、しきりにお世辭をいつて、しやべり立てるが、金の事は、一言もいはない。

『神社の方も、お蔭を以ちまして、大した繁昌で御座います。こんな事は、今迄にないといふ評判で、江戸の町々では、どこへ行つても、神社の噂さばかりだといふことですが、これも偏へに、若樣の御力で御座いまして、有難い事で御座います』

『收入も、大分有るやうぢやな』

『へイ、その方も、都合よくなつてはまゐりましたが、何しろ掛茶屋の方が、何も彼も新しく爲るので、入費も澤山に要かつて居ますから、今のところでは大して殘りもいたしませんが、いづれ近く精算いたしまして、こちら樣の方も、それ〴〵に御挨拶をいたすつもりで御座います』

『物の定まりは、はつきりいたして置かぬと、後日の紛れにもなるから、その邊の事は、よく心得ても居らうが、はやく精算をいたしたらどうぢや』

『承知いたしました。さつそくに取りかゝりまして、申上げる事にいたします』

『開帳してから一ケ月目にもなるので、一度くはしく開いて見たい、と思つて、いくたびも使ひを出したのぢやよ』

『よく相わかりました。萬事は、家内に取扱はせて居りますから、いづれ家内を伺はせまして、精算はつける事にいたします』

『どうか、左樣してくれ』
『ヘイ〳〵、宜しう御座います』
侍の體面があるので、富藏は、この上に押してもいはず、ほどよく話はすんだ。半之助は、立ちがけになつて、
『これは、まことにお粗末な品で御座いますが……』
と、菓子折を出した。
『そんな事は、遠慮して欲しい』
『イエ、ほんのお禮の印で御座いまして、どうぞお納めを願ひます』
無理に、菓子折を置いて、半之助は、歸つて行つた。

二六

その次には、お龜が、やつて來た。宿場女郎を勤めて、みツちり叩き上げた腕であるから、富藏には、口を開かせずに、胡麻化して歸つてしまつた。斯くて、同じ事を繰返し乍ら、また一と月餘り過した。富藏は、もう堪忍が出來なくなつて、半之助の家へ、談判に出かけた。
『神社の賽錢は、どういふ風になつて居るか、その精算をして欲しい。また、この掛茶屋の收益も、どの位になつて居るか、それも知り度い、と思つて居るが、一向に報告がないから、斯うして訪ねて來たのだが、今日は、大體の說明をして貰ひ度い』
態度も、詞も丁寧にして、話の緒を開くと、半之助は、不審の思入れをして、
『それは、どういふ事ですか、わたくしには、頓と解りかねますが、この掛茶屋の利得が、たとへばいくらあらうとそれは餘計な御尋ねで、あなたに、くはしいことは、申上げるにも及びますまい。賽錢も、斯うして世話をして居

る以上、わたくしが、それを貰つたところで、大して儲かる、といふ譯でもなく、根掘り葉掘り、訊かれる筋合の事でもないのですが、全體、あなたは、何を考へ違ひをして、そんなことを仰しやるのですか』
『ゑツ、何ぢや。そ、それは、本氣の沙汰か』
『本氣にも、嘘氣にも、この外に答へのしやうはねえのだ』
と、半之助の容子は、今迄と變つて、甚ぼ怪しからぬ口振であつた。嚇と、全身の血が熱くなるほど、癇癪は、こみ上げて來たが、ぢツと堪へた、富藏は、
『冗談をいふては不可、賽錢も、掛茶屋の收益も、半分づゝ分ける、といふ約束があつたのを忘れたのか』
『ヘー、誰れが約束したのですか』
『誰が……そりや、お前が、わしと約束したのではないか』
『と、とんでもねえこツた。誰れが、そんな莫迦氣た約束なんぞ、爲る奴があるもんか、つまらねえ事をいつちやアいけねえ、ハツハ、、、、、』
『然らば、左樣な約束を、いたした事はない、と申すのか』
『勿論だ』
『ふふーむ。さては、わしを騙したのぢやな』
『騙すも、騙さねえも……丸で知らねえこツた』
『うぬツ』
富藏が、膝を立直し乍ら、ぐつと睨みつけると、半之助は、いよ〳〵呆け顏になつて、
『ハツハ、、、、、脅かしちやアいけねえぜ。こつちには、覺えのねえ事だから、知らねえといふ迄の事だ。ヘン、面白くもねえ』

火鉢の前に、坐つて居た女房が、

『お前さん、もうおよしなさいよ。そんな人にかゝりあつて、大きな聲を出すと、見ツともないからね。二た言目には、侍風を吹かしやアがつて、何のこツたい、神樣のお賽錢を狙つたり、掛茶屋の揚げ錢を掠めやうなンて、この頃の侍は、油斷も隙もなりやアしない。きつぱり斷つて、二度と掛合に來ないやうにしたら、いゝでせう』

『己れも、さう思つて居るから、斷つて居るところだ』

『お前さんが、しツかりしないから、莫迦にされるンだよ。それに二度も三度も、土産物を持つて行つて、一と通りの御挨拶は、濟んで居るのだから、これから先は、こつちの心持ち次第といふものだ。忌やに御禮の催促をされたンぢやア、もう煎餅一枚だツて、持つてゆかねえ迄のこツた』

夫婦揃つて、飽迄も嘲弄する。次ぎの座敷には、四五人の破落漢が居て、それ〴〵に柄物を持ち、腕を捲くつて、今にも飛出さう、として居る。

歳こそ若いけれど、そんなことに恐れる富藏ではないが、何分にも對手が惡い。こんなものを向ふに廻して、力づくの爭ひをしては、第一に父の名が出るし、また自分にも、多少の弱味はあるのだ。

理窟は別として、苟くも身分ある侍が、神社を看板に、金を得ようとしたのは、生涯の誤りであつて、そんな事が、世間へ聞えて表沙汰になれば、家名にも傷のつく譯であるから、半之助の方に、思ひ切つて、强く出られては、いかんとも爲ることが出來ず、その日は、嘲罵をうけた儘で、空しく引取る事に、心を定めて、

『宜しい。さういふ事なら、この場は、お前等のいふ通りにして、一先づ引取るが、いづれ改めてしやうもあらう』

と、詞を殘して、掛茶屋を出た。跡には、一嘲笑の聲が起つて、手を拍ち乍ら、囃し立てる奴さへあつた。

二七

多少の道樂こそ行つたが、未だ親がゝりの富藏には、うぶなところがあつた。固より惡い才智のある人でなく、半之助などを相手に、金儲けの相談に乘つたのが、最初からの過失であつた。苟くも、幕府の士人ともある可きものが神社を看板に、金儲けを行はう、とした事が、既に間違つて居たのだ。その際に乘ぜられたから、半之助の爲めに、うまく弄ばれたのである。

半之助も、根からの惡人ではない。女房のお鶴が、海千山千のあばずれであつたから、それに唆されて、斯んな事も行るやうになつたのだ。それに、惡い道樂があつて、親ゆづりの地面は、多く人手に渡り、僅に、殘つた地面も借金の抵當になつて居る、といふやうな、ひどい事になつて居たので、いくぶんは、自棄も手傳つて、つい唆される儘に、富藏を一ばい、はめ込んだのである。掛茶屋の方へ引上げてからは、毎日の如く、博徒の下廻りが、集まつて來るので、惡い事ばかり敎へられ、話に聞く丈けでも、惡黨の爲ることが、羨ましく思ふやうになつて、半之助の心は、いよ〳〵墮落するばかりであつた。富藏に、嘲罵を加へた時も、さうした連中が、五六人やつて來て、しきりに煽りつけたばかりでなく、その連中も、一しよになつて、富藏を辱めたのであつた。

富藏は、極度の憤りを、ぢつと抑へて、屋敷へ歸つてから、深く考へに沈んだ。

『父に、斯んなことは話されず、さればといふて、他人にも打明けられぬ、自分の仕出來した事は、自分で、處置をつける外はない。若し、この事が、世間へばつと知れて、寺社掛りの耳へでもはいると、それこそ恥の上塗りであるから、一日も速に、半之助との關係を絶つ外に、方法は無い』

と、思案を定めて、その翌日は、出入りの者を集め、俄に木柵をつくらせて、掛茶屋の方からは、全く出入の出來ないやうにしてしまつた。その代り、自分の庭の一部に、その入口をつけたから、參詣の人は、自由に這入れるやうになつて居るから、信者には、何の不便も無く、小さい休息所を設けて、澁茶の一ばいは、飲めるやうになつて居るし、而も無料でよい、といふのであるから、參詣に來る人々は、却つて喜ぶ位であつた。

參詣の人に變りはないが、獨り困つたのは、半之助夫婦であつた。斯うなつて、見ると、掛茶屋の方へは、頓と立寄るものもなく、いづれも素通りになつてしまふから、商賣は、全く上つたりになつて、一文の收入もなく、況して今迄のやうに、賽錢へ手をつけることもならず、これには何と爲ることも出來ず、殆んど弱り込んでしまつた。

『ネー、お前さん』

『何だ』

『何だぢやアないよ。那の若造も、とんだことを爲るね』

『うまい事を考へやがつた』

『感心して居ちや、しやうがないぢやないか』

『だツて向ふで爲ることだから、手のつけやうはねえ』

『忌々しいから、この腹癪を考へようぢやないか』

『うむ、何とか考へてくれ』

『男のくせに、考へてくれないて、意氣地なしだね』

『何といはれても、己れには、うめえ考へが出ねえのだから、しやうがねえ』

『わたしの考へでは、思ひ切つた、厭がらせを行つて、つまり何も彼も、捲き上げてしまふのが、宜いと思ふが、お前さんは、どう思ふね』

『左樣なりやア結構だが、何も彼も捲上げるツて、どうしやうといふンだ』

『お富士樣を、こツちは取つてしまふのさ』

『そんな事にならうか』

『ぜひ、左樣しやうぢやないか』

『どう爲りやアいゝンだ』

『少し資本が要るよ』

『金が要かるのか』

『はア……』

『いくらばかり要かるのか』

『左樣だね』

と、お龜は少し考へて居たが、やがて首肯いて、

『五十兩あれば、いゝと思ふが、何とか都合しておくれな』

『ゑツ、五十兩だツて……』

『はア』

『困つたな』

半之助は、うなだれて、考へ込んだ。

二八

『何時まで、考へて居るンだね』

お龜は、半之助へ詰寄つて、返辭を促した。

『何しろ、この頃の己れは、すツかり詰つてしまつて、どうにも金の工面は出來なくなつたのだ。實をいへば、お富士さんの賽錢と、店の上りで、息を吐いて居たのだから、今更五十兩ないて、いはれても工夫はつかねえよ』

『お前さんの苦しいのは、わたしの方が、よツぽど能く知つて居るが、何といつても澁谷の三田村ぢやアないか。古

川に水絶えず、といつて、五十兩位の工夫は、つきさうものぢやアないか』
『それが、却々に、さういかねえのだ』
『お前さんは、何故、そんなに意氣地なしなンだね』
『金の事ばかりは、力盡くにいかねえからな』
『ヘン』
『何が、ヘンだ』
『あんまり意氣地がないから、ヘンだよ』
『だツて、見込のねえことは、しやうがねえぢやねえか』
『勝手にしやアがれ』
『手前は、己れに惡態を吐くのか』
『當前さ』
『こン畜生ツ』
半之助は、お龜に、ひどく究めつけられて、少しムシヤクシヤ腹になつたので、お龜の横ツ面を、ピシヤリと毆つた。お龜は、そんな事に怯むやうな女ぢやない。いきなり半之助へ、武者振りついた。犬も食はぬ、夫婦喧嘩が始まつて、二人は、ドタン、バタン、やつて居る。ところへ、のそりと、はいつて來たのが、博徒の下廻りで、御免の安といふ奴であつた。夫婦の中へ、割つて入り、やうやく引分けてから、
『半さんも、お龜さんも、大げえにしねえな、第一見ツともねえぢやねえか』
『安さん、すまねえ』
『半さんが怒るのは、よく〳〵の事だらうが、それにしたツて、お龜さん、どうしたツてえのだ』

お龜は、ずツと遮んで、
『斯ういふ譯なんだよ。』
と、それから喧嘩の筋を、一と通り話した。
『なる程、よく解つたが、そりやア些ツとむづかしいこツた。そこで、お龜さんに聞くが、その金が出來たら、どうしやうといふのだね』
『隣りの屋敷へ、坐り込ませて、思ひ切り厭がらせを、爲るつもりさ』
『どうしやう、といふのだ』
『つまり、富藏ツていふ人の、これがね』
お龜は、小指を出して、
『元は吉原に居て、わたしと同じやうな事を、やつて居たのだから、いろ〳〵の人に出て居るのを幸ひにそれを材料にこだわりをつけるのさ』
『誰れか買つたものが在るのか』
『そんなものは、ありやアしないよ』
『それぢやア、こだわりのつけやうがなからう』
『そこで、お金が要るのだよ』
御免の安は、さすがに惡い奴丈けあつて、すぐ悟つた。
『左樣か〳〵、うめえ事を考へたもンだ。矢ツ張り半さんよりも一枚上だ』
『いやに煽てゝ、冗談ぢやないよ』
『煽てる譯ぢやねえが、そんな事は、半さんにやア考へがつくめえ』

『うまい考へだらう』
『先方が、身分のある人だけに、それは應へるだらう』
『感心ばかりして居ないで、夫婦喧嘩の處置をつけておくれな』
『其奴は己れが引受けよう』
『ゑッ、お前が引受けてくれるッて……』
『うむ、己れが、一番坐り込まう』
『そりやア有難いね』
『その代り、うまくいつて、お富士樣を、捲き上げたら、半分は、己れのものだぜ』
『慾張つて居るね』
『買つた事もねえのに、買つたといつて坐り込むのだから、あんまり宜い役廻りぢやアねえ、それに、五十兩の金の工面までするのだから、そのくれえの餘得がなけりやア、出來ねえぢやねえか』
『それも左樣だね。併し、お前が行くのなら、お金は要らない譯ぢやないか』
『二人や三人の合棒はつれてゆくから、矢ッ張り金は要かるのだ』
『なるほどね』
三人は、これから相談して、御免の安は、仲間のゴロツキを集めにかゝつた。

二九

富藏の妻は、吉原の娼婦であつたが、容貌も美しく、氣立は至極やさしい婦人であり、重藏夫婦に仕へても、孝行を盡したので、富藏の身持ちも直り、一家の平和は、他人の羨むほどであつた。小さい時に、吉原へ、身を賣られて

何も彼も、女一と通りの事は、廓の修業であつたけれど、すッかりすませて、その斷については、之れといふて、非難し得ぬほどの女であつた。自分は、賤しい勤めをしたものだ、といふことを、深く恥ぢて、さらに外出はせず、家の内にばかり居て、よく富藏の機嫌を取り、重藏夫婦には、さらに逆らつた、事がなく、今では物堅い親類の人達も以前のやうに、卑むものも少なくなつて、重藏の鑑識に叶つた丈けある、といふて、感心するものが多くなつた。

今日は、重藏夫婦と連れ立つて、富藏は、親類の某方へ出かけた。その留守を狙つて、御免の安が、二三人のゴロツキを伴ひ、のそりと、はいつて、來た。執次に出た下女が、慌たゞしく奥へ、かけ込んで來た。

『御新造樣……』
針仕事に餘念のなかつた、富藏の妻、お絹は、振返つた。
『こわらしい人が、御新造樣に、お目にかゝり度い、といつて、お玄關に居りますが、どういたしませう』
『それは、どういふ御人かゑ』
『大きい聲では申されませぬが、近所のゴロツキのやうで御座います』
『お金貰ひかしら……』
『さうでござんせう』
『それでは、之れをあげて下さい』
いくらかを包んで、下女へ渡した。下女は、それを持つて、玄關へ行く、お絹は、また針仕事をつゞけた。
玄關で、騷がしい人聲、何か投げ打ちでもするやうな、いづれにしても、おだやかならぬ物音であるから、お絹はしづかに立上つた。バタ〳〵〳〵といふ足音、下女は、息をはづませながら、座敷へ、かけ込んだ。
『大變で御座います』
『靜かになさい』

『でも、大變で御座います』
『どうしたの……』
『お金包を投げつけて、暴れて居りますので、逃げてまゐりました』
『少ないとでもいふのかゑ』
『何が、何だか判りませんが、御新造樣へ逢へば判る、といって、威張って居るので御座います』
『わたしに……』
『ヘイ』
『可怪しいね。不足なら增してあげてもよいが、女ばかりのところへ、暴れ込んで困らせるとは、何といふ人達だらう』
『どういたしたら、いゝでせう』
『困つたね』
ところへ、ドカ〳〵はいつて來たのは、一と目見た丈けで、ゴロツキといふ事は判る。
『オイ、お絹ツ』
と、いひ乍ら、御兎の安が、尻を捲くつてどツかり安坐をかいた。自分の名を呼ばれたので、お絹の驚きは、一と通りでなかつた。
『廓に居た時は、大層やさしくしてくれたが、斯うした屋敷の御新造樣になると、知らぬ顏のお半さん……こりやア薄情すぎやアしねえか』
お絹の顏は、見る〳〵蒼白になつた。どう見ても、覺えのない人ではあるが、賤しい動めをした女が、堅氣の身になつてから、以前の事をいはれるほど、辛い思ひをするのは、誰れにしても同じ事である。

『わたしは、お前さんのやうな御方を、少しも存じませぬが、只今は、主人も不在で、女ばかりの事でありますから主人の歸りました上、お話は、伺ふことにいたしませう』
『オイ〳〵、冗談ぢやアねえぜ。此處の主人に逢つてしまつちやア、身も蓋もねえのだよ』
『どういふ事か、わたしには、さつぱり解りませんが』
『今の身分になつちやア、さういふ外はあるめえが、廓に居なさる時、せつせと足を運んだ男だぜ』
『わたしには、何としても覺えがありません』
『お前の方で、いくら覺えがねえといつても、こつちは、忘れて居ねえのだから、そこに因緣はあらう、といふものだ』
『那アいふ勤めをして居る時は、いろ〳〵の御方にも出ましたが、お前さんのやうな御方には、少しも覺えがないのですから、何といはれても御返事のいたしやうはありませぬ』
『それぢやア、さうとして置かう。その代り此處の主人が歸つたら、改めて掛合をする事にしようから、よく考へて置きねえ』
と、思ふさま忌味を列べて、ゴロツキは歸つたが、お絹は、涙が一時にこみ上げて來て、その場へ泣き伏してしまつた。

三〇

重藏夫婦に先立つて、富藏は、歸つて來た。お絹は泣顏をつくろふて、出迎へたが、富藏は、座敷へ通ると、お絹の容子に眼をつけた。

『絹ッ』
『ハイ』
『どういたした』
『イエ、別に……』
『泣いたな』
『……』
『留守中に何事かあつたのか』
『……』
『何もかくす事はあるまい』
今迄も、泣き通して居た、お絹の涙は、絞り盡してある筈だが、富藏に、やさしくいはれると、またせぐり上げてしばらくは詞なく、再び泣き伏すのであつた。
『いかゞいたしたのぢや』
『ハイ』
『泣いて居ては、判らぬ』
『ハイ』
『これッ、何事ぢや』
『ま、まことに相すみませぬが、わたしは、お暇を戴き度いので御座います』
『ゑッ、暇をくれと』
『ハイ』

あまりの不意に、富藏は驚いた。
『そ、そ、それは、どういふ次第ぢや』
『相すみません』
『何が、相すまんのか、わしには、少しも解らぬ』
『賤しい勤めをいたして居りました身が、斯うしてお情をかけていたゞきましたのは、女子の冥加と存じて居りましたが、もうわたくしは、あきらめました』
『何を……』
『わたくしが、お屋敷に居りましては、あなたの御名を汚すばかりで、御兩親様にも相すみませんから、今日限り、おいとまをいたゞき度いので御座います』
『それは可怪しい。お前が、廓の勤めをいたして居つた事は、父上も、御承知の上ぢや。而かも、お前の落籍は、父上が、御自身に遊ばしたので、わしは、初めから通ひつめて居たのぢやから、猶更らの事ではないか。斯うして、一つにくらすやうになつてからも、相當に月日は經つて居る。何も、今日に及んで、左様な事を申出る、といふのは、どう考へても、わしには、可怪しいとしか思へぬ。これには何か深い仔細があらうから、先づ其れを語つて見なさい。分別は、それを聞いてからの事ぢや』
『あ、ありがたう存じます』
『仔細もいはずに、只だ有難いとは、何の事か、いよ〳〵解らぬ』
『それほどまでに、わたくしを、可愛がつて下さる、その御心が、嬉しう御座んす』
『ハツハ、、、、それは廓に居る時からの事ぢや。今更に可怪しな事を、申す奴ぢやのう』
『その御心に背いて、わたくしが、おいとまを願ひますのは、御家名の御爲なり、またあなたの御身を、思ふてで御

座ります』

『そりや、どういふ譯か』

『實は今日……』

と、これから留守中の出來事を、一通り打明けて、

『わたくしには、少しも覺えのない者で御座いますが、先方で、さう申します上は、强ひて爭ひますのも、あなたの御名の汚れと存じまして、とに角、わたくしは、おいとまをいたゞきまして、淵川へでも身を投げる外は御座いませぬ』

始終を聞いて、富藏は、苦笑を禁じ得なかつた。

『左樣な事か』

『ハイ』

『それならば宜しいから、此儘に、いたして居れ』

『……』

『御免の安といふ奴は、半之助方へ出入いたす、ゴロツキぢや。察するに、富士神社の一條から、半之助の仲間が、斯うした惡策を案じ出して、わしに、恥辱を與へよう、といふにすぎぬのぢやから、わしにも考へがある、その事については、決して心配いたすな』

『この上に、あなたへ、御心配をかけましては、相すみませぬから……』

『わしは、心配などいたして居らぬ。今後は、わしが、掛合の對手になるから、安心いたして居れ』

『それでは、わたくしが、どういたしても相すみませぬゆゑ、却ってわたくしは、おいとまをいたゞいた方が……』

『お前は、なぜ左樣解らぬ事を申す。いとまを使はすことは相成らぬ』

『それ迄に御心配をかけましては……』

『わしの勝手ぢや』

富藏は、すツと立つて、書齋の方へゆく。跡には、お絹の啜泣きが聞える。

三一

お絹は御免の安を、客に取つた覺えが無い、それについては、少しも疚しいところはないが、只だ對手が惡いので、非常に弱つたのである。假りに客として迎へた事があるとしても、廓に居る頃の事ならば、今の身の上になつて、何の恐れることもないが、それを、いひ掛りにして騷がれると、富藏の名が出るから、その點に於て、お絹は、身を切られるほどに、苦痛を感じるのだ。富藏が、よく自分を、理解して居てくれる、としても、それに滿足して、心を安んじて居ることは、どうしても出來なかつたのである。

今更に、廓に育ちし、自分の薄倖を嘆いて、只だ涙の外はなかつた。夜毎に變る仇枕、いかに心の紐を締て居ても體は、金ゆゑに人の弄ぶにまかす、といふ果敢ない身の上であるから、どんな客にも出るが、左樣した事のあつたのを、堅氣の身になつても、いひ掛りの材料に使はれては、迷惑でもあり、又恥かしくもある。況して、さらに關係のないものが、以前の客である、と、いひ張つて、忌がらせを爲るに至つては、何としても忍ぶことの出來ないのがお絹の立場であつた。

富藏は、お絹を慰めて、自分の書齋へはいらうとした。ところへ、丁度、父の重藏が、歸つて來たので、啣嗟の覺悟を、父にぶちまける氣になつて、父の居間へ、ずツと通つた。

『お歸りで御座いましたか』

『うむ。今やうやく歸つたところぢや』

『母上は……』
『先方へ泊りになるぢやらう』
『左樣ですか』
『些と、折入つて父上へ……』
『何と申す』
重藏は、膝の向を變へた。
『まことに申譯のないことをいたしまして、相すみませぬ』
『そりや、どういふ事か』
『實は庭内の富士神社に就きまして……』
『その事か、それならば聞くにも及ぶまい』
『ゑッ、何と仰せられます』
『いづれ一度は、もつれの起る事と思ふて居た。半之助との紛紜であらう』
この一言を聞いて、富藏は、身の縮むほどに驚いた。
『父上は、何として其れを御承知でありました』
『その位の事が判らずに、重藏の今日があるか』
『はッ……』
『私利に渦するものは、その道に敏く、貴樣のやうなものに、引摺られる譯がない。併し、すでに貴樣と半之助が、しッかり組合つた後に知つたので、その儘にいたして置いたが、何時か一度は、必ずもつれるものとは察して居たのぢや』

『左樣仰せられましては、何とも恐縮の外御座りませぬが、その次第を一と通り……』
『まア、待てッ』
『はッ……』
『その次第は聞くまい』
『何故で御座ります』
『聞いたところで詮なき事ぢや。いづれ汚ない爭ひに極つて居るから、その次第を聞かずに、裁いて遣はさう』
『災の元は、富士神社に在る。仍つて神社は、庭内の奥深く移して、一切の參詣を差留めてしまへば萬事は、それで相すむ譯ぢや、ハツハ、、、、、』
父に、斯ういはれては、いよ〳〵恐縮の外なく、富藏は、冷汗を拭いて居る。豈夫に、お絹の一條は、富藏にも、いひ出し得ず、この事丈けは、終に默つて居たから、重藏も知らなかつた。翌日は、重藏が自ら出入のものを指揮して、富士神社を、庭の一隅に移し、その跡の山は、きれいに取崩してしまつた。從つて裏手の入口は、板塀を繞らして、出入の出來ぬやうにしたから、評判の富士神社も、それで跡形のない事になつた。わざ〳〵遠方から、參詣に來たものは、只だ呆氣にとられるばかりであるが、疑惑の眼を以て、その成行には注意した。
御免の安は、富藏の不在を狙つて、お絹を、困らせに來た丈けの事で、その以上、どうする事も出來ず、富藏の方で對手にしないから、掛り合ひをつける事もならずに、其儘に、日を送るの外なかつた。半之助の苦しみは、さらに一と通りでなく、神社を的に、新しくつくつた家、掛茶屋の處分さへ、いかんとも出來ないで、困り拔いて居る。そのうちに四方八方から、一時に起つた債權者が、さかんに攻め寄せて來たので、半之助は、いよ〳〵自暴自棄になつた。

三二

人間の心は、實にあさましいものだ。半之助が、自分の窮境を、少しでも樂にしたい、と考へて、お坊ちやん育ちの富藏に、一ぱい食はせた迄は、まことに上出來であつたが、肝腎の富士神社へ、參詣の人が來なくなれば、虻蜂取らずになつてしまふ、といふ事は考へず、我慾ばかり突ツ張つて、揚句の果が、富藏に掛合込まれたので、いひ度い三昧の罵詈を浴びせて、それが爲めに、富藏を怒らせ、神社への通路を絶たれたのは、半之助に取つて、致命傷であつた。而も、神社への參詣者は、相變らず盛んであるから、要するに、元も子も失つて、富藏を、獨り肥すやうになつたところから、窮餘の一策として、お絹に忌がらせをやつて、見たが、是も何の手應なく、却つて、重藏の計らひで神社は、別の方位へ移され、參詣の人は來なくなる。斯うなつては最早いかんとも、いたし方がなかつた。それも、是も、みな自分の剛慾と、不義から起つた事である、といふことには、氣が注かず、却つて、近藤一家に對して、強い怨みを有つやうになつたのだから、莫迦々々しいにも程度がある。

富藏は、妻の絹に係る一條は、父にも告げず、單に神社の事ばかり訴へて、その方の處置は、うまく決いたから、お絹の身にも障りはなく、夫婦の交情は、いよ〳〵濃かになるばかりであつた。見ること、聞くこと、半之助には、癪に觸る事のみで、どうしても勘忍が出來ない。御免の安も、折角の芝居が、一文にもならなかつたばかりでなく、己れの持出した、費用の埋合せさへ出來ぬ、といふので、何か行つて、この腹癒をしたいのだが、對手は、幕臣の近藤重藏が、その父である、といふ丈に、いくぶんの氣遲れもあつて、容易に決しかねたが、何時まで考へて居ても、只だ月日の經つばかりであるから、いつそのこと、なぐり込みをやつて、散々な眼に逢はせたら、腹の蟲も、いくらかおさまるだらう、と、半之助にも相談の上、いよ〳〵、なぐり込みの支度にかゝつた。昔の人は『莫迦に附ける藥はない』と、いふて居るが、全く其通りで、今の世に到る迄、莫迦につける藥は、未だ發明されないが、どうかすると

斯んな事を考へて、新聞の記事になる奴が、いくらも在る。

重藏と富藏は、親類に用事が在つて、はやくから出かけた。その隙を狙つて居たのだから、半之助や御免の安は、小躍りして喜んだ。

『さア、斯んな都合は、またとねえから、はやくやつつけてしまはうぜ』

『よからう』

その附近には、安の子分になつて居る奴が、二三十人居るから、先づ其れ等の連中を集めて、すつかり支度が出來た。

『何でも構はねえから、ぶちこはしをやるのだ』

『合點だツ』

『眼につく器物は、がら〳〵にしてしまふのだ』

『面白え、ぶちこはしなら、馴れツ子だ』

『手早にやつて、うまくづらかつてしまふのだから、調子を外しちやいけねえぜ』

『そんなことは、馴れたもんだ』

『さア、出かけろ』

それ〴〵に柄物を携へて、近藤の屋敷へ押寄せた。留守居には、若徒と老僕、それに下女が居るばかりで、お絹は富藏の書齋に入つて、草双紙を讀んで居た。ところへ、御免の安が、眞ツ先になつて、ゴロツキが二十人餘り、一時に暴れ込んだので、何の防ぎも爲し得ず、家財器具は、大半うちこはされ、之れを拒んだ老僕は、半死半生に毆かれた。お絹は、この騷ぎに、書齋の窓から庭へ出て、奥山の隅にかくれたので、辱めを免れたが、下女は、裸體に引剝れて、ひどい目にあはされた。

『もう、引上げろッ』

と、御免の安が、聲をかけたので一同はどつと、喊聲をつくつて、庭の裏木戸を破り、チリヂリになつて逃げた。半之助夫婦は、此奴等の騷ぐ跡から、今迄の腹癒に、尾いて廻り、暴れる丈暴れて、安と共に引上げた。

不在中に、斯んな騷ぎがはじまつて居るとは、重藏父子は、少しも知らなかつた。親類を訊ねて、かねての用事がすんでから、御馳走が出たので、存外に手間取れた。富藏は、今朝出かける時から、何となく氣分が惡く、これを推して、父につ、いて來たのだが、ま〻〳〵惡くなるばかりなので、父に先立つて、歸る事にした。

『父上、一と足先きに歸ります』

『よし』

『氣分が惡いので、まことに失禮ではありますが、歸らせていただきます』

『途中、醫者に診て貰つて、歸りなさい』

『それほどでもありませぬから、とに角、歸宅の上、寢せることにいたしませう』

『それが可からう』

駕籠をいふて貰つて、富藏は、急いて歸つて來た。ゴロツキ等の引上げた跡で、屋敷のうちは、滅茶苦茶になつて居た。

二三

先づ、打倒されて居る、老僕に手當を加へ、下女に、衣物を着せてやり、それから事情を訊く事にした。老僕は、勸兵衛と謂ふて、永い間の勤めに、一度の失敗もなく、富藏が、生れる前から居て父の重藏が、蝦夷地へ渡り、いく多の苦辛をして居る、その不在中は、母に事へて、よく留守をしてくれた。富藏が、生れて育つ頃は、抱いたり負ふ

たりして、乳母の代りも勤めてくれたので、富藏は、一番に馴染んで居た。武家對丈をするほどのものは、誰れも武鑑を、心得て居るか、といへば、左樣でもない。勸兵衛は、忠實な老僕ではあつたが、その方の事は丸で駄目であつた。若徒は、一期半期の雇人で、勤めよい屋敷だ、といふので、近藤家には、永く居たといふにすぎない。これも、腕づく〻にかけては、お話にならないほどの弱蟲であつた。さればこそ、思ふさま荒されて、手出し一つ出來ずに、ゴロツキ等を、逃がしてしまつたのである。

『若旦那さま、ひど〻目に逢ひました』

『而て、この亂暴狼藉は、何者の仕業か』

『半之助が、ゴ〻ロツキを誘つて、大勢で押してまゐりまして、この始末で御座います』

『ふ――む』

お絹も、慄へながら出て來た。

『よくお歸り下さいました』

『オツ、お前は、何事もなかつたか』

『ハイ、わたくしは、庭の植込みの中に、かくれて居りました』

『傷つけられないで、まア可かつた』

『この間、お話いたしました御人達が、先立ちになつてまゐつたのでしたが、本統に恐ろしう御座いました』

『幾人ほどでまゐつたか』

『二十人位は、居りましたやうに思はれます』

『可矣』

富藏は、すぐに立上つて、自分の居間へはいつた。お絹もつゞいてはいると、

『お前は、、、あちらへ行つて居れ』
『、、、あなた、どう遊ばします』
『これから、半之助方へ掛合にまゐるのぢや』
『それは、お止し遊ばして下さいませ』
『何故か……』
『、、、あなたが、おいで遊ばしてはいよ〳〵事が面倒になりますから無事ではすみますまいから、これは、代人をやつてお掛合下さるやうにして下さいませ』
『苟も、武士の屋敷へ、この亂暴を仕掛けたのぢやから、先方にも、相當の覺悟はあらう。、、わしが、自身に掛合ふ外はない』
『でも……』
『心配いたすな、素町人の二十や三十、何の事はないぞ』
『……』
『父上が、お歸りになつたら申上げてくれ、富藏は、この仕返しに隣家へまゐつたが、決して御心配下さるな、と、よいか』
『ハイ』
袴の股立を、取り上げて、襷十字に綾取つた。一刀の目釘をしらべて、すツくと立上つた時の、顏の凄さに、お絹は慄へて、何と詞をかける事も出來なかつた。
御免の安は、子分を逃して置いて、自分は、半之助方へ引上げ、夫婦を對手に、祝ひのつもりで一ぱいやつて居た表の格子を開けたものがあるので、女房は、立上り乍ら、聲をかけた。

『どなたです』
『……』
『はいつて來たのは、誰れだゑ』
『……』
『可怪しな人だね、默まつて居て……』
障子を開くと、富藏が、立つて居た。
『、、、あらッ……』
『うぬッ』
と、一と足、ふみ込むや、腰の一刀、拔手も見せず、さツと切下ろした。
『きやッ』
と叫んで、半之助の女房は倒れた。
『どうしたンだ』
半之助が、立上つたところへ、富藏が、跳り込んだ。安が、手早く炭草盆を投げつけた。富藏はい、それを拂つた。座敷は、一面の灰神樂になつた。逃げようとした、半之助の肩先へ、ざツくり切り込む。
『う――む』
悲鳴をあげて倒れる。臺所で、働いて居た、二人の子分が、柄物を持つて飛出す。一人を切つたので、他の一人は勝手口から逃出した。重傷に倒れた夫婦へ、また一刀づゝ切り付けた。

三四

富藏は、血刀下げて裏手へ出ると、今、御免の安が、垣根を這ひ上るところであつた。

『己れッ……』

と、叫び乍ら、逐ひ迫つた。安が、外部へ飛下りよう、とした時、富藏の延びが屆いて、頭から背中へかけて、深く切りつけた。

『わッ……』

血に染んで、垣根の外へ落ちた。

重藏は、富藏の歸りを案じて、すぐに引返したが、屋敷へ着いて、お絹に、事情を聞いたから、半之助の家へ、かけつけると、出會がしらに、一人のゴロツキが、棍棒を持つて、駈出して來たので、

『待てッ』

と、聲をかけた。

『コン畜生ッ』

重藏へ打つてかゝる、引ッ外して、さつと拔き打ちに切つた。ゴロツキは、赤に染んで倒れた。途端に、富藏が出て來た。

『父上ッ』

『オー、富藏か』

『屋敷の容子は、お聞き下さいましたか』

『聞いた』

『わたくしの不都合から、この血塗れ騒ぎになりまして、何とも相すみません』

『野手は……』

『半之助夫婦、御免の安、みな切倒しました』

『それでよい』

『ハッ』

富藏は、涙を拭いた。叱言もいはずに『それでよい』とたつた一と言、富藏は、それが嬉しかつたのだ。

『さア、屋敷へまゐれ』

『ハイ』

父子は、連れ立つて歸る。

『富藏ッ』

『ハイ』

『この上は、始末を認めて、筒井伊賀守殿へ、自身に、訴へて出ろ』

『ハイ』

『事情は、少しも僞らず、一切を明白に書け、わしが、一人を切つた事も、かくしては相成らぬ』

『それ丈けは……』

『莫迦ッ』

『はッ』

『この上に、いつはりを申立てゝ相すむか』

『併し、罪は、わたくしに在ります。父上の事は、全く不意の出來事で御座いますから、申立てるには、及びますまい』

『それにいたしても、わしが、一人を切つたのは、かくすなと申すのぢや』

『ハイ』

『わしが、口授いたすから書け』

『ハイ』

公邊への屆書は、重藏の馴れて居るところで、富藏は、父のいふ通り書き取つた。

『貴樣は、その書面を携へて、伊賀守殿へ屆けにまゐれ、別に一札を附ける』

重藏が、自身に書いて屆書、その二通を携へて、富藏は、伊賀守の役宅へ出かけた。

始終の容子を聞いて、次の間に、泣いて居たのは、お絹である。

『わたくしの事から、斯んな騒ぎになりまして、申分けが御座いません』

『絹か』

『ハイ』

『お前の悪い事はない。みな富藏の過失からぢや』

『イヱ、さうでは御座いません』

『そりやどうした譯か』

『實は、斯ういふ譯が御座いました』

と、お絹は、例の一條を、くはしく物語つた。富士神社の事は、よく知つて居たが、お絹の事は、今迄少しも知らなかつたのだ。

『左樣か』

『で御座いますから、わたくしの身の上について』

『まア、待てッ、左樣な事もあつたらうが、第一は神社の事からぢや。お前には、少しも罪はない』

『若旦那さまの罪は、どういふ事になりませう』

『先づ切腹ぢやらう』

『ゑッ、切腹で御座います』

『左樣ぢや』

お絹は、聲をあげて泣き伏した。剛氣な重藏も、ぢつと涙を堪へては居るが、胸は張り裂けるやうであつた。重藏の妻は、二三日前から、親類へ、行つて居たのだが、若徒のしらせに驚いて、今歸つて來た。これも、事の意外に驚いて、只だ呆氣にとられて居るばかりであつた。

三五

勘定奉行の筒井伊賀守は、重藏と富藏から差出した、始末書を讀んで、頗る驚いた。重藏に對しては、その不遇に同情もして居たし、また爲人には、深く推服しても居た丈けに、その驚きは一層であつた。

富藏が、自身に出頭した、と聞いて、すぐに面會する事にした。

『抑者は、伊賀守ぢや』

『はッ、このたびは、私の不束から、意外の珍事を引起し、まことに恐縮いたし居りまする』

『事の理否は、しばらく措いて、自身に訴へ出でたる段は、神妙に存ずる』

『御詞にて、痛み入ります』

『書面の趣に依れば、父重藏も、關係いたし居るやうに思はれるが、この儀はどうぢや』

『御賢察の通り、父も關係いたし居ります』

『爭鬪の終始ともに、關係いたし居つたか』

『否、左樣では御座りませぬ』
『然らば、どういふ次第か』
『父は、偶然に來り會はせたので御座ります』
『偶然に來り會はせたので御座ります』
『偶然に來り會はせて、人を斬つた、といふのでは、ちと腑に落ちぬ』
『……』
『拙者の考へでは、重藏に關係のないやうにも思はれるが、どうぢや』
『……』
『たとへ、いかなる事情があるにもいたせ、苟も士分の身を以て、町家へふみ込み、その上に、婦人を斬つた、とあつては、容易ならぬ事件……輕からぬ失錯として、嚴重の御沙汰はあるに相違ない。然るに、重藏の手にかけしものが一人にても有之時は、同罪として取扱はれる事にも相成らう、と思ふ。其方の身としても、それは堪へられぬ事であらうから、この點は、よく考へて見るが、可い』
伊賀守の詞から、推して考へれば、父の罪を、庇護つてくれるつもりらしいが、富藏の心にも、累を父に及ぼしたくない、と思ふ心は充分にあつたけれど、一撤の父は、自分の非を掩ふ事を欲せず、自ら筆を執つて、その始末を屆出てしまつたから、いかんとも辯解のいたしやうがなかつた。
『詳細の儀は、父よりの屆書にも、認め御座りますれば、宜しく御批判のほど、願ひ上げまする』
『重藏よりの始末書は、正に披見いたしたが、未だ公の取扱ひにはなつて居らぬ。覺え違ひの點は、書改めて差出しても可いのぢや。其方の父は、北境の探險に就て、淺からぬ功勞あるもの……殊に、永く與力の職を勤めて、治績を擧げた事は、公知の事ぢやから、市井の無賴漢と爭鬪して、御咎を蒙つた、とあつては、祖先へ對しても相すまぬ次第、深く此一事を考へて、飾りのなき申立を、致して欲しいのぢや。父にも、此儀を申傳へて、秘度の屆出

を待つ事にいたさう』
『ハツ、まことに有難き思召を承りまして、感泣の外御座りませぬ。父へも、厚き思召のほどを傳へますが、御承知あらせられます通り、父の氣性といたしましては、或は思召に反くやも計られませぬゆゑ、その邊の事は、惡しからず御含みのほど、ひとへに願上げまする』
『重藏の平生から察するに、或は然もあらう。乍去、徒に一身のみ潔よくいたして、家名の將來を考へぬは祖先へ對する道とも心得ぬゆゑ、拙者の注意は、輕く受けぬやう、返すがへすも申置く』
『御聚命の段、有難く存じまする』
『併し、其方には氣の毒ながら、充分の覺悟をいたして欲しい』
『その儀は、豫め覺悟いたし居りまする』
『今日は、これ迄の事にいたし、いづれ再度の申出を待つことにいたさう』
富藏は、伊賀守の役宅を出て、目黑へ歸つて來た。父の重藏は、富藏の歸りを、待ちかねて居たのだ。富藏は、重藏の前へ出て、伊賀守のいふた通りを傳へた。
『伊賀殿は、左樣申したか』
『ハイ』
『彼の人は、以前から親切であつた』
と、一言いふた限り、重藏は暗然として、沈默に入つた。富藏も、涙をかくして首を垂れた儘だ。
『伊賀殿の親切は、涙ぐましいほど嬉しいが、有りし事實は曲げられぬ。屆出の變更までいたして、罪を免れる事はわしの良心がゆるさぬから、此上の再考は必要がない』
『父上に、相すみませぬ』

『斯く相成るも、成行きでいたし方がない。所詮は、わしの武運が薄い爲めぢや。只だ此上ともに、貴樣は、立派な覺悟を以て、公儀の御處分を待て……』

『其儀は、よく心得居りますゆゑ、御心配下さらぬやう』

『うむ、その一言を聞いて滿足いたす。事件の善惡と大小は、しばらく措いて、武士は、最後の一時が大切ぢや』

次の室には、重藏の妻が、富藏の妻と、互に相擁して、忍び泣に泣いて居る。

二二六

今のやうに、うるさい新聞は無いが、その頃にも瓦版なるものは在つて、市井の珍事は、世に傳へられたものだ。殊に、重藏が、かねて問題の人であつた丈けに、瓦版もはづんで、その賣行は、頗るよかつた。江戸市中は、到る處この噂で持切りだ。

『大い事をやりましたな』

『太平の世に、めづらしい人だ、とは、かねてから聞いて居ましたが、とう〳〵斯んな事をやつちまいました』

『蝦夷の一件では、大層な功勞もあつた、といふ事であるから、どうせ輕くはすみませうが、何しろ大した事です』

『半之助といふ奴が、よくないのださうですが、斬りも斬つたもので、十幾人といふのですから、劍術も出來て居たに違ひありません』

『何しろ、蝦夷へ渡つて、熊を毆り殺した、といふことも聞いて居ますが、岩見重太郎さんのやうに、百人力とでもいふのでせうな』

『御掛りは、筒井伊賀守樣だ、といふことですが、どういふ裁斷を爲るか、ちよつと見物ですぜ』

『筒井樣は、御勘定奉行ではありませんか』

『左樣です』

『町奉行の御掛りではないのですか』

『御勘定御支配下の人ですから、筒井樣が、御掛りになつたのださうです』

『鷄聲ケ窪の代々の與力で、以前から評判の家でしたが、大阪の御弓奉行に引き上げられたのは、二三年前の事でしたな』

『左樣でしたよ。何でも大鹽平八郎といふ人とは、兄弟分であつた、と聞いて居ります』

『それに、大した學者だともいひますが、何しろ惜しい人物ですな』

『その人物といふのが、却つて邪魔をして、上の人には、喜ばれなかつたのだ、ともいひますが……』

『不平で、御奉行をして居る時分にも、ずゐぶん我儘をやつたものですつて……』

『御役を罷められたのも、つまりは其爲めだ、といふぢやありませんか』

『筒井樣は、その事を、よく知つて居るので、自分から訊役を、買つて出たんですつて、專ら評判ですよ』

『どうか、輕い御處分ですめば、ようござんすが、これはナカ〳〵むづかしい事件ですね』

『今度は、筒井樣の技倆を見せる、處でせう』

三人と五人、集まれば直ぐ此噂さで、殆んど持切りの有樣であつた。

重藏は、富藏から聞いて、伊賀守へ、書面を送つた。それは屆書の改作でなく、伊賀守の親切を謝した丈けで、事件の事には、少しも觸れて居なかつた。二三日すると、伊賀守から書面が來た。それを披いて見ると、意外千萬、重藏に對する、召喚狀であつた。伊賀守は、訊方の主任になつたのである。重藏も、之れには驚いた。殊に、富藏の呼出しはなく、自分丈けの呼出しであるところから、之れを察するに、伊賀守は、どこまでも、自分を、庇護つてくれるらしく思はれた。さすがに、重藏も、武士の情を知る伊賀守の親切には、涙を催すのであつた。

當日が來て、伊賀守の前へ出た。訊べ方の役人は、ずらりと並んで居る。

『近藤重藏殿、訊べ中は、詞を改める』

『ハツ』

『其方は屆出の書面には、覺え違ひの事はないか』

『御座りませぬ』

『一時、昂奮の餘り、認めた書面には、往々にして誤りのあるものぢや。この席に於て、その誤りを糺すことは、其方の隨意であるから、一應申述べて見るが、よい』

『公儀への御屆書は、入念に認めまするゆゑ、覺え違ひ、書き損じ等の儀は、毫頭御座りませぬ』

伊賀守の誘ひは、何の甲斐もなく、重藏の申立は、有の儘であつた。

『其方の忰、富藏の殺傷沙汰に就て、其方は、之れをいかに思ふか』

『わたくしの家事不取締、身分柄といたしまして、まことに恐縮に堪へませぬ』

『只だ恐縮とのみでは、公儀へ申譯相立つまい』

『此上は、只だ御法通り、御處分の儀、ひとへに願ひ上まする』

と、それから後ちは、何を訊ねても、屆書の通りと答へて、少しも辯疏がましい事は、申立てなかつた。是では、伊賀守の同情、苦心も、水の泡である。

三七

純潔な武士としては、自らの行爲を、僞り飾る事を欲しないのは、固より當然の事である。況して、目黑事件は、汚ない爭ひが因を爲し、誤つて人を斬つたのであるから、重藏の如き、剛直にして純潔な士人は、いかに誘ふても、

慮僞の始末書を、差出し得る筈はなく、殊に、一たび認めた書面に、訂正を加へるまでの事をして、自己の罪を免れやうなどとは、その性格の上から見ても、出來さうな事でなかつた。伊賀守が、いろ〳〵と苦心して、水を向けたけれど、重藏の申立は、最初の通り一貫して、さらに動かなかつた。

『父上、如何で御座いました』

『伊賀殿の懇情は、涙の出るほど嬉しかつたが、御斷わりして歸つた』

『矢張り、始末書の如く、御申立なされたので御座いますか』

『初一念の通り、申立てゝまゐつた』

富藏は、それを聞くと、眼を伏せた儘、返す詞もなく、重藏は共に口を閉ぢて、しばらくは沈默に入つた。父の氣性は、よく知つて居る。曲つた事は寸もゆるさず、人を責むるに嚴であつたが、自ら守る事にも、亦きびしかつたのであるから、斯うした結果になるのは、寧ろ當然とす可きであるが、富藏の身になつて、考へて見ると、いかにも堪へ難い事であつた。ひそかに、伊賀守へ、書面を贈つて、父に累の及ばぬやう、ひとへに内願した事は、重藏も、知らなかつた。

伊賀守は、重藏を私邸へ招いた。迎ひをうけた重藏が、甚だ迷惑に思つたのは、役宅ならば格別、私邸へ迎へられるのは、また例の事を强ひられるのであらう、と思つたからである。

伊賀守が、重藏に對する歡待は、殆んど賓客の禮を以てするほどに、手厚いものであつた。世間話のやうにして、伊賀守は、重藏も、その處分に窮したのであつた。併し、重藏も、滿更の木强漢ではない。伊賀守の心情は、よく察し得られて、嬉しく思つて居たのであるから、終に往生して、事件の眞相を、くはしく物語つた。

『富藏の申立のみでは、ちと解しかねるところもあつたが、足下の物語りで、事件の眞相は、くはしく相解つた。併

し、町人の家へ、拔刀を提げて、闖入いたし、剩へ婦人を斬殺した一條は、輕からぬ罪過であるから、是は如何とも致しやうがない。また、足下が、出會頭に町人を斬つた件も、今は、打消し難く相成つて居るから、無事にすますこともなるまい。多年の武功はあるが、まことに、殘念な次第である』

『段々の御配慮を蒙りまして、千萬有難く存じます。この上は、謹んで御沙汰を相待つことにいたします』

話の大要は、それで盡きたが、伊賀守は、しきりに重藏を慰めて、將來の心得なども、充分に注意してくれた。

それから十數日經つて、文政九年の十月六日になると、事件の裁斷が決いた。富藏は、八丈島へ流罪、重藏は、家事不取締とあつて、家は改易、江州大溝の分部若狹守へ、永く預け置く、といふ事になつた。處分が決まつてから、伊賀守は、若狹守を訊ねて、重藏の一身に就ては、厚く保護を加へてくれるやう、懇々賴み込んだ。

重藏が、大溝へ送られると、元祿の昔、山鹿素行が、赤穗へ送られた時と、同じ結果を見た。謹愼獨座、室外に、一歩も出でず、訊ねて來る人に對しては、よく訓戒を垂れて、敎へを布くので、大溝藩の士風は、全く一變して、重藏に對する畏敬は、實に大したものであつた。藩廳の方からも、出來る丈け鄭重な取扱をして、一藩の師表として之れを尊敬した、といふ事である。

一切の野心から離れて、斯うした生活をつゞけて居るうちに、天保十二年六月に入つて、病床の人となり、其月の十六日に、眠るが如く、往生を遂げたが、歳は、未だ五十九歳であつた。

富藏は、八丈島へ行つてから、大賀鄕の榮右衞門といふ人の娘を妻とし、近藏といふ子を擧げた。榮右衞門は、浮田秀家の次男、秀繼から八代目の人である。其後、富藏は、赦免の御沙汰を受けたけれど、終に再び江戸の土は踏まなかつた。忤の近藏は、明治卅七年になつて、東京へ出て來た。

近藏の家は、四男の重三郎が相續して、昂藏、熊孺、ふじの三子を擧げ、昂藏の子、蝦夷彥なるものが、重三郎の後をうけて、明治卅七八年の征露軍に加はつたが、その後の成行は、よく知らぬ。

近藤重藏に關する事は、之れで終決したから、更に本文に返つて、レサノツトの事件を始め、間宮林藏、松田傳十郎、高田屋嘉兵衞の豪快談に移らう。

北境踏破の兩雄

一

文化元年の九月六日、肥前の長崎へ、怪しい船が着いた。

全國を通じて、外國の船が、出入し得るところは、長崎の外なかつた。けれども、幕府が、公然、認めて居たのはオランダ、ポルチユガル、イスパニア、支那位のものであつた。其外の船は、勝手にはいつて來るのであるから、忽ちに拒まれて、港外へ逐出されるのが、常例の如くなつて居た。それを取締る爲に、九州の雄藩中、福岡の黑田と、佐賀の鍋島が、一年代りに、藩兵を送つて、其陣屋を堅めて居たのである。

外國船の出入があるので、長崎には、大名を置かず、幕府の直轄として、奉行を遣つて置いた。けれども、町の政治は、奉行が、直接に行はず、年寄なるものを設けて、それに一任するやうになつたから、今で謂ふ、自治の制度は早くから行はれて居た。畢竟、貿易は、一般の國民に許されず、幕府が、自ら之れを取締り、町年寄に命じて、出島といふところ丈けが、貿易を行ふことになつて居たので、その間に立つて働く、町年寄の收入は、非常に多いものであつた。從つて、町年寄の勢力は、實に素晴しいもので、役所に在つてこそ、奉行は、威張つて居るが、町へ出たら町年寄の勢力には遠く及ばなかつた。その代り、奉行の手許へは、町年寄から、少なからぬ贈物があつて、奉行の生活は、小さい諸侯に優り、遙かにゆたかなものであつた。公然の手續を經て、貿易する以外の取引が、町年寄の只働

けになつたのであるから、この一列の富豪は、頗る大いものであつた、といふ。例の高島秋帆の家も、その年寄格の一人で、非常に富んで居たのは、全く密貿易の爲であつた。

斯うした事情から、九州のうちでも長崎には、特種の風俗があつて、はやくから、西洋の文明が、土に水の滲み込むやうに、何時といふことなくはいつて來て、俗にいふ長崎文明なるものゝ基礎は、知らず〳〵の間に築かれてしまつた。西洋といつたところで、ポルチユガルやイスパニア丈けでは、少し心細いが、オランダの貿易が、年を逐ふてさかんになつて來てから、オランダ人の力が、歐洲の文明を紹介して、それからうけた感化は、非常に深いものがあつた。

今、はいつて來た、怪しい船といふのは、ロシアの船であつた。船長は、フオストーフと謂ふ人で、政府の使節として、レサノツトなるものが、乘込んで居たのである。

寛政四年の時、ラツクスマンが、函館へやつて來て、幕府の役人と、開國貿易に就て、しきりに談判したことがある。幕府の對外策が、未だ判然、決まつて居らぬ時であるから、その衝に當つた役人が、一時遁れの返答をした、その言葉尻を捉へて、今度は、正式に、交通貿易を許して貰はう、といふので、やつて來たのである。ロシア皇帝、アレキサンドル第一世の命を、うけて來た、といふのであるから、國書も持つて來たに違ひない。從つて、この談判が相當に強硬であることは、すでに應酬をはじめぬうちから、判つて居た。殊に、此時は、伊勢の漁師で、幸太夫といふものが、暴風雨に逢つて、樺太へ漂着し、ロシア政府の保護をうけて、このたびの案内役となり、船に乘込んで居る、といふのが、レサノツト等の爲には、強味であるかの如く、思はれて居たのである。

長崎には、肥田豐後守と成瀨因幡守の二人が、奉行として在職中であつた。談判は、港内乘入の不都合を、責める爲に開かれたが、いろ〳〵應酬を始めて見たら、意外千萬にも、その船には、日本人が乘つて居るばかりでなく、交通貿易を許せ、といふ掛合で、而かも、前年の函館に於ける、言葉尻を捉へての嚴談であるから、奉行限りの答辯で

すますことは出來ず、どうしても幕府の命を、うける外はなかつた。

急使は、江戸へ飛んだ。その命令を、うける迄は、船の繫留を、許す事にして、それを取締る爲の騷ぎは、恰でいくさがはじまるやうに、莫迦々々しい事を行つたものである。急使は、歸つて來た。

『鎖國は、日本の國是であつて、交通貿易は、許すことが出來ぬ。漂流した國民は、脫籍者と見做して居るから、それを救助してくれたからといつて、幕府に於ては、何とも思はぬ』

是が、兩奉行から、レサノツトへの答へであつた。さすがのレサノツトも、この答辯を聞いて、只だ呆れ返るばかりであつた。

二

鎖國は、日本の國是と稱して、交通貿易を拒絕したのは、一應の理窟があるかも知れないが、漂流民を以て、國籍を離脫したものだ、といふのは、ずゐぶん亂暴な申分であつた。風雨の難に遭ふて、海波の弄ぶところとなり、流れ〳〵て、外國へ渡り、その國の政府から、手厚い保護をうけて、送り返へされた場合は、相當の禮儀を盡して、遭難者を受取るのが、國際間の作法であらう。然るに、漂流民は、國籍を離脫したものであるから、といふて、之れを恩に着せよ、としても、左樣は相成らぬ。從つて、交通貿易の掛合には、何の關係もないといふ挨拶には、レサノツトの呆れたのも、無理のない事である。

『幸太夫外數名の漂流民は、日本の國民ではありませんか』

『元は、日本の國民であるが、漂流民となつてからは、國籍を離脫したものとして、國民とは見て居らぬ』

『海波の爲に漂流民となつたのは、日本の國に背いたのではあるまい』

『漂流して、外國へ渡り、その國の政府に、保護をうけた以上、日本の國民とは認めぬ』

『然らば、幸太夫等を保護した、ロシア政府の處置を、どう見るか』

『何とも思つて居らぬ』

『善い事をしてくれた、とは、思はぬか』

『……』

『惡いと思ふか』

『……』

『幸太夫等を、うけ取らぬつもりか』

『置いて行つたら、よいでせう』

『それでは、うけ取るのですな』

『置いて行かれたのと、うけ取るのとは違ふ』

『漂流した人間を救ふ、といふ事は、各國を通じて、どこの政府でも、みな同じ考へを以て居るのである。人道の大義から見ても、左樣するのが當然である。然るに、日本政府は、之れを認めない、といふのであるか』

『……』

『受取りませんか』

『……』

『受取りますか』

『……』

斯ういふ調子で、ヂリ〳〵と詰寄せて來るから、肥田も、成瀨も、頗る弱つて、はツきりした答へは、終に出來なくなつた。

結局、幸太夫等は、受取ることになつたが、交通貿易は、頑として拒んだ。船長のフオストーフは、レサノツトの傍に、附いて居て、談判の始終は、よく聞取つて居たのだが、レサノツトへ、そツと耳語いた。

『とても駄目です。もう談判は、止めたら可いでせう』

『併し、この無智の國民を、わたくしは、敎へてやりたいと思ひます』

『この兩人は、敎へることが出來ても、政府の方針が、根本に於て、まちがつて居るのですから、とても見込みはありません』

『それでは、止めませうか』

『止めた方が、よいでせう』

船長の注意に依つて、この談判は、終に中止したが、連れて來た、幸太夫等は、肥田と成瀨へ引渡して、レサノツトは、カムチヤツカへ引上げる事になつた。けれども、レサノツトの身にして見ると、この不結果を齎して、ロシアへ歸る事は欲しない。何か之れに代る可き、土產を持つて、歸り度い、と考へて、フオストーフと相談の上、アメリカへ廻る事にした。

是れといふ見込んだ事もなく、只だ何か見付けて、國への土產にしたい、といふ丈けの事で、アメリカへ、廻つて見たが、何一つ得るところがなく、空しく國へ歸る途中、煩悶焦慮して、死ぬ氣になつた。今でいへば、神經衰弱とでもいふのであらう。或時は、鬱々として考へ込み、また或時は、快然として船員を對手に、樂しさうにして語ることもあるが、多くは人に逢ふのを厭ふて、狹い部屋のうちに、只だ一人、ぼんやりと、ふさぎ込んで居た。レサノツトの容子が可怪しいので、フオストーフは、注意を怠らず、レサノツトの一擧一動に、眼をつけて居たが、自分には船長といふ大切な役目があるから、思ふやうに監視する事もならなかつた。

『船長ッ、船長ッ』

水夫の一人が、ブリツヂへ飛上つて來て、續けざまに怒鳴つた。

『何ですか』

『レサノツトさんが、自殺しました』

『ゑッ、自殺した』

『ハイ』

フオストーフは、驚いて、ブリツヂを駈け下り、レサノツトの部屋へ、飛び込むやうにした。

三

人間が、自分を殺して、身に振りかゝる、問題の總てを、解決し去らうとしても、それは、無駄な事である。けれども、世間には、問題を背負込んで、その始末に困つて、死ぬ人が、よく在るのは、どういふ譯か、私には、その人の心が解し得ない。いかなる問題にも、必ず其對手方は有るものだから、どちらかの失敗になる事は、初めから知れて居る。自分の智慧を賴んで、きッと成功する、と思つても、對手の出やうで、それの敗れる事はあらう。併し、之れが爲に、すぐ死ぬといふのは、策の得たものであらうか、私には、どうしても左樣した死を、賛美することは出來ぬ。

人間萬事塞翁の馬で、いくたび敗れても、立直つて遣り返へすうちには、どうにかなるものだ。七顚八起の諺は、意思の弱いものを戒めて、しッかりしろ、と敎へてくれたものでは、あるまいか。私は、今迄にいくたびか、望を失つた事はあるが、決して落膽した事はない。一つの事を考へて、それが成就しなければ、また遣り直すことに決めて居る。この覺悟は、一私人の仕事にでも、將た天下の公事にでも、應用す可き覺悟である、と考へて居るから、動もすると樂天家だ、などといはれる事もあるが、私は、この覺悟を以て、生涯を押通すつもりだ。

斯うはいふものゝ、茲に一つ、死に依つて、その目的を達する、といふ事はある。人間が、或一つの大きい仕事に掛かつて、どうしても目的を達する事が出來ないので、それを恥ぢて死ぬ。その死が、次ぎに起る人を刺激して、大に奮發させて、それが爲めに、生前に思ふ事が、終に遂げられた、といふ事は、世間にいくらもあるから、斯うした場合の死は、其目的を達する、一つの手段として、或は良いかも知れない。

レサノツトは、アメリカへ廻つて見たが、何一つ得るところはなかつた。日本との交通貿易を目的に、國書を持つて來たのが、全く失敗に終つて、歸國するにも面目がないから、ロシア帝國の爲に、何か土産を持つて歸らねばならぬ、といふ考へで、何となくアメリカを訪問したのであるから、手を空しくして歸るやうになつたのも、實は、當然の結果であつたらう。

船は、今ま大西洋を横斷して、ヨーロツパへ向ふ。幸ひに風波の難もなく、刻一刻と、鄕國へ近づいてゆくのであつた。一室のうちに默然として、椅子へ凭れ乍ら、物思ひに沈むレサノツトは、全く憂鬱の人になつてしまつたのだ。小さいテーブルの上に在る、紙片を取つて、しばらく考へて居たが、何か知らず、スラ〳〵と認め了つて、いくたびか太い息を漏して、また考へに沈むのであつた。やがて、テーブルの曳出しから、ピストルを取り出して、之れを持ち直すと、自分の咽喉へ當てた。ズドンと一發、美事に咽喉を貫いて、その場へ、どツと倒れた。

甲板に働いて居た、水夫の一人が、この音を聞いて、すぐに部屋の扉を、開けて見た。狹い室のうちは、血が流れて、レサノツトは、その中に倒れて居るのであつた。水夫は驚いて、之れをフオストーフへ告げた。すぐに駈けつけた、フオストーフは、倒れて居る、レサノツトを、助け起したけれど、もう口は利けなかつた。僅に呼吸はあつたが充分の意識は無いらしい。傍らのテーブルに、何か書いたものがあるから、之れを取上げて讀むと、

『皇帝の命をうけて、遠く日本國を訪ふたが、その目的は、すべて失敗に了つた。何と復命してよいか、自分には、その詞を考へ出し得ない。さらに、アメリカへ廻つたが、之れも復た失敗して、何一つ得るところがなかつた。自分は、空しく國を出て、空しく國へ歸る事になつた。皇帝へ對して、申譯けの詞が無い。それにしても、日本は、度し難い國である。口舌を以て、談ず可き國でない。今後は、武力に依つて、彼を抑制するの外に、道はあるまいと思ふ。先づ、千島群島を侵略して、徐々に蝦夷へ入り込み、それから後ちの談判に據る可く、皇帝に御覺悟あるやう、申上げて欲しい。自分は、國使の面目の爲に、死を急ぐから、跡の始末は、宜しく賴む』

と、書いて在つた。レサノツトの死は、ロシア政府を動かして、組織的に、千島を侵略する事に、爲せたのである。

四

黑龍江の流域に沿ふて、蠻地の探險を遂げたものは、間宮林藏が、最初の一人であつた。樺太が、大陸を離れて、一狐島を成して居る、といふことを、幕府へ報告して、幕閣の人を驚かしたのが、彼れであつた事も、現に世の知るところであらう。アレキサンドロフスキーのラツカ岬から、對岸のカムガタへ渡り、タバ灣から、タバマチー川を下つて、アムールの本流に入り、之を遡航して、滿洲の假政府、デレンといふところ迄、一氣に押渡つたのであるから、その壯圖は、我歷史上に於て、稀有の事實である。但、それと同時に、殆んど間宮と競爭的に、樺太の西海岸を、探險した幕吏がある。それは、函館奉行配下の調役下元締と稱して、極めて低い身分の役人、松田傳十郎と謂ふものであつた。一概に謂ふ韃靼海峽、そのうちに間宮海峽があり、今では、間宮海峽の稱が、韃靼海峽の名を壓してしまつた。

後花園天皇の御宇、嘉吉年間といふから、今を距る四百八十年、足利義教の時代であつた。常陸國筑波郡に、いづくよりともなく、漂浪して來た、一個の士人があつて、氏名を、間宮隼人と謂ふた。今から百七十七年前の寶曆五年、德川十代の將軍、家治の頃には、隼人の子孫が、全く土着の農民となつて、その傍ら、籠工をやつて居た。

當時の戸主を、林右衞門と呼んで居たが、その子に、林藏といふのがあつた。幼少い時から、記憶が強く、一度聞いた事は、決して忘れぬ、といふので附近のものは神童と稱して、その將來に、望みを囑して居たが、さらに驚く可きは、算數に關する智能であつた。はやくから、手習師匠へ通つて、世間並の教育は、うけて居たが、記憶が強いので、外の子供を逐ひ拔いて、ドン／＼進んでゆく。習字も、一と通り覺えて、讀書も、大人と異らず、教へるものも舌を捲いて、その天才に驚くばかりであつた。

『さツ、林藏ッ』

『ハイ』

『此處へ、おいでなさい』

『ハイ』

『今日から、算盤を始めませう』

『ハイ』

『文字が書けても、また書物が讀めても、人間は、算盤が出來ないと、成人してから困る事があるから、しッかり覺えて置くが、よいぞ』

『ハイ』

『さ、斯ういふ風に、一を置いて……』

と、師匠が、算盤の珠を、先づ一つ置いたので、林藏も、その通りにした。

『それから二ぢや』

『ハイ』

『次ぎが三ぢや』

『ハイ』

十二萬三千四百五十六石七斗八升九合と、珠を並べて、それから、二二天作の五と、割り始めて、一と通りを教へた。

ぢッと考へながら、師匠の說明を聞いて居た林藏が、

『お師匠樣……』

『何ぢやな』

『これは、百を二つにすると、五十になるといふのですね』

『左樣ぢや』

『それならば、もう宜しう御座います』

『宜しい、といふのは……』

『いくら習つても、同じ事ですから、もう習はないでも、宜しいと思ひます』

『ゑッ』

『算盤といふものは、どこ迄習つても、それ丈けの事でせうから、つまらないもんだ』

『併し、だん／＼進んでゆくと、むづかしくなる』

『百を二つにして、五十五となりますか』

『……』

師匠には、それを說き破つて、林藏を、恐れ入らす事が出來なかつた。是が、林藏の九歲の時であつた。

十三歲の時、村の人に誘はれて、筑波登山をすることになつた。父の林右衞門は、林藏を呼んで、

『筑波山には、天狗さまが居られるから、氣を附けて行くのだぞ』

『ハイ』
『さらはれると大變だから、村の人に離れてはならぬ』
『大丈夫です』
『よいか』
『天狗が出たら、おみやげに持つて來ます』
『何だ』
『天狗は、どんなものか知らないが、人間より大いものは、この世の中に無い筈です』
『馬鹿をいふな』
『でも……』
『でもぢやない。そんな憎まれ口を利いては、いけないぞ』
林藏は、父の顏を見て、ニヤ〳〵笑つて居た。ところへ、村の人が迎ひに來て、林藏は、筑波山へ出かけた。

五

安積艮齋の詩に、

突兀奇峰雲外浮、天風吹上絶巔秋、山河歷々双鞋下、但恐一呼驚八州

と、いふのがある。關東の平野に、屹然として聳え、山頂は、男體女體の二つに分れ、遠く望めば、馬耳の如く、頂の間は、約一里を隔つ。昔から、詩に歌に、將た文に、筑波山の事は、多く引用されて居るから、その高さに於てこそ、富士山には、遠く及ばずとも、その名は、太古から響いて居る。

つくは山葉山しけ山しけけれとおもひ入るにはさはらさりけり

○つくは山葉山の里に煙かすみもしけし春の夕暮

○

つくは山このもかのものもみちはに時雨もしけき袖そ知らる〻

筑波郡の北に位し、眞壁郡を背にして、新治郡に跨り、山勢沈毅、巨人の雄姿を思はせる。筑波神社は、伊弉諾、伊弉册、二柱の神を祭り、天照大神、月讀尊、素盞嗚尊、蛭子尊の四柱を並祀して、東國唯一の靈場としてある。されば、幕府時代に於て、筑波詣が、關東人の敬神的思想を、どれほどに深く導いて居たか知れぬ。今では、ケーブルカーも出來て、しきりに登山熱を、煽つて居るが、いづれにしても、神靈の居ます山へゆくのは、惡い事ではない。山腹に、筑波町といふのが在つて、參詣の人を、送迎する家も在れば、一泊して疲れを休める、宿屋も在る。その外に、怪しい女を抱へて、汚ない一夜を、酒と共に、送らせる備へもある。

村の人に伴れられて、林藏は、初めての筑波詣をした。歳は、未だ十三でも、人並はづれに、ませて居るから、伴れの村人も、林藏には、特にはぐれぬやう注意して、山の怪異なども、よく聞かせて置いた。

參詣も終つて、一同は、町へ下つて來た。それからが酒になつて、其儘に寢るものもあれば、こツそり娼家へ、出かけるものもあつて、宿屋の大廣間へ、枕を並べて寢るものは、半數位になつた。宰領をして來た老人が、不圖氣が付いて、林藏の寢床を、さがし始めた。

『さア、大變だぞ〳〵』
と、調子外れの聲で、さわぎ出したので、ぐつすり寢込んで居たもの迄が、みな飛び起きた。
『爺さん、何だな』
『紛失物が、ごぜゑやして……』

『ゑツ、紛失物だつて、そりやア大變だ』
『これから捜すのだから、手傳つて下せゑ』
『何が、紛失したンだ』
『大きい物だよ』
『大きい物ツて、何だな』
『林右衞門どンの悴が居ねえのだ』
『林藏が……』
『うむ』
『那の小僧、いたづらだから、しやうがねゑ』
『出て來る時に、くれ〳〵も頼まれたので、困つたよ』
『まだ、居ねえときまつたのぢやアあるめゑ』
『どうも、居ねえやうだ』
『よくさがして見たのか』
『せつちんの中まで、さがしたが、どうしても見付からねえのだよ』
『そりやア大變だ』
『さア、捜しに出てくれ』
『あんまり利口だから、神かくしにでも、あつたのぢやアねえかね』
『ざうかも知れねえ』
是から一同は、それ〳〵に支度をして、さがしに出かけたが、町のうちには見えなかつた。

夜が明けてから、遊びに出たものも、歸つて來た。みなが一しよになつて、また手を分けて、さがしに出る。一組のものが、山頂へ登つて、さがしかけると、立身窟の裡に、人らしいものが居る、といふので、その入口に集つて來たが、誰一人として、窟のうちにはいらう、とするものはなかつた。
『オーイ、オーイ』
と、聲を揃へて、呼びはじめた。
のそり〳〵と、窟の裡から、出て來るものがある。
『やツ、林藏だぞ』
『やア、林藏だ〳〵』
林藏は、窟の入口へ姿を現はした。
『オイ、どうした』
『この窟に、一と晩居ると、出世が出來るといふから、昨夜はいつたのだよ』
『ゑツ、一人で居たのか』
『うむ』
一同は、顏を見合せて、跡の詞はつゞかなかつた。
『何といふ太い贈だらう』
『末が恐ろしい』
『大變な小僧だ』
詞は、それ〳〵に變つて居るが、いづれも其大贈に驚くのであつた。

六

登山歸りの村の人は、寄ると觸ると、お山の有難いことを、いふて居るのは、どれも同じであるが、その序には、必ず林藏の話が出て、末恐ろしい子供だ、といふのが、異句同音で、その噂は、追々に廣まつてゆく。

『林右衞門どん、家に居なさるかな』

ぶらりと、はいつて來たのは、村のうちでも口利きの、源兵衞といふ人であつた。

『オー、源兵衞さま』

『相變らず精が出るな』

『自分の持地が無えから、忙がしい時に、雇はれる丈けの事で、その合間には、斯うして稼がねえと、口が干上りまするからね、ハツハ、、、、、』

『それも左樣だらうが、おめえさんのやうに、朝から晩まで、やすまずに稼ぐ人は少ねえ、といつて、みんなが、感心して居るだ』

『この頃は、林藏が、御厄介で御座いました。彼奴も、お山へ登れた、といつて、大層喜んで居ましたツけよ』

『うむ、林藏さんが見えねえやうだが、どこかへゆきなすツたかね』

『へー、籠の御註文をうけ取りに、隣村までめえりやした』

『左樣か』

源兵衞は、少し考へて居る。

『林藏に、何か用でもあるかな』

『別に用事といふ譯でもねえが、ありやア大變な子供だね』

『大變な……へー、どういふ譯ですか、わしには、ちつとも判らねえ』

『おめえ、お山の事を聞かねえのか』

『お山のことつて、何で御座えやす』

『そりやア、斯ういふ譯だ』

『へー』

源兵衞は、それから立身窟の一條を打明けて、林藏を捜す爲に、一と晩さわいだ事を、くはしく物語つた』

『左樣いふ譯で、十二や十三の子供にしては、膽が太すぎるつて、みんな驚いて居るだ』

『そんな事があつたつて、誰も話してくれねえから、わしは、少しも知らなかつたが、彼奴も、根つから話をしねえので、御心べ玄をかけた皆さんに、お禮もいはねえで、まことにすまねえ事をいたしやした』

『何 禮なんぞいはねえでもいゝが、あんまり利口すぎて、その上に、膽が太えのだから、おめえさんも、心配だらうな』

『御親切に、有難う御座えやす。いくら膽が太くつても、籠屋の小僧ぢやアしやうがねえ』

林右衞門の答へは、源兵衞の話から外て、兩人の考へは、全く異つて居るらしい。

それから後も、林藏の話は、それからそれへ傳へられて、恐れて悪くいふものと、感心して賞るものと、人さまゞの噂が、林右衞門の耳へはいるけれど、林右衞門は、それについて、少しも心配などはしないやうで、却つて林藏を氣任せにして置くのであつた。貧しい生活を、して居るから、籠をつくることも教へるし、註文取りに歩かせもして、稼業の手傳ひは、爲せて居るが、夜に入つてからの讀書は、本人の好むにまかせて、さらに干渉がましい事はしなかつた。

斯くて六年、林藏が十九歳の春であつた。林右衞門は、例日の通り、懸命に仕事を、やつて居た。その軒先へ、一

人の武士が、やつて來た。

『ゆるせ……』

『へー』

『其方が、林右衞門と申すものか』

『左樣で御座えやす』

『林藏といふ子供があるのう』

『へー』

『彼の林藏を、江戸表へ出す事にはならぬか』

と、話が餘りに突然であるから、林右衞門は、ちよつと驚いた。

『彼奴を、江戸へ出せつて、何の事ですか』

『箍屋の小僧として、生涯を田舍に終らせるのは、まことに惜しいと思つて、すゝめに來たのぢや』

『へー』

『江戸表へ出せば、公儀御召抱になつて、出世は出來やうから、ぜひ左樣いたしたら、どうぢや』

『どういふ理由から、旦那さまが、不意にそんなことを、いつておいでになつたのですか、わしに、聞かせて下せえ』

『拙者は、公儀の役方で、檢地の爲に出張いたしたものぢやが、この先きの村端れに在る、神社の境内に於て、檢地の坪割を、いたして居つたが、どうしても算盤が、出合はぬので困つて居るところへ、箍を撥いた小僧が通りかかつて、我等を冷笑したところから、下役のもの等と爭ひに相成つたのを、拙者が、之れを抑へて、その小僧に、算盤を取らせよう、といたしたのを、小僧は、算盤も取らずに、坪の割出しをいたして、其儘ま立去らう、といたすに依つて、氏名を糺したるところ、當家の倅だといふ事が相判つたので、わざ〳〵まゐつたのぢやが、村の者から聞けば、算盤の名人といふ事を、申すものあり旁、公儀へ、推擧いたしたく存じて、斯くはまゐつたのぢや』

『左樣で御座えやすか、今に歸つて來るでせうから、よく相談してから、お返事をいたすことにしやせう』

七

林右衞門は、單位の加算が、やうやく判る位ゐのもので、算盤の事などは、さらに解らないのであるが、倅の林藏は、その點については、天成の達人であつた。師を求めて學べば、誰れにしても、或程度までは、進むものであるが、師も求めず、學びも爲ずして、算盤の深奥に、達して居る、といふのは、果して何ういふ譯か。

公儀の役人である、と、自ら名乘つて來たのは、下條吉之助といふ人であつた。幕府の勘定方に、長く勤めて、算數の事には、頗る明るい、といはれた人であるが、實地の測量になつて、坪割に苦んで居たのを、箍屋の小僧に教へられて、始めて發明するところがあり、それに感じて、公儀へ推擧しよう、といふのであるから、平生の心懸けも思はれて、よほど素性のよい人であつたに違ひない。

林藏が、歸つて來た。未だ役人は、林右衞門と差向ひで、話込んで居た。

『オー、林藏か』

『また、御註文が出たよ』

『左樣か、そりやア良かつたな』

『前の御勘定も貰つて來た』

財布の中には、何れほどはいつて居るか、紐で括つた儘、父へ手渡した。役人の方へ向つて、輕く會釋すると、すぐ裏手へ出て、水を汲みはじめた。

『林右衞門ッ』

『へー』
『どうぢや、最前から勸めて居る一條は……』
『林藏のこツてすかね』
『左樣ぢや』
『さア、本人が何といひますか』
『ちよツと、尋ねて見てくれ』
林右衞門は、裏手の方へ向いて、
『林藏や……』
『何か用かね』
『ちよツくら、來い』
林藏は、表口の方へ、廻つて來た。
『何だね』
『この旦那さまが、汝に、江戸へ出て來い、といはつしやるのだが、汝は、どうするかな』
『江戸へ、何しにゆくだな』
『そりやア、能く判らねえから、汝が、この旦那さまに聞いて見ろ』
林藏は、役人の方へ、向き直つた。
『わしを、江戸へ連れてゆくツて、どういふ譯だね』
『拙者は、おまへに最前逢ふたものぢやが……』
『アー、那のお社のところで、算盤が判らなかつた人だな』

『左樣ぢや』
『また、算盤の議論に來たのか』
『イヤ、左樣ではない』
『それぢや、何だね』
『江戸へ出て、お上へ勤める心はないか、と申すのぢや』
『算盤を、敎へにゆくのか』
『左樣ではない』
『どうする、といふのか』
『算盤で、お上に勤めるのぢや』
『旦那は、矢張りお上に勤めて居るのか』
『公儀へ、勤めて居るものぢや』
『旦那の下役になるのか』
『それは、どういふことになるか、よく判らぬ』
『少し解らねえ』
『お上へは、拙者が推擧いたすが、それから先きは、どういふ事になるか、拙者にも解らぬ』
林藏は、少し考へて、
『わしには、おツ母が、無えのだから、父ばかりを、殘してゆく事は、出來ねえ』
『お役が定まつてから、父は迎へても可い』
『江戸へ出るにも、入費が出來ねえ』

『入費は、拙者が、立替へてつかはす』
『留守にも、いくらか置いてゆけるか』
『それも、承知の上ぢや』
『父が何といふか……聞いて見よう』
『相談する間、拙者は、ちよツと、用事をいたして來る』
役人は、氣を利かして、外へ出た。
『父、どうしよう』
『汝のいゝやうにしろ』
『父、困りやア仕ねえか』
『おれは、どうでもいゝから、汝の思つた通りにして見ろ』
『左樣か、それぢやア行くことにしよう』
『それぢや、さうして見たら、いゝだ』
『さうしよう』
父子の相談は決まつた。
下條は、歸つて來て、旅費と留守中の手當を、いくらか與へた。林藏は、これから江戸へ出た。

八

林藏は、江戸へ出て來た。生れて十九年、常陸の片田舍に人と成り、筑波登山の外に、村を離れて、他人の家に、泊つた事のない、といふのだから、全くの田舍者である。之れを導いて、江戸へ引出した、下條吉之助は、世話好き

の人で、親切に、よく林藏の世話をしてやる。當分は、町見物に連れて歩く事になつた。淺草の觀世音、高輪の泉岳寺、上野の東照宮、それ〳〵に、順序を定めて、毎日のやうに案内したので、一と通りは、町の容子や、江戸の人氣なるものも、呑込めたやうだ。屋敷町は、隅から隅まで、よく教へて置いた。旗本の士風や習慣にも、思ふさま觸れさせて、大名の登城も見せた。乘合自動車で、くる〳〵引廻すのとは違つて、ぶら〳〵歩きの案内は、可成り日數も費かつて、やうやく見物も、一巡りは終つた。
『さア、これから、修業を始めるのぢや』
『修業といふのは、何ですか』
『武術は、一と通り修める必要がある』
『劍術の事ですか』
『そればかりではない。槍術、馬術、柔術、その他にも、修業する事は澤山あるのぢや』
『役所の方は、どうなるのですか』
『それも周旋するが、今日願つて出て、すぐ採用される、といふものではない。御掛りへの手續をすませて、御沙汰を待つのぢやから、その間に、修業をはじめる事にするのが、可からう』
『左樣ですか』
下條の周旋で、然る可き師を、取る事になつた。初めて稽古する、武術ではあつたが、大膽にして呑込みのはやいのが、その進歩を扶けた。半年餘りすぎると、メキ〳〵上達して、教へる人も、驚くほどであつた。すべてが、その調子であるから、下條も、ひどく喜んで、林藏を推擧することには、一生懸命であつた。
普請方雇といふ名目で、幕府へ住み込む事になつた。泰平の世は、武術よりも文筆の事を、重く見る風があり、殊には、算數に明るいものが少ないところから、はやくも上司の眼に留まつて、蝦夷へ出張を、命ぜられる事になつ

た。その間、三年餘りも動めたのだから、林藏の人物も、一だんと、すぐれて居たに違ひない。左もなければ、蝦夷へ出張など、命ぜられる筈はない、と見て可からう。

この時分には、幕府の役人も、蝦夷地の警戒に、一生懸命であつた。書院番頭の松平忠明が、その主任となり、勘定奉行の石川忠房と、目付の羽太正養の兩人が副となつて、南部津輕の二藩へ、蝦夷堅めの沙汰を下し、幕吏のすぐれたものを拔いて、出張を命ずるなど、相當に努めたものであつた。千島の擇捉に、會所を置いて、その出張所が、擇太のノトロ岬に、設けられて在つた。擇捉のシヤナにも、南部津輕二藩の兵が、三百人許り居て、幕吏も、七十名位ゐは、詰めて居たが、ノトロの方には、僅に三十名ばかりが、出張して居たのである。

文化三年の九月、季候の上からすれば、一年のうちで、最もくらしよい時であるが、それにしても、寂しい蠻地の生活は、人の知らぬ苦みがあつた。番小屋には、七八人の番卒が、詰めて居て、代る〳〵高い所へ出ては、海の方を眺めて居るのだ。毎日の仕事といつては、その外に、何一つ無いのだから、そのつまらなさ加減は、一と通りや二た通りの事でない。

『オイ〳〵』

『何だ』

『つまらないぢやないか、斯うして一年もくらして居るのだが、全體どういふ譯で、斯んな事を、やつて居るのかな』

『自分のやつて居る事が、どういふ譯か判らないなンて、莫迦らしい奴だ』

『だツて、判らないものア仕方がない』

『それぢやア、何だツて斯んなところへ、やつて來たのだ』

『初めは、蝦夷へ詰めるのだ、といはれて、ついフラ〳〵とやつて來たのだが、去年になつて、突然に、亦た此方へ送られてしまつたのだが、斯うして樂々と、手足は延ばして居るやうなものゝ、第一に不自由な酒、それから食物だツて、碌な物は無し、斯んなつまらない事は、ありやアしない』

『ハツハ、、、、、また勘助が、十八番の繰言をはじめたぜ』

それを聞いて、外のものも笑ひ出した。

九

『お前等は、さうして笑つて居るが、己れには、少しも可笑しい事はない。もう一と月すれば、復た雪が降り出して、寂しい冬籠りをするのだが、來年の五月頃までは、どうする事も出來ないのだから、考へて見りやア、莫迦らしくもなるぢやないか』

『莫迦らしい、といへば、莫迦らしいやうなものゝ、うるさくないのが、己れは嬉しいのだ』

『そりやりア、隣り近所がないのだから、うるさくはないが、そのうるさいのが、人間の樂みの一つだ、と、己れは思つて居る』

『ハツハ、、、、、、、、、、、、、、、』

『何が可笑しいツ……』

『可笑しいから、可笑しいのだ』

『だから、何が可笑しいツて、聞いて居るンだ』

『お前が、つまらない事を、樂みにして居るから、可笑しくなつたのよ』

見張所へ出て居た、番卒の一人が、息を切り乍ら、歸つて來た。

『オイ、船が見えるぜ』

『何ツ、船が來た』

『どこの船だ』

『どこの船か、それは能く判らないが、日本の船ぢやないらしい』

『オロシヤの船か』

『左樣らしいぞ』

『日本の船なら、美味物を持つて來たらうに、オロシヤの船ぢやしやうがない』

『オロシヤの船だツて、まんざら莫迦にやア出來ないぜ、去年のやうな事も、あるからな』

『うむ、あの時は、大した騒ぎだツた。第一に酒の強いのが、二三た瓶も、手に入つて、その上に、肉のうまいのが澤山といふので、本當の豐年だツた』

『今度の船だツて、いよ〳〵着いて見なけりやア、何とも判らない、と、いふもンだ』

『それも、左樣だ』

番卒の頭ともいふ可きものが、二人居て、萬事の取締をして居るので、酒や食物は、嚴重に取扱つて、各自の勝手には、持ち出させないから、倉庫代りの土窟の裡には、相當の備へはあるのだ。器物の如きも、越年する丈けの用意は、充分に整つて居るのだから、さうした點について、少しの不自由はなかつたのだが、定めの食事の外には、一品でも無默にしないから、間食に馴れて居る日本人には、何となく物足りないのである。頭の詰めて居る小屋は、粗末ながら家らしく建てられてあるが、見張小屋の方は、ほんの小屋掛け、といふ名丈けで、ひどいものであつた。全くの冬籠りになると、見張小屋は取拂つて、番卒のすべては、一つの小屋に集つて、頭を中に圍つて、莫迦話に、日を送るから、割合に氣もまぎれるが、雪や氷が解けて、海岸へ見張りに出る頃は、さうした樂みはなく、二三人が、代り合つて居るのだから、却つて寂さを感ずるのであつた。船を着けるやうな、立派な港はないのであるから、自然に入江をなして居る、船着のよささうなところを見付けて、そこへ船を入れる外はないのだ。

今、着いた船には、例のフオストーフが、乘つて居るのだ。レサノツトが、自殺した時の遺書を見て、フオストーフの憤慨は、血の熱くなるほどであつた。歸國の上、此事を、政府へ報告したので、今年は、武力を以て、千島を侵す可く、先づ其最初の試みを爲さう、として、二雙の新らしい船を以て、ノトロ岬へ、乘り込んで來たのである。フオストーフは、此處に、日本人が詰めて居て、これ丈けの見張所を、設けて居るとは思はなかつた。水夫の報告を聞いて、日本人の北地進出を、意外に思つた。千島の一隅までは、何とでもして進出するであらうが、樺太へ迄、渡つて來やうとは、思つて居なかつたのである。いづれ一度は、さうした事にもなるとは、考へて居たが、斯う速かに進出することは、全く豫想して居なかつたのである。

『この酒、まことに美味い』

と、いつて、番小屋へ近づいて來た、ロシア人は、番卒の手へ、酒の瓶を渡した。去年も、是れに似た事があつて、西洋酒の味は、一度でも覺えて居る丈けに、番卒等は喜んで、之れを受けた。頭もやつて來て、小屋に貯へて置いた、食物を贈つた。片言ながらロシア人は、いろ〳〵話をして、船へ歸つた。

詰所へ引上げてから、その酒を呑んで、いづれも醉心地よく、ぐツすりと寢込んでしまつた。眞夜中の頃、不意に襲はれて、周章狼狽、寢呆眼を、こすり乍ら、力戰はして見たが、何分にも用意がなかつたので、思ふやうに鬪ふ事もならず、小屋は、散々に打毀されて、番卒は、みな生捕になつてしまつた。

一〇

擇捉のシヤナには、松前藩の頃から、會所が設けられてあつたのを、蝦夷地一帶、幕府の直轄に移してからも、その會所を擴張して、引つぐことになつたのであるが、その上司は、戸田又太夫といふ人で、關谷茂八郎が、副になつて居た。併し、事務に關することは、川口陽助が受持つて、戸田と關谷は、主としてロシアの侵掠を、警戒する事

になつて居た。部下の卒は、約三百人あつて、多く南部と津輕の兵であつた。

ノトロ岬の一條は、通信の自由がない爲に、すぐ知れなかつた。此方から見廻りの役人が行つたので、やうやく判つたけれど、もう雪の降る頃に、なつて居たので、いかんともする事が出來ず、急使を、江戸へ差立てゝ、その命令を待つ事にしたが、その命令は、容易に下らず、彼是れして居るうちに、全く冬季に入つてしまつたから、手の下しやうがなかつた。翌年の四月、雪や氷の解けるを待つて、いよ〳〵兵をくり出さう、とした時、意外にも、擇捉のナイホへ、再びロシアの船が、やつて來て、會所の記帳役、五郎次といふものを生捕り、多くの日本人を殺傷して、而かも、貨物まで奪ふて、引上げたといふ報告があつたので、樺太行きは中止して、その方に向ふことになつた。然るに、此方の兵が、ナイホへ着いた頃は、ロシアの船の影さへ見えず、どこへ行つたか、さらに判らない、といふやうな始末で、北地の守備は、全く物になつて居なかつた。

シヤナの會所では、善後策の相談會を開く事になつた。一度ならず、二度までも、侵掠をうけた以上、之れに對する、相當の備へもしなければなるまいし、また三度目の侵掠は、必ずあるものとして、守備の手筈をつけて置く必要がある、といふので、この會議を、開く事になつたのである。會議は開いたが、議論紛々、容易に纏りもつかず、一先づ休憩といふことになつた時、慌たゞしく數名の漁夫、いづれもアイヌであるが、息を切り乍ら、會所へ、驅け込んで來た。その訴へに依れば、

『沖合遙かに二雙の船が見える、その形からすれば、ロシアの船に違ひない』

と、いふのであつた。

『ロシアの船に相違ないか』

『相違御座いませぬ』

『可笑、猶ほ見張りをいたして居れ』

『ハツ』

漁夫等は、海岸へ行く。猶ほ念の爲めに、關谷は、自ら兵士十數名を率ゐて、海岸へやつて來た。物見の櫓に登り、遙に沖の方を眺めると、今の訴へにあつた通り、二雙の船が見える。どう見直しても、船の形からすれば、ロシアの船に相違ない。其處で、すぐ引返して來ると、戸田へ、見た儘を報告した。職ざ評定といふのも、ちと大袈裟ではあるが、とに角、防戰に就ての會議は開かれた。種々と、議論のあつた末が、

『先方から、上陸するのを待つて、迎へ討つ事にしよう』

と、決定しかけた。此時に、一人の壯漢が、ずツと進んで、

『愚見を申述べ度く存じますが、宜しう御座るか』

といふ。戸田は、その男を見て、一同に向つた。

『どうであらうか』

一同は、しばらく默つて居た。

『私も、公儀の御役を承り、斯く出張いたし居ります以上、斯かる重大な事については、一應の考へも申述べ度く、未だ議の決せざるうちでもあり、旁以て御許し下さい』

最近に、函館奉行の方から廻されて來たもので、どれ丈けの人物だ、といふことも、よく知つたものはなく、何でも算數の事に明かるいといふところから、支配人の川口陽助に、附けて置いたが、別に大した者とも思つて居らず、斯うした會議へ、口を出すには、少し身分が低いとは、思ふが、さればとて、お前のいふことは聞かぬ、ともいへぬから、戸田は、一同へ向つて、發言をゆるしても可いか、とたづねたのであらう。しばらくして、戸田は

『御一同に、御異存もないやうぢやから、一應は聞くことにいたさう』

『然らば、これより愚見を申述べまする』

と、いつて、その壯漢は、ずツと席を進んだ。この壯漢こそ、例の間宮林藏であるが、戸田を始め、一同は、ぢツと其態度に、眼をつけて居た。

一一

函館から廻されて來て、組下になつたばかりで、その爲人も、よく知られて居ないから、戸田を始めとして、一同の役人は、林藏の發言には、左迄に重きを置いて居なかつた。けれども、本人は、少しも怯せず、席を進んで、諄々と、意見を述べ出した。

『昨年、ノトロ岬の事があつて、引つゞきナイホに變があつたにも不拘、その儘に打過ぎたのが、敵をして、我れを輕んぜしめる事にも相成り、從つて、三たび來襲をうけるやうにもなつたのであるから、このたびは、思ひ切り奮發して、敵を逐拂ふ手段に、出づる外は御座るまい。只今迄の御評議に依れば、敵兵の上陸を待つて、一と防ぎいたされるとの事であるが、それは極めての不得策で御座る。敵の力は、どれほどのものか判らぬが、上陸を待つよりは、この方より進んで、海岸一帶の地を、嚴重に堅めて、一人も上陸せしめぬやうなさるのが、最上の策で御座らう。敵は、長い航路に疲れた上、食糧の如きも、左迄に多くない事は、火を睹るよりも明かで御座れば、空しく沖合に船を繫からせて置くのが、敵に對する、此上もなき策戰の妙か、と存じまするゆゑ、敵兵の上陸を待つ、といふ如き拙策は、御取留の儀、然る可しと存じます』

と、さらに憚かる所もなく、雄辯にまかせて、その意見を申述べた。一座は寂として、誰れ一人、それを良い、ともいはず、さればとて、惡いといふものもなかつた。斯うなつては、戸田か、關谷が、何とか答へる外はない。

『間宮氏の御說も、一應は御尤もと存するが、何分にも衆論は、敵の上陸を待つ、といふのであるから、折角の意見なれど、今更に變更は相成るまい』

關谷も、戸田の詞を扶けて、

『組頭の仰せられる通りで御座る』

と、輕く片付けてしまはう、としたが、林藏は、そんな事で、恐入る男ではなかつた。

『敵に對する策戰が、全く斯うと、確定したといふ譯でもなく、衆論が、それに傾きかけたところから、私の意見を申述べたのであるから、若し私の意見が、衆論にまさつて居るとしたら、變更されても、不都合はあるまい、と存ずる。私は、飽迄も敵を上陸させる事には、御同意申すことは出來ませぬ。萬一にも、私の意見を御採用なく、敵を上陸させたら、戰ひは必ず負けます。左樣相成つては、公儀へ對しても、面目は立ちますまい。殊に皇國の武威にも關する次第、强ひて私の意見を、御聞入れ下さるやう、ひとへに希望いたします』

只だ一と通りの意見でなく、決死の色を現はして、自說を固守するので戸田も、關谷も、互に顏を見合せて、しばらくは、何とも答へなかつた。

『間宮氏には、彼方の控所にて、お待ち下さい。折角の御意見であるから、關谷氏とも、充分に相談いたして、さらに一同の考へも、聞いて見る事にいたさう』

『何分宜しく……』

林藏は、その席を退いて、控所の方へ去つた。跡では、關谷が、戸田に向つて、

『彼の人は、ずゐぶん遠慮のない男ぢや。職さの事には、自分一人が、よく通じて居るやうに、高慢な講釋を爲るが、全體どういふ人かな』

『元は農民の悴とかで、算數の道に明るいといふのが、御召抱への初めぢやさうな』

『ハツハ、、、、、、、左樣うな人で御座つたか、職さを算盤で、彈き出さうとするところが、まことに面白い』

斯んな調子で、間宮の意見は、全く葬り去られた。防戰の準備は、それ〴〵についたが、敵兵の上陸を待つて、

氣に打拂ふやうに、すツかり手配が出來た。

文化四年の四月廿九日、未だ夜明けには、少し間のあらう、とする刻限に、敵兵は、數隻のボートに分乘して、小銃を連發し乍ら、勢ひよく上陸をはじめた。充分に手配りをして、敵兵の上陸をゆるし、思ふさま引付けて置いて、一氣に打拂ふつもりで居た。その策戰は、すでに敵の知るところとなつて、伏兵の在る方面に向つて、一齊射擊を試み乍ら、吶喊をつくつて、討ち寄せた。伏兵は、敵に悟られぬうちこそ、大に用も爲すが、すでに敵の知るところとなつては、伏兵の甲斐なきのみならず、却つて戰さは後手になる。殊に、銃砲を取つては、敵の方が、はるかにまさつて居るのだから、最初の一戰は、散々の敗北になつてしまつた。

一二

沿岸に伏せた兵は、敵に一蹴されて、本陣へ、引上げて來た。本陣といふても、會所を、其儘に本陣としてあるのだから、充分の軍備があるといふのでもなく、敗兵を一つに纏めても、三百弱のものであつた。敵兵は、いづれも風濤氷雪に、鍛へ上げた壯漢ばかりで、殊に本國を、遠く離れて、一隻の船に、生命を托して來るほどの者であるから、その強い事も一と通りでなかつた。敗けて、退いて、本陣へ立籠るものと、それを逐ひ擊ちに、息も吐かせず、攻め込んで來る者とでは、すでに其意氣が、非常に異つてゐる。

銃を取つての戰、それは一と通り、應戰もしたが、矢張り敵兵が強かつた。いよ〳〵格鬪になつてからも、體格と腕力の相違で、動もすれば總崩れになつて、敵兵の乘ずるところにならう、と爲る。戸田と關谷は、さすがに、恥を知つて居たので、自ら敵の中へ、斬つて入る。ふみ留つて、兩人を扶ける兵士もあり、殆んど入り亂れての鬪ひとなつた。

林藏は、自分の說が容れられず、甚だ不平ではあつたけれど、勢ひ此處に至つては、傍觀も爲し得ず、自分も、刀

を執つて、敵中へ斬り込んだ。武術を習つて、初めての斬合であるが、贈の据つた林藏は、ナカ〳〵に強く、近づいて來る敵兵を、數人といふもの斬倒して、獅子奮迅の働きをした。

跡から、跡からと、上陸して來る敵兵は、會所を包圍して、猛烈な射擊を浴びせる。そのうちの十數名は、側面から會所を襲ふて、火を放つた。折柄の烈風、火は風に煽られて、見る〳〵うちに會所は、火に包まれてしまつた。戸田は、身に數ケ所の傷を負ひ、力のつゞく丈け鬪つて、終に餓軍のうちに切腹した。關谷も、負傷して疲れ果てた。支配人の川口は、流丸に中つて倒れた。敵は、潮の引くやうに、船へ引上げたが、勝ち誇つての引上げであるから、すべてが順序よく、整然として引上げた。

會所は全燒した。その燒ほこりの中に、林藏は、獨り立つて居た。ところへ、敗兵は、追ひ〳〵に集まつて來たが、施す術もなく、みな呆然として居る。

『組頭はどうなされたか』

『切腹されました』

『ふーむ、さては切腹を……』

『ヘイ』

『その屍骸は、誰れか』

燒け落ちた、棟木の下に、見るも無殘な、死を遂げて居るものが、而かも只一人。

『オー、これは川口さまです』

『やツ、支配役も死なれたか』

『間宮さま、これからどういたすのです』

『まだ、そこ迄は、考へて居らぬが、この敗北は、初めから判つて居たのぢや』

『……』
『組頭の屍骸を、搜してまゐれ』
『はツ』
『支配役の屍骸と一つにして、火をかけるのぢや』
『……』
『それから、關谷どのを搜しにゆけ』
『……』
『負傷なき達者なものは、負傷したものを扶けて、一つところに集めろ』
『……』
斯かるうちに、順序を立てゝ、用事を申付ける、林藏の沈着には、みな感心した。
『此人の意見を、組頭が聞入れてくれたら、斯うした負けは取らなかつたらう』
と、今更になつて、繰言をいふものもあつた。ところへ、關谷が、血刀を杖にして、よろぼい〳〵やつて來た。
『やツ、間宮氏』
『オー、關谷氏』
『まことに面目もなき、この敗戰、あんたに會はす顏がない』
『今更に、何をいはれる。勝敗は、時の運で御座る』
關谷は、その場へ、ぼツたり倒れた。
『拙者も、この儘ま死ぬのぢやが、どうか江戸表へは、貴殿から、此事情を報告して下さい』
『それは、承知いたした』

『一刻も急ぐ、はやく出發して下さい』
『關谷氏、疵は……』
『重傷ぢや』
林藏は立寄つて、關谷を引起した。なる程、重傷ではあるが、生命は、取り留め得るであらう。併し、是等の人を、此儘にして立去るに忍びないので、いくぶんの躊躇はしたが、それは私情である。關谷のいふ通り、此始末は、一刻もはやく幕府へ報告して、善後の策を立てる必要があるのだ。

一三

ロシア人は、勝ち誇つた勢ひで、再び、押寄せて來るに、違ひないから、それに備へる丈けの事は、林藏の差圖ですつかり出來たやうなものゝ、要するに、敗兵を集めて、燒け殘りの家屋や、丘陵に據り、辛うじて防戰の用意をしたに過ぎないのだ。酷い敗けやうをしたので、士氣は、頗る振はず、武器も不充分であり、銃丸も少なく、糧食の倉庫も燒かれてしまつたから、その心細さは、一と通りでない。
『我等は、公儀の命を帶びて、この北境を守備するものであるから、最後の一人になる迄、死守しなければならぬ。この上、一歩でも退くやうな事があれば、武士の面目は立たぬのみならず、國辱にも相成るのであるから、各自はその覺悟で、飽迄も、敵を擊退して欲しい』
林藏の激勵する、訓示を聞いて、恥を知るものは、再び元氣を回復して、最後まで鬪ふ心にはなつたけれど、何分にも多數のものは、疲れて居るばかりでなく、多く傷ついて居るのであるから、萬一にも、敵が押寄せて來た時、どうして之れを擊退するか、考へて見れば、甚だ危ないものだ。
捕虜になつて、船へ連れてゆかれたものか、一人丈け歸つて來て、林藏へ、書面を渡した。

『このたびは、これで引揚げるが、若し此上にも、通商開國を、拒むといふならば、再び押寄せて來るから、左樣思へ』

その書面には斯う書いてあつた。辭柄も、頗る傲慢を極めて、頗る失禮な書振りではあるが、この場合、再び押寄せて來られないのは、却つて幸福であつた。關谷は、ナカ〳〵の重傷ではあるが、幸ひにして經過が良く、傷も、急所を避けて居たから、幾分の愁眉は開いたが、可哀さうなのは、戸田と川口の兩人であつた。

林藏は、戸田と川口の遺骨の一片と、髻を切つて、之れを小さい箱に入れた。その遺族へ渡さう、といふのである。負傷して元氣の無いものは、函館まで引上げさせ、殘るものは關谷を守つて、代る兵の來る迄、此處に留ることになつた。林藏は、例の箱を携へて、これから江戸へ、急行する事になつた。

『それでは、關谷氏……』

傷を包んで、寢て居る、關谷の枕元で、林藏は、別れを告げよう、と爲るのだ。關谷は、苦しさうに息を吐いて、

『このたびは、貴下の意見を用ひず、斯かる失敗を遂げて、何とも申分けはないが、どうぞ許して下さい』

『その御挨拶では、却つて痛み入る。抽者の意見が採用されても、或は此敗を遂げたかも知れない。勝負は時の運で何とも致し方がない。そんなことは思はず、はやく傷を癒して、此敗辱を雪ぐことを心懸けるのが第一であるから氣をしッかり持つて、函館から、醫者をよこす迄、充分注意して下さい』

『有難う』

『屈强な兵士を、多く送らせて、この敗殘の兵士と代らせる事にいたす』

『何分宜しく御願ひいたす』

『兩氏の御遺族へは、抽者から、然る可く申次ぐ事にいたさう』

『その邊の事は、すべて宜しく願ひ度い』

林藏は、從者五六人を連れてシヤナを出發した。函館へ立寄つて、始終の報告をすませ、それから江戸へ急行した。急飛脚を以て、この始末は、すでに報告してあるから、幕府の方では、大騷ぎをやつて居るのであつた。その前から、警報はいくたびか續いて居るので、多少は考へても居たらうが、優柔不斷の幕吏は、根本の方針も立てず、徒らに評議を開いて、議論ばかりして居たのである。

將軍の家齊は、ひどく心配して、しきりに老中へ、北地の警戒を命ずるのであつたが、大した名案もなく、毎日の評議に頭を惱めるばかりであつた。唯だ一人、松平信濃守が、斯ういふ意見を力說して、之れが實行される事になつた。

『このたびの變報は、別に珍らしいことでもなく、斯樣の事の一度はあるのが、實に當然なのであつて、それに對する充分の備へを怠つたのは、公儀の方針が、根本に於て、ぐらついて居たからである。事變の起るたびに、會議を開いて、對策を定めるやうなことでは、とても北地の警備は出來ぬから、今後は左樣の事のないやうに、大がゝりの組織で、警備の手順を、つけるが可い。それよりも、差當つての心配は、ロシア人の佐渡へ來ることである。この次ぎは、必ず左樣なるであらうから、奥羽の諸侯に命じて、その備へは爲せる事にいたしたい。北地の警備に就ては、德望、技量、ともに備はつた人物を、一日も早く送つて、臨機の處置を執らせる事に定めて、その適任者としては、堀田正敦が良い、と思ふ』

評議の末、堀田は、函館へ行く事になつた。此時に、例の平山行藏が、配下の者と共に大活動した物語もあるがそれは略す事にいたさう。

一四

間宮林藏の名は、その頃から、やうやく幕閣のうちにも、知る人があるやうに、なつて來た。引續いて來るシヤナ

の變報、その報告を爲るものは、いづれも間宮の爲人を、推賞するものばかりであつた。このたびの敗北も、間宮の建策を、上司の者が、採用しなかつた爲である、といふことに、みな一致して居るので、間宮の名は、老中の間にも知れ渡つて、はやくも、履歴の取調を命ずるものがあり、復開ながら其爲人を評するものもあつて、間宮の評判は、非常に高くなつて來た。

人間の毀譽は、斯うした問題が起ると、直に顯はれて來るものだ。そのいづれが、果して適評であるか、といふことは、しばらく措いて、とに角、善いとか惡いとか、何とかいはれて、噂されるものである。左樣なれば、もうしめたものだ。それから先きは、本人の力次第で、惡評を良く爲ることも出來るし、また出世の手蔓を、引出すことにもならう。その代り、一つ間違へば、奈落の底へ落ちるやうに、すツてん轉りと、投げられることもある。

實をいふと、階級思想の盛んな時代、幕末の當時に、常陸の片田舎から出て、たとへ、どれほどの天才肌であらうとも、勘定方や、普請方の下役で、算盤ばかり彈いて居たところが、どうにもなるものではない。兎も角も、人の評判に上つて、其名の現はれて來たことは、彼の活躍する天地がやうやく、拓けて來る所以になつたのである。林藏々々と、呼捨にされて居たものが、間宮さんといはれるやうになり、やがて、『間宮氏』と呼ばれて、北地へ出役を命ぜられたのは、彼の身に取つて、この上もなき仕合せであつた。

されば、その、實力が、算盤丈けのことであつたら、要するに刀筆の吏で、その生涯は、大概知れたものであつたが、彼の本領は、左樣に小さいものでなく、識見や膽力の上からいふても、一廉の武人であつたから、シヤナの變事に就て、忽ち人の知るところとなり、江戸表にまで、その、噂さは傳はり、終に老中の心まで、動かすやうになつたのである。彼が、いかなる人物であるか、といふことを知つて、面會する日を、樂みにしたものは、幾何も無かつたであらうが、あツさりと、その人間を見たいと、考へたものは、少なからず有つたに違ひない。

間宮は、江戸へ着いて、その旨を屆け出ると、先づ北地掛りの役人が、之れを引見して、その報告を、一と通り聞

いた。この時は、通り一べんの報告丈けで、それに關する意見の如きものは、さらに言はなかつた。數日の後ち、老中の列座して居るところへ、間宮は、改めて呼出された。質問は、松平信濃守から、先づ始められた。

『シヤナの變事は、前以ての報告、それに其方の上申にて、よく相判つたが、さて、之れから先きの警備は、いかゞいたして可いか、その邊の分別は、どうか、忌憚なき意見を、述べて見よ』

『ハツ、輕輩の身分を以ちまして、高貴の御列座をも憚からず、意見など申すほどのことは、勿論申上げかねまするが、長く北地に居りました爲に、多少は、北地の事情も辨へ居りまするゆゑ、これ等の事情を申述べることにいたしませう。

北地と申しますれば、蝦夷一圓を指して、斯く申すのではありまするが、實は、千島群島を以て、北地と見做すのが可い、と、存じまする。さて、北地の警備に就きましては、南部津輕の二藩のみに任かせず、公儀より、進んで御手入れ、然る可しと存じまするが、それに就て、最も大切な事は、ロシア人が、どういふ次第で、千島へ力を入れて斯く侵して來るか、といふ事も、よく考へて見る必要が御座らう、禍害の因……千島を眼がける禍害の因は樺太に在ると、存じまする。從つて、何よりも先づ、樺太の事情を、くはしく知ることが必要であり、進んでは、ロシアの國境までも、ふみ込んで、一切の地理人情等も、實地取調べなければ相成るまいかと、存じまする。樺太の地理人情を、くはしく知つて、千島との關係を究めて、茲に始めて、北地警備の根本策が定まり、蝦夷方面の禍害は、完全に除き得られる儀と存じまするが、この點について、篤と御高慮のほど、願ひ上げまする』

と、淀みもなく申立てた。

『而て、樺太の地理人情を究むる事は、いかにいたせばよいか、その儀に就て、存じ寄りもあらば、承り置かう』

信濃守の質問は、可成りの難問であつたが、之れに對する、間宮の答へは、

『その儀につきましては、わたくしへ、探險の御沙汰之れ有るやう、ひとへに願ひ上げまする』

『何と申す。其方が、自ら探險にまゐるとか』
『ハツ』
老中は、互に顏を見合せて、眼を光らせたが、すぐに宜しいとはいはず、その日は、之れ丈けで終つた。

一五

當時の函館奉行は、羽太正養で、その配下に、松田傳十郎といふものが居た。
松田は、江戸に居る頃は、御小人目附であつたが、寛政十一年の頃、北地開拓の議が、幕府に起つて、政德丸といふ船を、その用に差向けることになつたが、いよ〳〵取締を選んで、船へ乘込ませよう、となつたら、誰一人として進んで之れを引受けるものが無く、船の出帆は、日一日と延びるばかりであつた。泰平が、二百年もつゞくと、武士の氣風も、追々に廢れてゆくから、斯うした冒險的の役を嫌つて、容易に引受けるものはなかつたのだ。一言に、蝦夷松前といつても、交通不便の時代とて、よほどの奮發を爲るのでなければ、好んで行くものはない。
此時に、松田は、自ら進んで、石川左近將監へ、願書を差出した。それには『自分が、北地開拓の先驅者になりたい』といふのであつたから、石川は、松田を呼んで、之れを引見することになつた。
『其方が、松田傳十郎と申すものか』
『ハツ、傳十郎に御座ります』
『この願書は、其方が認めたものであるか』
石川は、松田の差出した、書面を突きつけた。
『御意の通り、わたくしの認めたものに相違御座りませぬ』
『いかなる所存を以て、斯樣の儀を、願ひ出でたか』

『政德丸の出帆が、追々、遲延いたしまするゆゑ、その事情を紀しましたる所、北地開拓の先驅として、彼の地へ渡るもの之れ無き由を承り、心外に存するの餘り、推して願ひ出でましたる次第に御座ります』
『其方は、相當の役柄を有つて居るものではないか。何を苦しんで、斯樣の役目を望むのであるか、之れには仔細のあることであらう』
『別に仔細とては御座りませぬ』
『控へろ』
『ハツ』
先づ一喝して、石川は、ぢツと、傳十郎を睨みつけた。傳十郎は、大して驚いた容子もないが、さればといふて、强ひて發言しようと、するのでもなく、しばらくは、双方とも無言であつた。
『從前の役目を輕んずる事は、公儀を憚からぬ所置と思はぬか』
『左樣には考へませぬ』
『然らば、いかゞ考へるか』
『北地の開拓は、我國の大事と存じまする。公儀の御企てに對して、この御役志願のものは、續々之れ有る可き筈なるに、誰れ一人として、進んで御請いたすものゝ無きは、ひとへに士道の頽廢せる爲と存じ、甚だ遺憾に堪へませぬ。不肖の身とも省ず、わたくしが、自ら進んで、この御役に當りたく存ずるは、いさゝか御奉公の萬分一を、盡すの覺悟からで御座います。今日迄の御役に、不滿足なるが爲めでは、毫頭ありませぬ。思ふに、わたくしなどの輕輩が、斯かる大決心を以て、北地の探險に當る、と聞くならば、今後は、陸續として志願者も出るに相違なしと、深く信ずるが儘、願ひ出でたる次第で御座ります』
傳十郎の熱誠は、面に現はれた。殊に、莊重の辯舌は、他の肺腑を衝くの慨があり、一言一句、金石の響きがあつ

た。石川は、ひどく感じ入つた容子で、稍や膝を進めた。

『其方の覺悟は、よく相判つたが、今直ちにそれを許す、といふ次第にも相成るまい、いづれ後日の沙汰ぢや』

『何分宜しく願ひ上げまする』

他の老中からも、蝦夷や千島の事に就て、いろ〳〵と話もあり、警備の點についても、意見の交換があつた。尤も傳十郎は、身分と役柄の相違で、問はれる時は答へるが、みだりに口を出すことは出來ず、謹で老中の話を、聞いて居る丈けの事であつた。

それから數日經つて、傳十郎は、函館奉行の配下に移され、調役元締といふことになつた。函館までは、政德丸の乘込みを命ぜられ、而かも、取締の名に依つて、出張の役人頭になつた。今の事にして見れば、大した出世でもないが、その頃としては、破格の登用を、受けた譯だ。

豪氣にして識見ある、傳十郎の事であるから、すぐ函館へは行かず、一直線に、厚岸まで乘付けて、それから函館へ引返す、といふやうな事をやつて、上司を驚かしたが、函館へ着いて後は、羽太正養の下役として、しばらくは、その囊を、延さずに居た。

一六

却說、間宮林藏は、幕府へ、くはしい復命を終り、しばらく暇を得て、閑散に日を送つて居ると、急に信濃守から迎ひが來て、役宅へ呼ばれた。今俄かに、呼ばれるやうな事はないのであるから、さては例の一條か、と思つて、心中頗る喜んで、役宅へやつて來た。

『樺太の奥地を、探險いたしたいといふ願ひは、いよ〳〵聞屆けられる事に相成つたゆゑ、先づ以て、それを申渡す』

豫ての希望を、聞屆けられるといふのであるから、間宮は、非常な喜びであつた。

『段々の御配慮、心根に徹して、有難く存じまする』

『自ら進んで、この難事を、爲し遂げよう、との心懸けは、感ずるに餘りあるが、併し、人跡未踏の蠻地へ、危險を冒して參るのぢやから、ずゐぶん心いたして、無事に目的を果すやう、充分の注意を以て、まゐるやういたせ』

『ハツ、有難き御沙汰を承り、感激の至りに堪へませぬ。ます〳〵御奉公の大切なることを、深く記念いたし、必ず目的は遂げて、御覽に入れまする』

『大丈夫の一言、余も快く思ふぞ』

『出發の御沙汰は、何日頃に相成りませうか』

『いづれ主役のものより、公に申渡すであらう』

『ハツ……』

『猶ほ一應、申し置く事は、函館奉行下役に、松田傳十郎と申すものが居る。同人は、余も能く心得て居るが、衆にすぐれた人物である。從つて、樺太探險の一條については、同人も共に行くことに相成らう、と思ふ。是れも併せて、心得置くが可い』

之けを聞くと、間宮は、少し疑ひを抱いた。松田の名は、未だ一度も、聞いて居らぬから、どれほどの人物か、更に判らない。併し、信濃守が、推賞する位であるから、相當の人物に違ひない、とは思ふが、それにしても樺太探險に、同行し得るほどのものか、どうか、考へるに從つて、疑ひは深くなるばかりであつた。

『傳十郎の事は、よく知らぬか』

『さらに存じませぬ』

『却々の人物ぢや』

『樺太の探險につきまして、多少の經驗あるもので御座りますか』

『その儀については、確と申し難いが、その爲人は……』
と、いつて、信濃守は、少し考へたが、
『其方の相談對手にならう、と思ふ』
『左樣の御人ならば、よく御指導をうけて、共々に目的を遂げ得られませう』
『互に相犯さず、よく打合せをいたして、徒らに功名爭ひを、いたさぬやういたせ』
『御訓戒は、深く感銘いたしました』
これで、酒肴が出る。充分に御馳走を戴いて、間宮は、役宅を出た。翌日は、さらに呼出されて、函館行の辭令をうけ取つた。別に『樺太の奥地探險申付ける』といふ命令もあつた。
いかに偉い人でも、多少の自負はあるから、間宮が、樺太探險を、非常に困難な事として、之れに當るものは、自分の外にない、と、堅く信じて居る丈けに、無名の役人が、自分と同じやうに、それを爲し得るとは、思つて居なかつた。然るに、意外千萬、信濃守から、松田の事を聞かせられ、殊には、口を極めて、松田を激賞されたので、半信半疑のうちにも、松田の事を、いろ〳〵に想像し乍ら、函館へ、乘込んで來た。
その頃の事であるから、陸を行くにも、多くの日を費し、旅中の不便、道路の嶮しいことは、素よりいふ迄もなく幕府から手當を貰ひ、役目を以て行く身は、いくぶんの自由は利くとしても、二百里の長旅には、可成りの疲れを覺へるものだ。前に來たこともあり、函館の事には、通じて居るばかりでなく、自分の樂みにして居る、大切な役に、就くことを得たのであるから、到着匆々、疲れも休めずに、奉行の役宅を訪ふて、羽太正養に、面會を申入れた。
羽太は、既う間宮が來るのを、よく知つて居たので、直に面會を許した。
『このたびは、新役として參りました。この上の御取廻し、然る可くお願ひいたします』
『樺太探險の一條について、重大の御役を、引受けられし趣、聽て、承り及んで居たが、早速の到着にて、御苦勞に

存ずる』
『彼の地へ、出發の手順は、いかゞ相成り居るか、その儀を、承知いたしたく存じまする』
『その件は、松田傳十郎なるものについて、萬事お聞き取り下さい』
と、すでに傳十郎が、萬事を承知して居る、といつた容子であるから、間宮は、いよ〳〵傳十郎に、はやく逢ふて見たくなつた。
『松田と申す御人には、何時、面談いたすことに、相成りませうか』
『其許の都合にて、何時でも宜しい』
『然らば、これより直ちに御訪ねいたしても、宜しう御座らうか』
『イヤ、それには及ぶまい、迎ひに使はす』
『恐れ入ります』
羽太は、松田を迎ひにやつた。

一七

羽太の迎ひを受けて、傳十郎は、すぐやつて來た。傳十郎に對する、羽太の態度は、上司が、下僚に對する調子とは、全く異つて、殆んど友人に對するが如くであつた。羽太は、傳十郎に向つて、
『この人が、間宮林藏どのぢや』
と、先づ紹介した。林藏は、ぢツと、傳十郎の容子を、見て居たが、傳十郎は、殆んど林藏を、眼中に置かぬらしい。負けぬ氣の林藏としては、頗る癪に觸つたが、羽太の前でもあり、新役の身分とて、こみ上げて來る、癪の蟲を、ぐツと抑へて、

『拙者は、間宮林藏と申します』
極めて辭を卑うし、丁寧に挨拶した。傳十郎は、輕く首肯いて、
『松田で御座る』
と、いつた限り、羽太の方へ向いて、林藏へは、僅に一瞥を、與へたばかりである。
『樺太取調の儀に就ては、傳十郎殿と、充分の打合せをいたして、萬遺算なきやうして欲しい』
羽太に、斯ういはれたので、林藏は、いよ〳〵蟲が收まらなくなつた。
『樺太の儀に就て、松田氏は、すでに御取調が、附いて居られますか』
『イヤ、少しも存ぜぬ』
『御存じない』
『左樣う』
『はは了、御存じない……』
『存ぜねばこそ、取調にまゐるので御座る』
『併し、多少は御存じの事も御座らう』
『其許は、いかゞぢや』
『少しは心得居ります』
『いかにして御承知か』
『シヤナ在勤の砌、聞取んだ事が御座る』
『要するに、又聞ぢやな』
『又聞にもせよ、多少は存じて居る』

『ハツハ、、、、、』
飽迄も、輕侮してかゝる傳十郎、かねて傲慢な人である、との噂さは、聞いて居たが、この調子で、頭から呑んでかゝられては、林藏も、人一倍に、負けぬ氣を、有つて居るから、どうしても衝突は、免れない譯だ。
『何が可笑しう御座る』
『……』
『拙者の申した事に、何か可笑しい事が御座つたか』
『笑はうと、笑ふまいと、それは各自の勝手ぢや。それについて、御咎めをうける譯もなく、また一々御答へ申すにも及ぶまい』
『可矣、足下が、その御量見であらツしやる以上、拙者も、同じ考へを、有つ迄の事で御座る』
遂々、兩人は衝突してしまつた。この容子を、羽太は、默つて見て居たが、もう潮時と思つたものか、微笑を含み乍ら、兩人に向つた。
『御互に、論ず可きことは、どこ迄も論ずるが可い、それが研究といふのであらう。なれども、感情を激せしめては相成らぬ、この點は、兩氏とも、深く愼んで欲しい。すべて、公事の上に、私心を挿むことは、大の禁物ぢや。私心なくして爭ふところに、公明の裁は下る。兩氏が、心を協せて、互に扶け合へば、萬事が、遲滯なく進む、といふものぢや。固より學殖深く、識見の高い、兩氏に對して、斯やうなことを申すは、甚だ失禮では御座らうけれど、これは拙者の老婆心、惡う思ふて下さるな』
と、流石は、函館奉行の貫祿、そのいふところに、無駄はなかつた。
『御訓示の點は、一々御尤千萬、思慮淺く、言行の疎野なりしは、拙者の不用意からで御座つた。今後は、深く愼みますから、御心安く思召下さい』

『只今、松田氏から、申上げました通り、わたくしとても、同じ事で御座る。この上は、身命を賭して、御奉公仕るは申迄もなく、百事、松田氏の御指揮を、仰ぐ事にいたしますれば、その點について、御心配は下さらぬやう、願ひ上げまする』

兩人が、斯う打ち解けて、誓言する以上、その心も同じであらう、と、羽太も、重荷を下ろしたやうな心地で、一と先づ安心した。

松田の氣性は、よく判つて居たが、間宮が、どういふ人間か、といふことは、よく判つて居ない。只だ江戸の方から、いろ〳〵いふてよこしたのに依つて、考へて見れば、これもナカ〳〵負けぬ氣の男らしく、この兩人を並べて、大仕事を爲せるには、少なからぬ注意を拂つたのである。其處で、先づ初對面に衝突させてしまへば、跡が樂であると考へて、斯うした取扱ひをしたのであつた。この點からいふと、羽太も、普通の奉行ではなかつた。

一八

政德丸の準備に、多少の日を費した。それが、すツかりすんでから、羽太の役邸に、兩人は、やつて來て、打合せを爲ることになつた。

先づ、どこへ行くか、といふのが、第一の問題であつた。兩人の意見は、宗谷まで行つて、行先きを定めよう、と爲るのであつたが、それについては、しツくり話が合つて、さらに樺太へ、乘込むについての方法を、豫め講じて置くことになつた。

『樺太は、人跡未踏の蠻地であるから、兩人が揃つてゆくよりは、離れ〳〵に行く方が、却つて可い、と思ふ』と、林藏が、先づ口を切つた。

『危險を冒して、乘込む蠻地ならば、兩人揃つてゆく方が、却つて危險は少なからう』

之れは、羽太の注意であつた。それを聞いて、林藏は、

『このたびの探險は、固より身命を拋つてかゝることであるから、御互に生還は、期して居らぬ。さうした危いところへ、兩人が揃つてゆけば、兩人ともに斃れる恐れがある。それよりは、離れ〳〵に行つて、いづれか一人は、萬一の僥倖を期する、とした方が、よいと存ずる。また、それ迄の覺悟をいたして、兩人ともに助かれば、之れに越した事は御座らぬ。從つて、離れ〳〵にゆく、といふのは、萬全の策か、とも考へられるが、松田氏の御考へは、いかゞで御座るか』

今迄、默して居た、傳十郎は、

『勿論、その通りで御座る。拙者も、間宮氏のいはれる如く、離れ〳〵が可い、と存ずる』

兩人の意見は、先づ一致して居た。羽太は、さらに、間宮に向つて、

『然らば、猶ほ尋ねるが、その離れ〳〵に行く、といふのは、どういふ風にいたすつもりか、樺太のいづれへ、誰れが行く、といふ事も、豫め定めて置く必要があらう。この儀については、何う考へて居るか』

『その儀は、樺太へ着いてから、松田氏と、相談の上にいたしたい』

『なる程』

この日の相談は、それ迄の事にして、出帆の日を、さらに定める事になつた。いづれにしても、全く不案內の土地へ乘込むのであるから、この程度の打合せより外、進んで相談のしやうはなかつた。

兩人が、決死の覺悟で、乘込むといふ點については、羽太も、心から敬意を表した。慰み半分に、山登りをやつて生命を失ふ、といふやうな手輕いものでなく、その探險の結果は、北境の防備に、直接の關係を有つのであるから、兩人の責任は、ナカ〳〵重いのである。

人間は、只死を決する、といふのばかりが、偉いのではない。その決死に、深い意義を有つことに依つて、初めて

決死の價値は、生じて來るのだ。女の愛に溺れて心中する、といふのも、決死の覺悟といへるが、その事に依つて、第三者たる國民に、何の實感を與へるか、深山幽谷へ乘込んで、霧に包まれて死ぬ、といふことも、壯快のやうには見えるが、その決死に依つて、一般の人に、何の實益を殘すか。さうした點からいへば、人間は、自分の立場のみ考へて、死を急ぐのは、愚人の決死であつて、その死には、三文の價値もない。人の登らぬ山へ行つて、霧に包まれて死ぬ、といふ事丈けでは、その死に、何の意義もない、といふことになる。娯樂の爲の死ほど、つまらないものはない。自分の愛慾の爲めにする、決死の覺悟位、無意義のものはない。人間として、この世に生れた以上、第三者の實感と實益を、豫め考へて、行動する必要がある。そこに、男子の眞骨頭は存するのだ。單に死ぬ、といふ覺悟を、する丈けのことでは、人間としての價値は認められぬ。

林藏と、傳十郎は、いよ／＼日和を見て、函館を乘出すことになつた。政德丸へは、さかんに見送りの人が、やつて來て、兩人の爲に、前途の祝福を祈るのであつた。遲れて來た、奉行の羽太は、船の胴の間に、酒宴を開いて、兩人に、訣別の盃を、執り上げた。

『公儀よりも、有難い御沙汰があつた。それを傳へる』

と、いつて、奉書に認めた、激勵の文書を、讀み聞かせた。松田から、之に對して、答辭を述べる。間宮も、御禮の一言を述べた。今ならば、萬歲聲裡に出帆するのだが、その頃には、さうした事はなく、只だスラ／＼と式もすんで船は、いよ／＼錨を上げた。

一九

樺太の不知火には、その前から、日本人の漁場が在つて、松前藩の手が、延びて居たので、間宮と松田が、いよいよ乘込んだ頃には、幕府の役人が、すでに出張してゐたのである。佐藤儀之助、山本莊左衞門の兩人が、その取締

となつて、十數名の部下と共に、越年して居たのだが、それから先きには、一歩も踏み込んで居なかつた。勿論、斯うした連中は、幕府の命令をうけて、厭々ながら出張して居るのであつた。自分から進んで、人跡未踏の地を發見して、それをどうしやう、などいふことは少しも考へては居ないのであるから、ほんの案山子も同樣な、只の番人にすぎなかつた。日本の漁場といふても、日本人は、僅に三四人、その他は、多くアイヌ族の漁夫であつたから、取締の上には、何の至難しいこともなく、役人は番小屋に引ッ込んで、酒ばかり飲んで居る。どこへ行つて、何を見ようといふ的もなければ、之れといつて、美味物が食へる、といふのでもなく、只だ酒丈けは便船の度毎に、送つて來て吳れるので、大切にして蓄へてあるから、冬籠りを爲る間は、それが寒さを凌ぎ得る、唯一の樂しみ、になつて居たのだ。

沖合に、船が見える、といつて、見張りのアイヌが、騷ぎ出したので、役人等も、すぐに駈け出して見た。見れば、日本の船であるから、その喜びは一と通りでない。第一の樂みは、新たに酒を得られるのと、變つた食物を得られる事である。役人は、交代のものが來てくれるのが、他人の知らない、樂みの一つであつた。船は着いた。上陸した人を見れば、立派な武士が、只だ兩人である。

『わたくしは、佐藤儀之助と申します』

『山本莊左衞門で御座ります』

それから部下のものも、各自に名乘つた。

『拙者は函館奉行羽太正養殿配下、松田傳十郎と申す』

『江戸表より特派いたした、間宮林藏で御座る』

聞いて見れば、みな大い役人ばかりだ。佐藤等は、すぐに番小屋へ案内して、兩人からの質問に對して、それ／＼に答へた。

内地では、もう雪も融けて、花の咲く頃だが、此處は、未だ内地の冬にひとしく、吹く風は、ナカ／＼に寒い。四方の森林や、遠く見える、山の丘には、白い布が冠さつて居る。けれども、自然の氣候は、さすがに此地へも、來て居るから、何となく初夏らしい、氣分は爲るのであつた。

『松田氏……』

と、林藏は、傳十郎に、聲をかけた。

『斯うして日を過すは、愚の骨頂ゆゑ、これから取調の爲めに、出發いたさうと存ずるが、貴下は、どう思はれるか』

『それに異存はないが、今着いたばかりで、未だ何等の準備もなく、これから出發する、としてもその方向も定めて行かねばなるまいから、兩三日は、遲れても致方あるまい』

『相談いたしたとて、別に得るところはあるまい。當地出張の役方も、これから先きは、一切判らぬ、と申して居る上に、我等とても同じ事なのぢやから、所詮は、小田原評定にすぎまい、と存ずる。左樣なことをいたして居るよりは、一と足でも、先づ奥地へ、ふみ込む方が、我等の目的も、果し得る道理であるから、明日にも、出發いたすことにしたいが、御所存は、いかゞで御座る』

傳十郎は、少し考へて、

『可からう、左樣いたすとして、これから支度を爲せよう』

と傳十郎も、林藏の意見を容れたから、佐藤と山本を呼んで、その支度を命じた。

『これから奥地へ、御立入りで御座いますか』

『左樣ぢや』

『へへー、御案内は、どういふ事に相成りませうか』

『足下等のうちで、案内をいたすものはないか』

佐藤は、急いで手を振つた。

『ど、ど、どういたしまして、とても私共には、むつかしう御座います』

『何故か』

『一里や二里は、行つて見たことも御座いますが、とても奥地深く進むことは、いかなる御方にも出來ますまい』

『それを、行つて見よう、といふのぢや』

『御苦勞樣で御座います』

『足下等は、行かれぬといふか』

『はツ……』

『然らば他に案内者を出して貰ひたい』

『篤と相談いたしまして、御答へ申上げます』

二〇

佐藤は、山本と共に、控所へ退いた。

『山本さん、どういたしたものかな』

『とても出來る事ぢやないから、お斷りいたさうか』

『併し、重い御役方に對して、只だ出來ませぬ、とばかりでは、御咎を受けやう』

『何といふて叱られても、出來ない事は出來ないのだから、どうにも致方はあるまい』

『それは、理窟といふものだ』

『たとへ何といはれても、出來ませぬと答へる外はあるまい。うツかり引受けたら、それこそ大變だ』

『何しろ、困つた事になつたな』
『地理や人情は、少しも知らず、奥地へ、ふみ入るにいたしても、どこ迄行けば可いのか、その見込も立たないのに、只だ出かけて行かう、と爲る、彼の人達の度胸は、實に大いものだね』
『その通り、御答へいたすことにしようか』
『時に、吾々の身の上は、どうなるのだらう』
『身の上とは……』
『既定の交代は、有るのか無いのか、その話は更に無いが、どうしたのだらう』
『聞いて見ようか』
『それが可からう』
兩人の話は、それですんだ。傳十郎の前へ、兩人は、復た出て來た。兩人は、互ひにゆづり合つて、容易にいひ出さなかつた。遠慮してゆづり合ふのではなく、うツかりいひ出して、叱り付けられては、事頗る面倒と見て、ゆづり合つて居るのである。その容子を見ると傳十郎は、むづかしい顔をして、兩人を、ぢツと睨みつけるので、兩人は、いよ〳〵縮み上つて、むづ〳〵して居るばかりであつた。
『案内者の事は、いかゞ相成つたか』
いくぶんか、聲が荒かつたので、兩人の頭は、一時に下がつた。
『いかゞ相成つた、と聞いて居るのぢや』
『ハツ……』
『ハツ、では解らぬ』
『ハツ……』

『佐藤ッ、どういたした』
名を指して問はれたので、佐藤は、止むを得ず、頭を下げた儘、蟲の泣くやうな、小さい聲で答へた。
『案内者は、どういたしても、見付け出し得ませんので、まことに恐れ入つて居ります』
傳十郎は、いよ〳〵澁い顔になつた。
『ふふーむ、案内者が無い、といふのか』
『ハイ』
『足下は、どうぢや』
『ハツ』
『脈ぢやといはれるか』
『……』
『判然と、いふて見なさい』
『手前は、どうも、まことに、實はその恐れ入りますが……』
『恐れ入りますが、どういたした、といふのか』
『御免を蒙り度いもので……』
『脈ぢやといはれるのか』
『脈といふ次第では御座いませんが……』
『つまり脈なのであらう』
『……』
追究が嚴しいので、佐藤は、汗を出して、弱つて居る。

『然らば、山本氏は、どうぢや』
『手前も、佐藤さんと、同樣の次第で……』
『矢張り厭か』
『ハツ』
『兩人とも、公儀の御役には立たぬ、と、斯樣申すのぢやな』
兩人は、聲を揃へて、
『イエ、決して左樣の次第では御座りませぬ』
『然らば、參ると申すのか』
『それは、その、まことに以て……』
『ハツハ、、、、、、足下等のいふことは、何が何やら、さツぱり判らぬではないか』
『恐れ入りました』
林藏は、終に聞きかねて、口を入れた。
『松田氏、もう宜しいでは御座らぬか、そのやうな人と、對手になつて居たのでは、いつ迄經つても、相談は決まるまいから、案内者が無ければ、無いでよいと思ふ。とに角、乘出すことにいたさうではないか』
『それが可からう』
『それについては、先づ方角を定めて、乘出す外はない。拙者の考へでは、小舟を利用して、北へ、北へ、と進んで行くことにいたしたら、何時か陸外れには出るであらう。大陸つゞきならば、適當の場所で、小舟を乘捨てることにいたして、山越をいたして進む、と、斯樣にいたしたなら、どこかへ落ち着くに相違ないが、それでよからうと存ずる』

『御道理ぢや』

二一

林藏のいふ通り、傳十郎にも異存はないが、全然知らぬ土地へ、ふみ込んでゆくのであるから、その行く可き方向を定めるに就ても、兩人の間に、自分は、どちらへ行く、といふ見込みは、決いて居ないのであつた。兩人が放れ〴〵になつて、單獨でゆくとしても、一人や二人の從者は、伴れてゆく必要はあるが、行く先きの定まらぬ旅路、殊に蠻地の探險といふのであるから、容易に應ずるものはなからう。
『時に間宮氏、方角は、いづれに取るつもりか』
『さ、その方角については、拙者に於ても、見込みは立たぬのぢやが、東へ行くか、西へ進むか、それより外に道はあるまい、と存ずる』
『假りに左樣いたすとして、足下は、どちらへ行くつもりか』
『未だ考へて居らぬ』
『東が利か、または西が利か、それの判らぬのは、却つて御互の爲めには、よいかも知れぬ』
林藏は、しばらく考へて、
『寧そ、抽籤にいたさうか』
『ふふーむ』
『それより外に、方法は御座るまい』
『可からう』
相談は、抽籤に依つて、行く可き道の東西を定める、といふことに決した。佐藤や山本は、それを聞いて居たが、

その無謀には驚いた。どこへ行くといふて、落付く先きも判らず、途中には、どういふ事があるか、それも量知れず、只だ譯もなく、蠻地へふみ込んで行かう、といふのであるから、誰れが聞いても、驚くのが當然である。抽籤をすると、林藏は、東へ道を取ることになり、傳十郎は、西へ向つて行くことになつた。

『やツ、抽者は、東ぢや』

『わしは、西へ行くのか』

『どちらへ行くのが、利か不利か、少しも判らぬけれど、兎に角、この儘進むことにいたさう』

『それが可い』

そこで、從者を定めることになつた。斯うした、不向見の御伴は、誰れにしても厭なのであるから、免れたいと思ふのは、普通の人情である。けれども、上司の命として、

『お前、行け』

と、いはれたら、否應なしである。いづれも、胸の動悸を抑へて、しづかに、兩人の容子を、見て居るのだが、その心配は一と通りでない。役人のうちからと、アイヌのうちからと、各々一人づゝ伴れてゆく、といふことに決した。傳十郎は、佐藤に向つて、之れを申渡した。

『誰れが行くか、すぐに人選をいたせ』

『ハツ』

『これは、我國家に取つて、重大な使命であるから、誰れ一人として、躊躇するものはあるまいが、萬一にも、行くことを肯ぜぬものがあるならば、この方にも所存があるから、左樣思へ』

『ハツ』

『はやく致せ』

『山本にも、よく相談の上、御答へ仕ることにいたします』

『うむ、可し』

佐藤と山本は、傳十郎の前を退つて、詰所へ來た。

『オイ、山本ツ』

『うむ、弱つた事が出來たな』

『實に驚いた』

『何といふ亂暴な人達だらう』

『那んな無茶をいはれては、閉口する外はない』

『はやく何とか答へないと、然らばお前達が、一しよに行け、といふかも知れないぞ』

『そりやア、大變だ』

『誰れでもよいから、はやく從者を定める事にいたさう』

『行くものがあらうか』

『そりや、あるまい』

『然らば、どう爲る』

『誰れでもよいから、この者等にいたしました、と答へたら、何とかならうよ』

『誰れにしても、みな厭なのに定まつて居るから、どうせ叱られて定まる事にならう』

自分等が、連れて行かれるのを、厭ふ爲に、部下のものを一人、アイヌを一人、都合四人を選んで、傳十郎へ、佐藤から答へることになつた。こんな調子で、無理に指名されるものは、全く迷惑であつたらうが、他人の迷惑は、どこ迄も堪へる。さうした事には、ナカ〳〵押の強い佐藤は、傳十郎の前へ出た。

二二

佐藤の差出した、四人の氏名を見て、傳十郎は、

『此者等が、案内いたすと申すのか』

『左樣で御座ります』

『本人等は、承諾いたし居るか』

『イエ、その……』

『何といたした』

『未だ本人へは、何とも申渡しませぬ』

『それは不可、先づ以て、本人等へ申渡した上、その諾否を聞いて見るのが、順序ではないか』

『ハイ』

『その手順をふまずに、氏名のみ申出ても、本人等が、行かぬと申しては、事の運びがつかぬ譯ではないか』

『ハイ』

『斯樣な事は、改めて申す迄もない筈ぢや。本人等の答を聞いても見ず、氏名のみ申出づるとは、甚だ以て其意を得ぬ。どういふ考へで、その手順を運ばなかつたか』

『公儀の御沙汰ならば、何人も違背いたすものは御座りますまい、と存じまして……』

『なる程、それは左樣ぢや』

『あなた樣より、左樣御申付け相成りますれば、必ず御受けいたす事と心得ます』

『公儀の御沙汰には、必ず背かぬ、と見込んでの事ならば、それでよい』

『四名の者を呼出しまして、宜しう御座りますか』

『宜しい。併し、萬一にも本人等が、承知いたさぬ時は、何といたすつもりか』

『その時は……』

『その時は、何といたす』

『……』

『本人等が、承知いたさぬ時は、お手前が、參るといふのか』

『その儀は……』

『その儀は、何といたした』

『ハツ』

『公儀の御沙汰には、何人も違背いたさぬ、と申したな』

『ハツ』

『下僚のものが、その命に服さぬ時は、上司が代るのは、當然であらう』

『……』

さア、弱つた。あまり巧いことをいふて、それに自分が、引つかゝつてしまつたのだ。今更に、その責任は、回避出來ぬ。傳十郎は、斯うして佐藤を、追詰めて置けば、必ず案内者をつくる、と見て、ぐゝと突ッ込んだのである。佐藤や山本のやうな、弱蟲をつれて行つたところで、何の役にも立たぬ位のことは、傳十郎にも、よく判つて居るから、佐藤さへ、追詰めて置けば、どういふ事をしても、必ず案内者を、誰かに定めて來る、と考へたから、その言葉尻を捉へて、逃げられぬやうにしてしまつた。

この考へは、うまく的中して、佐藤は、頗る苦しんだ。詰所へ退つて、四人のものを呼出し、この役目を申付ける

と、一人も、快く承知するものはなかつた。けれども、佐藤と山本は、必死になつて四人を押へつけてしまつたから、やうやく安心した。

いよ〳〵出發の支度もすんで、林藏と傳十郎は、東と西へ別れて、奥地へ、ふみ込んで行くことになつた。傳十郎は、西海岸に沿ふて、だん〳〵進んでゆく。その困難は、實に一と通りでなかつた。トンナイ、ホロコタン、ナヨロ、モシリヤ等の地を經て、行程は、頗る長く、五十日餘を費して、ノテトへ着くことを得た。時に、文化五年六月八日の事であつたが、此處には、多少の人家もあつて、林藏の來るのを待ち合せるには、稍や便利な所であつた。けれども、林藏は、終に來なかつた。

さう、長く滯留して居ることは、傳十郎の本意でないから、十八日目に、再び支度を整へて、出發することになつた。これ迄の行程は、船を以てしたのであるが、その先も、矢張り船で行くのであつた。風濤の難、それはいふ迄もない。艇るにも、食ふにも、すべて苦しみ通しであつた。

ナツコのラツカ崎へ着いた。此處は、樺太の盡きるところで、對岸の翠黛は、滿洲の一部である。岸邊の海草は、水面を掩ふて、船は、一尺も進み得ぬ。人間らしいものは、影一つなく、何を求めるにも、その便はなかつた。食盡きて、生魚を食ふ外はなく、今は、運命を天に任せて、僅に林藏の來るを、待ち合すより樂みはない。

乍去。今迄は樺太を以て、大陸つゞきとして居たのだが、此行に依つて、一つの孤島である、といふ丈けは、確め得たのである。

一二三

傳十郎が、西海岸に沿ふて、小舟で、乘出すと同時に、林藏は、不知火を出て、東海岸を、これも小舟で、奥地を、指して進んだ。シントツクといふところまでは、大した事もなく、辛うじて來たが、この邊は、一帶に風濤がはげし

く、舟行には、極めて困難のところである。

初め、出發する際になつて、俄に佐藤が、一しよに行く、といひ出したので、林藏は、それを許した。案内者の名はあつても、實は案内者でなく、只だ一しよに行く、といふ丈けのことで、地理に暗いものは、案内のしようもない譯だ。伴れて行く、アイヌも、只だ寒いのには、馴れて居るのと、粗食に甘んじて、よく忠實に働く、といふのが、その取柄であるにすぎぬ。

佐藤は、山本と共に、この案内を免れよう、として、しきりに小細工をやつて居るうちに、傳十郎や林藏の覺悟が、あまりに立派であるのに動かされて、佐藤は、林藏に、殉ず可く決心したのであつた。人の至誠は、實に強い威力を、有つて居るものだ、それを一貫すれば、何事でも、爲し遂げ得られる。心が心をうつ。至誠が人を動かす、といふのは、即ち之れである。

シントツクに、二日留まつて、風の凪るのを待つたが、どうしても風が止まず、波は、いよ〳〵はげしく荒れて、何時おだやかになる、といふ見込みもつかぬので、林藏は、しきりに焦り出した。

『佐藤ッ』

『ハイ』

『どうぢや、もう出かける事に、いたさうではないか』

『今出かけるのは、危險で御座いませう』

『危險は、覺悟の上ぢや』

『併し、強ひて危險を冒すにも及びますまい』

『此行は、終始危險を免れぬのぢやから、徒らに風波を恐れて、空しく一つところに留まるのは、最初の覺悟に反く譯で、男子の本領は、左樣したものではあるまい』

林藏の意氣は、いかにも壯烈であつて、その覺悟は凜然たるものであつた。

『殊に、松田氏は、すでに目的の地へ、着いて居られるかも知れぬ。我等の來るのを、空しく待たせては、不本意の至りぢやから、一刻も速に進むことにいたさう。況して、食物も、追々と手薄になり、行程の先きも、實は謀り知ることを得ぬのであるから、とに角、闇雲に進む外はあるまい』

『左樣いたしませう』

『アイヌに命じて、その支度を爲せてくれ』

『ハイ』

そこで、佐藤は、アイヌを呼んで、出船の準備を申付けた。アイヌは、眼を圓くして、

『それはいけません』

『何故か』

『何故かといつて、この風のはげしい時に、とても船は出せませんから、もう二三日待つことにして下さい』

『且那は、すぐ出かける、とおつしやるのだ』

『たとへ、何とおつしやつても、危くて船は出せません』

『どうしても、船は出せない、といふのか』

『ハイ』

『且那に、左樣申上げてもよいか』

『危いから出せません』

『よし』

佐藤は、林藏に向つて、

『アイヌは、危いから船は出せぬ、と申して居ります』

之れを聞くと、林藏は、怒氣を含んで、

『奇怪千萬、我が命を背くものは、勘辨相成らぬ』

と、いつて、刀の柄に手をかけた。その態度を見て、アイヌは、慄へ上つた。

『まゐります』

『行くか』

『ハイ』

『堅い決心をして進むものには、神樣が、助けの手をかけて下さるものだ』

『ハイ』

『お前も、神樣を祈つて行け、必ず助けて下さる』

『神樣に祈つて、行きませう』

『左樣しなさい』

酒を嗜むこと、神を祈ること、この二つは、アイヌの生命といふても、よい位である。林藏から、神樣のことをいはれて、やうやく覺悟が出來たのだ。船は、岸を離れた。荒れ狂ふ波に、もまれ〳〵て、沖に出る。アイヌは、一生懸命になつて、波にさらはれまい、とするが、はげしい風波の力には、とても打勝てさうもなかつた。

二四

要するに、その企ては無理であつた。荒れ狂ふ波は、船を、木の葉の如く弄び、ゆり上げては、またゆり下す。風は、いよ〳〵はげしくなるばかりであつた。縣命に働くものは、アイヌばかりでなく、林藏も、佐藤も、ともに一

生懸命であつた。

櫓も、櫂も、この風波には、何の役もなさぬ。只だ打ち込んで來る、潮水を汲み出して、船の沈むをふせぐのが、唯一の仕事であつた。息を吐くやうにして、風が休む、その一瞬時を利用しては、巧みに舵を廻して、船を岸の方へ廻す。それが忽ちにして、波にもまれると、岸から離れてゆく。

同じことを、いくたびとなく、くり返して居るうちに、どつと打ち來る、大波の爲に、船は、岩の上へ、乘り揚げてしまつた。三人が『はツ』と思ふ間に　船は、岩の上へ置去りになつて、波は、すつと退いた。

『はやく、岸へ飛べッ』

と、林藏は、高く叫び乍ら、身を躍らして、二間ばかり飛んだ。二人も、跡からつゞいて飛ぶ。疲れを忘れて、三人は、ひとしく駈け出した。辛うじて三人が、岸を離れた刹那、大波が、どつと押して來て、それが退いた時には、岩上の船は、影も留めず、消え去つてしまつた。

ほつと息を吐いて、林藏は、微笑を漏らした。

『危かつたな』

二人は、何とも答へず、蒼白の顔を、林藏の方へ、向けて居るばかりであつた。

『些と無理であつた。併し、神樣の加護があるから、斯うして助かつたのぢや』

『……』

『我等の武運は、未だ盡きぬぞ』

佐藤が、やうやく口を開いた。

『此所は、どこでせうか』

『どこか、判らぬ』

『大分來たやうでしたな』

『おだやかな日に、船を行つても、これほどには進み得ない。危い思ひはしたが、それ丈けの利益はあつた、といふものぢや、ハツハ、、、、、』

アイヌは、丸で氣拔けのしたやうになつて、高笑する林藏の顏を、見詰めて居た。

『旦那』

『何か』

『船が無くなりました』

『うむ』

『これから、どうなさいますか』

『歩く外はない』

『どこまで……』

『それは知らぬ』

『何を目的に』

『それも判らぬ』

『どこまで歩けば、よいのでせうか』

『行き當るまでぢや』

『行き當るまで……』

『そのうちには、人間の居るところもあらう』

『……』

どう考へても、心細い限りである。斯うなると、決心は定まるものだ。いづれにしても、進む外はないのであるから、氣の落付くに從つて、二人の覺悟も出來る。林藏の態度が、平生と少しも變らぬ丈けに、二人の心も、落付いてゆく譯だ。

只だ、これからは食物の必要がある。それも、木の實や、生魚を食ふて行けば、どうにか生命は繼げやう』

アイヌは、立上つて斯ういふた。

『行けるか』

『ハイ』

『大丈夫ぢやな』

『大丈夫です』

疲れて倒れて居たが、佐藤も、起き上つた。アイヌに、負けてはならぬといふ、反抗心が起つたのであらう。

『、、、まゐりませう』

『歩けるか』

『歩きます』

『よし、さア行かう』

濡れた衣服を、その儘に、三人は歩きはじめた。

日が暮れて、夜が明けた。

それをくり返しつゝ、どこといふことなく、海岸に沿ふて、北へ北へ、と進んで行く。

『旦那ッ』

『何か』

『人間の家が見えます』

アイヌにいはれて、林藏も、佐藤も、延び上つて、向ふを見ると、なる程、人家の屋根が見える。そこは、ノテトであつた。

二五

やうやく、人家の在るところへ來て、三人の心は、急に勇み立つた。人家といふても、離れ〳〵に、一軒二軒と、數へる丈けのものではあるが、それにしても、幾日の間、無人の地を、非常な苦辛を以て、何の的もなく、ひたすらに進んで來た時、たとへ一軒でも、人間の住んで居る家を、見付け出したのであるから、その喜びは一と通りでなかつた。

ラツカ崎に近く、ノテトの村、それは寂しい漁村で、住んで居るものは、アイヌ族の人が、ほんの數へる丈けのものであつた。飛び〳〵に在る家も、すべてを數へて、僅に二三十軒であるから、町といふほどのものでないのは勿論、村といふすら、如何と思はれるほどの、寒村であつた。

從いて居る、アイヌは、先づ愁眉を開いて、

『旦那樣ッ、人の居る村へ來ました』

と、いふて、獨り喜ぶのであつた。

『お前は、この村を知つて居るか』

『否、少しも存じませんが、ノテトには、、、、わたくしの仲間が居る、と、豫てから聞いて居ましたから、多分は、それで御座いませう』

『ははア、ノテト村といふのか』
『誰れかに逢つてからでなければ、左樣であるか無いかは判りませんが、ノテトであらう、と存じます』
『お前が、先づ行つて見て、よく事情を、話して來なさい』
『へー』
『斯ういふ處に、わづかの人數で、世間と離れて居るものは、兎角に疑ひの心の深いものであるから、お前から、よく說明して、われ〳〵に害意の無い、といふことを話して、安心させて置いてくれ』
『ハイ、承知いたしました』
アイヌは、林藏の命をうけて、ノテトの部落へ、駈けてゆく。
『佐藤ッ』
『ハイ』
『やうやく人間の居るところへ着いた』
『これで安心いたしました』
『一時は、どういふことになるか、と思つたが、これからは好都合になるであらう』
『左樣で御座ります』
『それにしても、松田氏は、いかゞなされたか』
『さぞ苦心して居られることでせう』
『無事に出會することが出來れば、此上もない幸福とは思ふが……どうぞ、松田の一行も、無事で居てくれるやう、神の加護を祈ることにいたさう』
『それが、宜しう御座います』

兩人は、東の方を望んで、跪拜して居る。ところへ、アイヌは別に一人のアイヌを伴つて、歸つて來た。
『旦那樣ッ』
『オー、どういたした』
『まことに都合が、よう御座いました。わたくしの知つて居るものが居りまして、話も、よく判つて、一しよにやつてまゐりました』
『何よりのことであつた』
アイヌは、背後を振返つて、
『オイ、この旦那樣が、今話した御方ぢやよ』
と、連れて來たアイヌに、紹介した。林藏の前へ、アイヌは跪いて、丁寧に禮を爲るのであつた。
『我等は、決して怪しいものでない。お前等に、害を加へるものでもないから、その點については、安心してくれ』
『この友達から、よく聞いて、安心いたして居ります』
『途中で船を失ひ、一切の物を、海に流してしまつたから、これといふ土產も無いが、これを土產の代りに進ぜよう』
と、林藏は、胴卷の裡から、小判を二枚取出して、アイヌに與へた。物々交換ばかりやつて居て、通貨の事は、よく知らないでも、通貨の有難さは、やつぱり知つて居る。殊に黃金の光りは、いかに蒙昧の人間でも、見たばかりで嬉しさが、こみ上げて來る。
『有難う存じます』
『どうか、案內して貰ひ度い』
『承知いたしました』
三人は、ノテトの部落へ、案內されて來ると、部落のものは皆出て來て、いろ〳〵と話込む。久振りで、食物にあ

りつき、先づ腹を、充たすことが出來た。
『何か珍らしい事はないか』
『昨日、この沖合を、旦那のやうな服裝をした、シヤモのサムライが、小さい舟で、北へ向つて進んでゆきましたが、旦那の連れではありませんか』
『ふふーむ、シヤモのサムライが……』
『ハイ』

一二八

漠然とした話ではあるが、シヤモのサムライといへば、確に松田に違ひない。殊に小舟に乘つて、北へ進んだ、といふのは、疑ひもなき松田の一行と、林藏は、はやくも定めてしまつた。
『この近くに、舟の着く港らしいものはないか』
『未だ、よほど先きにはなりますが、ラツカ崎といふ船着場があります』
『ラツカ崎といふのか』
『へー』
『それぢや、それに違ひない』
『…………』
『その舟は、ラツカ崎へ、はいつたに違ひない、と思ふから、そこへ急ぐことにいたさう』
佐藤も、膝を打つて、
『それがよいでせう』

林藏は、從者のアイヌに向つて、
『オイ、舟の都合を頼む』
『へー』
『はやくしてくれ』
黃金の功能は、忽ちに現れて、舟の用意は、すぐに出來た。日和になつて、風は、全く凪て居る。海には、多少の波はあつても、この邊の海としては、先づおだやかな方であつた。
舟といふたところで、刳舟の小さいのではあるが、それを巧に操縦つて、波や風を凌いでゆく、その狀は、とても內地のおだやかな海では、見ることの出來ぬ、一種の巧みさで、乘つて居るものは、少しの危險も感じないほどだ。
半日あまりで、ラツカ崎の沖へ、舟は進んで來た。小さい灣をなしたところに、小さな舟が、着いて居るのを見付けた。林藏は、腰に下げて居る、手拭を取つて、それを振つて見ると、先きの舟でも、同じやうに手拭を、振つて居る。アイヌは、二人で力を合はせ、はずみをつけて、舟を行る。やうやく、灣へ舟は、這入つて來て、近づく儘に、先着の舟を見れば、ニコ〳〵笑ひ乍ら、松田が、立つて居た。
舟は、ぴツたり附いた。
『オー、間宮氏か』
『やア、松田氏』
互に手を執つて、しばらくは、感慨無量の態であつた。雨雄の眼には、嬉し涙が光つて、握つて居る手はナカ〳〵放れなかつた。佐藤も、アイヌも、互に手を執り合つて、喜んで居る。
一同は上陸した。
『間宮氏、樺太は、大陸續きでなく、一つの孤島である、といふことが、はツきり判つた』

『土人の話にも、この岬が、樺太の北端である、といふて居る。御互は、東西に分れて、樺太を一周した譯ぢやから孤島であることは、明かで御座る』

『然る上は、一先づ立歸つて、この旨を、報告いたすことにしよう』

『それが、よいでせう』

『連れて來たアイヌは、この功を、なし遂げた一人であるから、內地へ連れてまゐらうか』

『本人等は、何と申すか』

『佐藤から、聞かせて見ませう』

『それがよからう』

そこで、不知火から連れて來た、アイヌと、途中から案內してくれた、アイヌと、一つところへ呼んで、佐藤から、相談して見ると、みな喜んで、連れて行つて欲しい、といふから、それを案內者として、兎に角、引揚げることになつた。

日を重ねて、函館へ着いた。奉行の羽太正養は、すでに江戶へ歸つて居て、この報告を爲る對手は居なかつた。

いくぶんの失望はあつたが、松前奉行の河尻肥後守が、羽太に代つて、松前から出張して、當分は、代役であるといふことを聞いて、間宮と松田は、河尻へ、樺太の狐島であることを報告し、併せて、探險の顚末を、くはしく物語つた。

この發見は、何でもないことのやうではあるが、實は重大な發見であつた。文化五年は、西曆一八〇八年に當る。その後、一八四九年に及んで、ロシアのネペルスコイ將軍が、これと同一の報告を、本國政府へ出して居る。これに依つて見れば、ロシアが完全に樺太を孤島として、發見したのは、林藏や傳十郎よりも、四十一年遲れて居る譯であるから、發見の前後を以てすれば、樺太は、日本帝國の領有である、といふ說を、堅く執れる筈である。

それから、林藏は、再び樺太へ渡り、いよ〳〵東韃靼へ、探險に趣く事になつたのである。

間宮の韃靼入

一

傳十郎は、奉行の羽太から、河尻へ申置きがあつたので、すぐに江戶へ出る事になつた。

傳十郎の事は、餘り世間に、知られて居らぬが、實に立派な人物であつたが、膽力、識見、倶に備つて、殊に、忍耐の强かつた事は、樺太探險に、舟を破つて、河中の岩上に、五日も繼りついて居た、といふ一事に見ても、驚く可きものがあつた。

越後國頸城郡米山村、鉢崎といふ土地の農家に生れて、後には、幕府の御小人目附、松田傳十郎に養はれて、其嗣子となつたのである。天明二年、米山峠に、國役普請といふのがあつた。今でいへば、國道の修理であるが、その工事監督に出張した幕吏に見込まれて、江戶へ、伴れてゆかれたのが出世の初めであつた。

初め幸太郎と稱し、後、仁三郎と改め、松田に知られて、武術を修め、學問に勵み、其養子となつて、松田傳十郎を襲いだのであるが、晩年は、四郎左衞門となつた。天保十四年、江戶和泉橋通りの屋敷で、世を逝つたが、齡は七十五歲であつた。本鄕駒込の吉祥寺內、喜藏庵に、墓碑が殘つて在る。

間宮と、其出身の境遇が同じで、ひとしく幕吏に認められて、倶に北地の探險を果し、多く需むる所なく、一小吏

として易んじ、恬淡の生活に滿足して、世を終つたところは、兩雄ともに同じであつたのは、頗る奇とす可きである。

初めは、双方で睨み合ひ、あまり感情も、良くなかつたやうてあるが、樺太へ乘込んでから、互に九死一生の苦勞して第一の目的を達し、相携へて歸る頃には、もう莫逆の友になつて、その親交は、人の怪むほどであつた。江戸へ行くことが、いよ〳〵決まつてから、傳十郎は、林藏を、訪ねて來た。

『羽太殿の申證に依つて、拙者は、一先づ江戸へ立歸るが、貴下は、此地へ殘つて、猶ほ充分に、樺太の事情は、河尻殿へ、申上げて置いて下さい』

『仰せ迄もなく、その儀は、よく心得て居れば、再度の探險をいたすやう、必ず說き付けませう』

『何分、お願ひいたす』

その時、林藏は、さらに膝を進めて、

『拙者は、もう一度、彼の地へ渡り、初心を貫徹いたしたく存ずるが、貴殿は、それを御許し下さるか』

『その儀は、拙者が許すも、許さぬもない。貴下の御隨意になされたら、よいではないか』

『併し、貴殿と拙者とが、協力いたして、樺太の孤島たることを見定め、貴殿は、それが爲めに、江戸へ赴かれる、といふのに、拙者が一人にて、再び渡航いたしては、貴殿の功を奪ふに似て、甚だ心苦しく存ずるゆゑ、一應は、御諒解を得度い、と思ふて、斯く申す次第で御座る』

『イヤ、その御遠慮では、却つて迷惑いたす。要するに天下國家の御爲で御座れば、功名爭ひなどは、互に愛すまい。貴下の思はれる通り、萬事を遂行いたされても、拙者に、何等の不服なきのみならず、拙者は、進んで御勸めいたしたいほどに思つて居るのぢや』

『左樣承りますれば、拙者も、大安心と申すものぢや。實は、樺太の再探險でなく、もう一つ先きへ、ふみ出して

見たいので御座る』

『ふふーむ。あれから先きへ……』

『左樣で御座る』

『韃靼へ渡らう、との御考へか』

『いかにも……』

傳十郎は、思はず膝を打つた。

『流石に、良い御覺悟、拙者も、第二段の御奉公として、それを考へて居つたが、江戸へ立歸れば、どういふ御沙汰を、うけるか相判らぬ。その都合に依つては、再び當地までも、まゐることは出來まい。然るに、貴殿が、その御覺悟をなされたのは、何よりの儀と存じ申す』

『然らば、貴殿の御出立後、その儀について河尻殿へ申出で、御許しをうけることにいたさう』

『それが、宜しう御座らう』

『拙者は、河尻殿と、未だ深く御附合申さねば、河尻殿も、拙者の事は、よく御存じ御座るまいから、貴殿より然る可く、御紹介の儀を願ひ度い』

『承知いたした』

互ひに打解けて語る。林藏は、傳十郎への義理を立て、傳十郎は、林藏の希望を迎へて、奉行を說き付けることを引受けたので、萬事は好都合に、運ぶ筈であつた。

處が、傳十郎出立後、林藏から、此事を、河尻へ申出ると、容易に許さう、といはなかつた。林藏は、頗る疑はしく思つた。ひそかに搜つて見ると、奉行の左右に居るものが、よけいなことをいふて、林藏の再渡航を、妨げにかゝつて居る事が、薄々判つたので、林藏の癇癪は、終に破裂した。單身、河尻へ、面會を求めた。

『このたびの探險に依つて、樺太が孤島であることは、すでに明白となつたが、猶ほ對岸の、韃靼へふみ込んで、充分に取調べて置く必要が御座らう。折角、樺太の事情を、究め乍ら、對岸の事情は、少しも判らぬ、といふ如き、不徹底の事は、甚だ遺憾であるから、自分は、それに盡して見たい、と思ふが、特に御許しを願ひ度い』

林藏は、短刀直入、少しも詞を飾らず、自分の思ふまゝを、いつて退けた。決死の覺悟を以て、韃靼の探險を試みようといふのであるから、その志の壯なるには、何人も感ぜざるを得ないのであるが、河尻は左右のものに種々いはれて居るから、林藏の申出を、あまり重くは聞いて居なかつた。

『その願出は、一應尤もとは考へるが、いづれにいたしても、先人未踏の地へ、ふみ込まう、といふのであるから、其方が、一人にて行く、といふのなら格別、公儀へ願ふて、新に人數をくり出す、といふ如きことは、全く不能の儀と思ふが、それについての覺悟は、どうぢや』

『無論、單身まゐるのであつて、何人の御援けも、うけぬ覺悟で御座る』

『それならば可からう』

河尻も、終に屈して、林藏の請を、容れる事になつた。文化五年の七月、林藏は、宗谷を指して、いよ／＼函館を出發した。

二

文化の頃は、韃靼一帶の地を、滿洲と稱して、全く清國政府の所領であつた。黑龍江の沿岸、テレンといふ所に、その首府を置いて、壯勒恒阿、撥勒渾阿、托精阿の三人が、多くの配下を率ゐて、夏季になると出張するが、冬季は、本國へ引上げる、といふやうな、甚だ不徹底な方法で、統治に當つて居たのである。

林藏が、宗谷を發して、樺太へ向つたのが、文化五年の七月十三日、さすがに夏の氣分は、この邊にも漲つて、海

上も、極めて平安であつた。不知火へ着くと、例の佐藤が、船へやつて來た。

『間宮先生、相變らず御壯健で……』

『オー、佐藤氏』

『斯う早く、御出かけとは思ひませんでした』

『いづれにいたしても、ぜひ參ることに定めて居たのぢやから、奉行へも、その旨を述べて、やうやく許しを得た次第ぢや』

『何しろ、結構なことで御座います』

『小屋のものは、みな達者かな』

『ハイ、いづれも達者で、よく勤めて居ります』

『それは、何よりの事ぢや』

『而て、松田先生は、いかゞなさいました』

『江戸表へ、まゐられて居るので、このたびは、拙者一人ぢや』

『まづ御上陸なされては、いかゞで御座いますか』

『食物、衣類、その他、いろ／＼のものを持參いたしたから、それを受取つて欲しい』

『御親切の御取計らひ、有難く存じます』

『河尻殿からも、特別の贈物があり、拙者の心附けもあるが、一々しるしをいたしてあるから、それ／＼分配して下さい』

『早速、取計らひます』

內地を離れて、斯うした處に居るものは、內地からの便りが、何よりの樂みであり、また內地に居ては、珍らしく

思はぬ物も、此處へ來て居ると、何品に限らず、わざ〳〵の贈物は、この上もなく有難い、といふ感じを有つのが、人情の常であらう。

林藏は、佐藤の案内で、上陸する。小屋からは、下僚から人夫までが、勢ひよく出かけて來て、荷物の引揚げも終つた。

『これは、御奉行樣からの下され物ぢや』

一同は、頭を下げて、感謝の意を表した。

『それは、間宮先生からの御土產ぢや』

と、それ〴〵に品分けをして、公平に分配し、殘る物は、越年の爲め、納屋のうちへ、運び込まれた。

『時に先生、これからどうなさいます』

『奥地行の船は、何時頃にならうか』

『もう參る時分でありますから、船が着きましたら、船長へ掛合ひまして、萬事然る可く取計ひませう』

『何分、宜しくたのむ』

一兩日は、小屋に居て、いろ〳〵の雜談に、時刻を送つた。

奥地からの船は、夏の間は、二三度は來ることになつて居る。沿岸の部落から、種々の物を集めて、それを引換へる爲に、やつて來るのである。時には、宗谷までゆくこともあり、不知火丈けで、引返すこともある。函館迄ゆくことは、殆んど無い、といふても可い。物々交換、それが此邊で、さかんに行はれるが、多くは越年の準備である。都會の地に居て、何事にも不自由を感ぜず、氣樂な生活をして居るものから見れば、斯かる土地に居て、一年の半ばを只だ食ふてすごす、といふこと丈けの、原始的生活を、不思議に思ふであらうが、その生活に安んじて居るものからすれば、都會の地に居て、有らゆる競爭に疲れて、結局は、矢張り食ふて寢て、一生を送る人達の境遇を、却つて氣の

毒とも思ふて居るであらう。それでなければ、こんなところに一生を送ることは、ナカ〳〵出來るものではない。

幸ひ、トンナイから來た船が、すぐ引返す、といふことを聞いて、それへ乘込む事になつた。佐藤は、途中まで同行する事になり、案内のアイヌも定まつて、いよ〳〵出發することになると、一同は打揃ふて、送つて來た。

『御機嫌よろしう』

『お前等も、無事に勤めて、わしの歸るを待つが、よいぞ』

『有難う存じます』

船は、帆を張つた。

海上、僅に五日といふのだが、小さい船で行く丈けに、可成り不自由なものである。風も起らず、從つて、波もおだやかに、トンナイの海岸へ、船は着いた。前に來た處であるから、土人は、みな林藏を、知つて居た。

三

トンナイには、幕吏の出張して居る、番小屋が在つた。前に來た時、懇意にした土人が居て、林藏の一行を迎へた。いろ〳〵の土產物を與へたから、土人の喜びは一と通りでなかつた。番小屋に落付いてから、すぐ相談をはじめた。

『先生、どうなさいます』

『土人を連れて行くのが、何よりも必要なのであるが、その下相談をして貰ひ度い』

『御尤もではありますが、容易に承知いたしますまい』

『喰はすに利を以てすれば、何とでもならうから、とに角、その心を引いて見てくれ』

『一應、話をいたして見ませう』

『どうか、頼む』

佐藤は、これから土人の居るところへ、やつてゆく。その跡で、林藏は、土人へ與ふ可きものを、それ〴〵選分けて居た。しばらくすると、佐藤は、歸つて來た。

『どうであつた』

『とても、いけません』

『承知せぬ、といふのか』

『ハイ』

『どんなことを、いふて居るか』

『これから、奥地へゆくのは、生命がけであるから、御免蒙り度い、といふのであります』

『ハツハ、、、、、、矢ツ張り生命は惜しいのかな』

『いくら蠻人でも、生命丈けは惜しい、と見えまして、否ぢやといふて居ります』

林藏は、ちよツと考へて、

『可し、抽者に考へがあるから、その儘にして置け』

『何も申さずに……』

『左樣ぢや』

三四日は、何事もなく過した。その間に、交る〴〵土人が、たづねて來る。選分けて置いた物を、一つ二つ與へると、土人は、それを眺めて、いかにも珍らしさうにして居る。時には、酒を呑ませて、喜ばせる事もあつた。何を見ても珍らしいのだが、殊に、内地の酒を呑ませてくれるのが、一番に樂しさうであつた。

『且那樣、この酒は、實にうまいですな』

『醉ふた心地は、別によいであらう』

『へー』

『い、な、心地になるか』

『夢を見て居るやうです』

『夢心地になる、といふのか』

『へー』

『その美味い酒を、お前等は欲しくないか』

『欲しいですが、手に入りません』

『い、くらでも、手にはいる道はある』

『へー、どうしたら手にはいります』

『奥地へ行けば、いくらでもある』

『奥地へ行けば、こんな美味い酒がありますか』

『うむ』

土人は、嬉しさうにして飲み乍ら、考へ込むのであつた。

『お前等に與へた、珍らしい物は、多く奥地から得たものであるが、お前等が、奮發して奥地へはいれば、いくらでも手に入るのぢや』

『へー』

『奥地へ行く氣はないか、どうぢや』

『……』

單純な土人は、この誘惑にかゝつて、いくらか心を動かしたらしい、二三のものは、こそ〳〵相談をはじめた。その容子を見て、佐藤が、いろ〳〵と勸めるので、ます〳〵心は動いて來た。

『旦那さま』

『何ぢや』

『わたくし、まゐります』

『行くか』

『へー』

『それは、何よりの事ぢや』

『旦那さまわたくしも、まゐります』

『わたくしも……』

『わたくしも……』

案内をしよう、といひ出したものは、都合三人であつた。

『もう三人欲しいのぢやが、お前等が、三人を募つてくれ』

『へー』

『六人欲しいのぢやから、三人では不可のぢや。お前等の盡力で、三人を募ることが出來ねば、お前等も、連れてゆくことは出來ぬ』

『それは困ります』

『困ると思ふなら、はやく募つて來い』

『へー』

林藏の策は、すツかり當つて、跡の三人も、すぐ出來ることになつた。

四

無慾のやうであるが、矢張り土人も、人間である。いよ〳〵物が得られる、となれば、多きを望むのは、それが人間の慾であつて、別に不思議とするほどの事ではない。

『旦那さま、奥地へはいつてからの御褒美は、どういふ事になりますか』

『お前等の望み通りぢや』

『ゑッ、望み通り下さるのですか』

『左樣ぢや』

『それでは、斯ういふ事に願ひます』

『どうすれば、よいのか』

『手に入つたものは、すべて半分丈けを、頂戴いたしたう存じます』

『可矣』

『御承知下さいますか』

『承知いたした』

『有難う存じます』

土人は、ニコ〳〵して、喜んで居る。

八月三日に、出發と決した。佐藤は、此處までのつもりであつたが、本人の希望に依り、之れも同行する事になつた。

海上は、まことにおだやかであつたが、何分にも小さい船で、風の模樣を見ては進むのであるから、存外に手間取つて、丁度十三日目に、リヨナイといふところへ着いた。山丑夷と稱する、韃靼人が、數十名押寄せて來て、大騷ぎを爲る。所持の物品を、掠奪しようとするのであつた。林藏は、腰の一刀を拔き放つて、

『生命の惜くないものは來い。片ツ端から、切り捨てるぞ』

と、大喝したが、言語不通の對手方には、左迄に感じなかつたらしく、どツと喚いて、林藏の前へ進んだ。

『ゑいつ』

氣合と共に、峰打を食はした。

『アツ』

と、叫んで、一人が倒れると、その他のものは、數歩を退いた。

『物が欲しければ、與へて遣はすが、暴力を以てするといへば、一人も殘らず切殺すから、左樣思へ』

辛うじて、アイヌの通譯で、それが解つたから、夷人の態度も、少し和いだ。林藏は、携へて來た、物品のうちから二三種の物を取出して、それ〴〵に分けてやつた。物を貰へば、敢て危害を加へよう、ともせず、却つて喜び迎へる風が見えたので、林藏は、刀を鞘に納める、と同時に、夷人等の前へ進んで、

『我等は只だ奥地へ行く爲めにこの地を過ぎるのであつて、お前等に、亂暴を加へるものではない。若し我等の爲めに、多少とも便宜を謀つてくれるものがあれば、それ〴〵に褒美を與へるつもりぢやから、萬事宜しく賴む』

『よく解りました』

『お前等の住居へ、案内して貰ひたい』

三々五々、額を集めて、相談した末、

『案内しますから、褒美を下さい』

『よし』

『それではまゐりませう』

夷人の案内で、部落の住居へ、連れて行かれる事になつた。夷人の方は、それで巧く抑へたが、從者のうちに、不安を感ずるものがあつて、しきりに歸りたい、といひ出した。

『お前等は、どうしても歸りたい、といふのか』

『へー』

『これから奥地へはいらう、とする時に、そんな弱いことをいふて、どうするつもりぢや』

『どうか、歸ることを許して下さい』

『何が恐ろしいのか』

『先刻のやうなことが、行く先きで、いく度もあるやうでは、安心して御供が出來ません』

『もう、那アしたことはない。假りにあるといたしても、拙者の一喝で抑へつけるから、安心いたして居れ』

『それでも、歸り度いのです』

『然らば、歸れツ』

『歸れますか』

『勝手に歸れツ』

『船は拜借出來ますか』

『それは相成らぬ』

『船が無ければ、歸れませぬ』

『歩いて歸ることにいたせ』

それには、アイヌ等も驚いた。佐藤が代つて、アイヌを宥める事になつた。今迄に失ふた物品の補充が出來たら、それを分けて歸す、といふのでアイヌも、伴いてゆく事になつた。

五

アイヌの苦情は、佐藤の盡力で、やうやく抑へつけたが、いよ／＼出發となつて、その準備には、十數日を費した。これから奥地へ、深く這入るほど、食物に窮するは勿論、何事につけても不自由であることは、一同にも、その覺悟は有るのだ。從つて、各自に背負切れる丈けの物は、持つて行かう、となつて、それ等の物資を求める爲に、少なからず苦心もしたが、支度に日を要したことは、止むを得ぬ次第である。

リヨナイを離れて、トツショコウへ着いたのは、九月三日であつた。この邊一帶の地には、ツングース族の土人が多く、稀には支那本土のものも、はいり込んで來るが、それよりも朝鮮人が、國境を越えて、土人の仲間入をして居るものが、ナカ／＼に多く居た。

ツングース族の事については、先人の著書に、いろ／＼說いてあるから、そのうちの參考になる可きものを、此に摘錄して見よう。

『ツングース族は、滿洲の親近民族であつて、今から百五六十年前には、七萬以上の人口があり、シエニセイ河と太平洋、支那と北氷洋との間に在る、廣大な土地に、水草を逐ひつゝ散在して居たが、近年に至つて、著しく其人口は、減じて來た。東シベリアに、住んで居たものは、朝鮮と國境が、接近して居る關係から、その親近族なる、滿洲人の爲めに、逐はれ／＼て、漸次に北へ遷つてゆく外なかつた。

此民族は、一帶に蒙古人と、よく似て居る。顴骨は突起して、その眼窩は大きく、漆のやうな眼玉は、爛々として鋭く光つて居る。巨口隆鼻、唇は薄くて大きい。齒牙は、極めて美しく、且堅固である。老人と雖も、齒牙の丈

夫なるには、驚く可きものがある。酸味を帶びた乳汁を、多量に飲んで、壞血病に罹らぬやうにして居るのみならず、食後には必ず含嗽をして、口中を掃除する習慣があつて、それが爲に、齒牙の丈夫なばかりでなく、多くの日本人に比べて見るも、その點は、遙かに綺麗である。皮膚は、黃白色を帶びて居る。男子の毛髮は、すべて眞ツ黑である、女子の毛髮は、男子に比べて、稍や暗褐色のものが多い。鬚髯は、多く無い方であるが、少しでも生ひて來ると、すぐ拔いてしまふからいつも綺麗になつて居る。骨格は、頗る良い方であるが、肥滿して居るものは、殆んど無い。足の形は小さいが、その健脚なるには驚く、全體に、敏捷活潑、力は、ナカ／＼に强く、普通の獸類ならば、五頭や六頭は、肩にかけて運ぶほどである。平生から、身體を鍛練する事に努め、力技を好んで、いかに親しい間のものでも、侮辱を加へられた場合には、すぐ決鬪をする、といふほどである。五官の働きは、頗る鋭敏であるが、色彩の鑑別は、非常に迂い。此民族は、全體を區別して、馴鹿ツングース、犬ツングース、馬ツングース、曠原ツングース、森林ツングースの五つに、なつて居る。

武器の主要なるものは、巨大なる槍である。服裝は、燕尾服に酷似たもので、胸のところには、綺麗な刺繍を施したものを用ゐる。肌には、半繻絆の如きものを着け、上には、馴鹿の皮を以て製した、外套を着る。帽子には、狐の毛皮を以てし、襟卷は、栗鼠の尾を用ゐる。袴に似たものを穿ち、長靴をはいて居るが、すべて獸皮でつくられたものだ。性質は、溫和親切であるが、稍や輕佻にして、迷信は、頗る深い。工具や鐵材は、すべてロシア人と、物々交換に依つて、手に入れる』

斯うした民族ではあるが、ちよつと見たところでは、非常に獰猛の如く思はれるところから、よく誤解されて、間違ひを引起すことがある。

トツショコウの邊に居るものは、漁業を主として居るが、もし不漁がつゞくと、全く食糧に苦しみ、少し位腐つたものでも平氣で食つて居るが、物中などは、更にしないのが、不思議である。

林藏の一行が、やうやく辿り着いた時は、不漁つゞきで困つて居たところから、忽ち衝突を起して、既に大事にならう、としたのを、林藏が、携へて來た物を、投げて與へたので、すぐ融和されて、大事に至らなかつた。けれども、從いて行つたものは、之れに恐れをなして、いかに說諭しても、進まうとしなかつた。殊に、寒氣は、思つたよりもはげしいので、みな引上げの希望を有つて、一歩も動かないところから、止むを得ず、リヨナイへ引上げる事にした。

六

リヨナイ迄、一先づ引上げて來たが、從者は、少しも落付いて居ない。何となく不安の狀態が、續いて居るから、林藏は、佐藤を呼んで、相談をはじめた。

『どうぢやな、少しは落付いたか』

『實に困りました』

『進んで行くとは、いはぬか』

『只だ恐れて居るのですから、いかんとも、いたしやうがありません』

『何を恐れて居るのか』

『山旦夷の獰猛であるのが、恐ろしいといふて居ります』

『物を與へたら、すぐ溫順しくなつたではないか』

『與へるものが無くなれば、恐ろしい事になる、と申して居るのです』

『左樣な事はない』

『併し、彼等は、左樣思つて居るのでありますから、いたし方がありません』

『與へられる丈け與へて、進める丈け、進んで見よう、ではないか』

『すべてを與へてしまへば、自分等が、いよ〳〵苦しむことになる、といふて居ります』

『それは、杞憂といふものぢや』

『彼等の考へと、あなたの覺悟が、あまりに違つて居ますから、その治め方は、とても屆きますまい』

『左樣かな』

『困りました』

從者の憂ふるところも、敢て無理とは思はぬが、この儘に引上げることは、林藏として、堪へ得ぬことであつた。

『まア、一と晩、考へて見よう』

『何か慰める手段がありますれば、わたくしから、猶ほ說して見ませう』

『どうか、賴む』

日は暮れて、寒氣は、いよ〳〵迫つて來た。用意して居た防寒衣位ゐでは、とても凌ぎはつかぬほどである。天幕を張つて、枯葉を、その周圍へ積上げた。天幕の裡へも、枯草を敷詰めて、その上へ寢ては見たが、どうしても眠れなかつた。

そのうちに、疲れが出て、ぐツすりと寢込んでしまつた。

『先生、先生』

佐藤が、慌しく搖起した。眼をさまして、起上つた林藏が、四邊を見ると、從いて來たものは、只の一人も居らなかつた。佐藤は、顏色を變へて、

『みな逃げてしまひました』

『ゑツ、逃げた』

『乘つて來ました船で、みな逃げました』

『左様か』

『いかゞいたしませうか』

『どうも、いたし方がない』

『何とかいたさなければなりますまい』

『まア、捨てゝ置いたら、よからう』

『これから、どうなさる』

『一身の外に味方はない』

『わたくしは、どこ迄も御供いたします』

『拙者は、お前を信ずる』

『有難う存じます』

『何事も、只だ皇國の御爲と、思ふてくれ』

『覺悟いたして居ります』

『嬉しく思ふ。公儀の御用は、韃靼の探險である。これを仕遂げなければ、拙者も、江戸へは歸れぬ』

『わたくしは、函館へ戻れませぬ』

『よし、兩人で仕遂げよう』

『ハイ』

『此處まで、引上げて來た時、繫いて置いた船が在つたから、よほど船の中へ寢よう、と思つたが、若し彼等に、里心を出させては、不可と思つて、陸へ寢たのが、拙者の過失であつた』

『けれども、携へて來た物は、すべて此處にあります』

『それは、何よりの幸福であつた。幕外へ出て見よう』

『ハイ』

林藏は、天幕から出た。佐藤も、つゞいて出た。明け方の雲が動いて、やうやく東の空は、薄明るくなつて居た。林藏は、天を仰いで、しばらく無言の儘、立つて居た。佐藤も、その跡についてこれも無言であつた。風は無いが、寒い。波は、少しも荒くないが、心淋しいことは、一と通りでなかつた。

『やツ、誰れか來ます』

その聲に、林藏は振返つた。

『なるほど、誰れか來るやうぢや』

獸皮に、身を纏ひ、長い槍を持つた奴が、三四人連れで、こちらへやつて來る。

七

酋長のウトーニンは、この邊の顏役であつた。配下のものも、頗る多く、常に、配下の爲に、犧牲たる事を甘んじて、よく部落の人に盡すので、評判も良ければ、勢力もあつた。

今、海岸の近いところへ、日本人らしいものが、來て居る、といふ報告を聞いて、その容子を見る爲に、部下のものを連れて、やつて來たのであつた。案内者のアイヌには、みな逃げられてしまつたが、佐藤は、永く樺太の番小屋に、詰めて居たから、多少は、奥地の事情も、聞いて居るし、言語も、少しは通ずるので、それが幾分の便宜に、なつたのである。ウトーニンも、初めは容易に近寄らなかつたが、佐藤の方から進んで、話をしかけたので、やうやく、安心したやうであつた。

『吾々は、奥地の事情を、究め乍ら、首府のテレンコへ行くものであるが、案内者に逃げられて、甚だ困つて居ると

ころだ。何とかして便宜を、得ることは出來まいか』

『それは、さぞお困りでせう』

佐藤は、林藏の方を指さして、

『この御方は、間宮といふ偉い人であるが、君は、何といはれるか』

『わたくしは、ウトーニンといふものです』

『部落の酋長かね』

『左樣です』

林藏は、ウトーニンの傍へ、近く寄つた。

『只今、この人からいふた通りであるが、お世話をうけることは、出來まいか』

『宜しい、わたくしの部落へ、おいでなさい』

『それは、忝ない』

ウトーニンは、配下のものに命じて、天幕を疊ませ、荷物を一つに纏めて、それを、配下に背負せた。

『さア、まゐります』

『何分、頼む』

ウトーニンが、先に立つて、自分の家へ案内した。家といふても、木造や石造ではなく、大きな圓い皮製の天幕であつた。三本の大きい柱を立てゝ、それへ、天幕を仕かけるやうに、なつて居るのだ。柱の根方には、太い杭を打込んで、しつかり柱を縛りつけてある。

夏は古い物を用ゐるが、冬になると、新しい、物を用ゐる。天幕の裡には、小さい箱の如きものが備へてあり、高さは四 呎 位で、長さは十二 呎 位ある。二本の杭を、箱に沿ふて、前後に打込んであるから、箱は、之れに支へら

れて在るのだ。甲の地から、乙の地へ、移る時は、その全部を取外して、櫃に俵つて、運ぶやうになつて居る。

冬は、成可く森林のうちに設けられるが、天幕の中は、三つに區分けされて、前の方には、入口の室が在り、次の室には常に火を燃やして、暖を取るやうになつて居る。その次の室が、寢室に用ゐられるから、此處だけは相應に廣く設けられて在る。食物を、煑たり燒いたりするには、別に木材ばかりで組立てた、圓錐形の室が在つて、割合に、調法に出來て居る。

海岸へ近くなつて、森林の無いところでは、穴倉をつくり、食物を貯藏するやうにして、自分等は、竪穴を掘つて、その裡に住んで居たのだが、稀には、天幕生活を爲るものもあつて、それは、彼等のうちに於て、稍や裕福なものに、限られて在る。

ウトーニンの部落は、馴鹿を使つて、山に獵するものもあれば、また海に、網を用ゐて、漁するものもある爲に、頗る部落は、富んで居る方であつた。

『これから先は、船の無い以上、結氷を待つ外はありますまい』

『どうしても、その外に、方法はあるまいか』

『ありません』

『强て進んでゆくのは、惡いだらうか』

『多く危險が、伴つて居るばかりでなく、テレンユまでは、ずゐぶん遠くもあるから、海岸に沿ふて、近道を取るのが、最も宜しい、と思ひますが、それ迄には、二三ケ月を、費す事にならうから、その時期の來る迄は、此處に居ても宜しいから、ゆツくり出かけたらよいでせう』

相談は、これで定まつた。林藏は、携へて來た物のうちから、珍らしいと思ふ品を選んで、ウトーニンや、配下のものへ分ち與へた。一同は大喜びで、林藏を歓待する。

附近の狀況を、知る爲に、毎日出てゆく。部落のものが案内してくれるから、何の危險もなく、思ふさまに視察は出來た。斯くて、この天幕生活で、終に越年したのである。

八

文化六年の春を迎へた。梅の花は、そろ／＼綻ぼう、と爲る時分であるが、この地には、未だ春の風は、吹いて來ない。溝暗い、陽の光り、吹く風は、骨を刺すかと思はれるほど、寒いのであつた。

『酋長』

『ハイ』

『拙者は、もう待ち草臥れたから、出かけることにしよう』

『どこへ……』

『奥地へ行かう』

『未だ無理でせう』

『併し、それを考へて居ても、何時行けるか、判らない』

『本統の結氷は、これからです』

『それを待つのも、進み乍らにした方が、樂みは深いから、とに角、行くことにしよう』

『左樣ですか』

林藏は、佐藤を顧みた。

『お前は、此處から歸ることにしてくれ』

『ふツ』

『今迄に苦勞させて、これから歸しては、お前の志しにも背くであらうが、どうも拙者の心が許さないから、歸つて欲しい』

『先生は、左樣おつしやるが、わたくしは、深く決心して居ります』

『その決心は、實に有難い、と思ふが、實に此先きの運命が、どうなつてゆくか、よく判らないから、お前丈けは、生きて歸つて、貰ひ度いのだ』

『それは、どういふ理由ですか』

『この頃、拙者の心を籠めたものが、いよ／＼書上つたので、それを函館へ、屆けて欲しいのだ』

『……』

『兩人で、これから奥地へはいつて、萬一の事でもあれば、今迄の記錄を、屆けることが出來ないから、せめては、これ迄の記錄でも、屆けて置いて欲しいのだが、左樣するには、お前を歸す外はない。折角の決心を無駄にするのは、拙者にしても、忍び難い事ではあるが、私人としての探險でなく、公人としての探險である以上、少しでも搜り知つた事は、屆け出る必要があるのだ。これから進んでゆくのも、公務の一つだが、中途から立歸つて、報告を爲るのも、立派な公務の一つであるから、その方丈は、お前に勤めて貰ひ度いのだ。ぜひ是は承知して欲しい』

『……』

佐藤は、深く考へに沈んで、何と答へもしなかつた。それを、林藏が、いろ／＼にいふて諭したから、終に佐藤も、澁々乍ら、承知する事になつた。

『それほどに、仰せある上は、先生の御思召通りに從ひませう』

『それは、千萬忝ない』

『けれども、先生に、御願ひが御座います』

『どういふ事か』
『これから、どこを指してゆくのであります』
『ワシヨロへ行くのだ』
『然らば、ワシヨロ迄は、御供いたしても宜しいでせう』
『何故、ワシヨロ迄行くか』
『此處で、お別れいたしても、船の便がありませぬから、ワシヨロへ行つて、船を求めて御別れいたす事に、いたしませう』
是は、理の當然である。佐藤にいはれてから、氣が附いた、といふのも可笑しいが、佐藤のいふ通り、船は、從者の爲に、奪はれてしまつたのであるから、たとへ、此處で別れても、佐藤の歸りやうは、ない譯であつた。若し、陸地を徒歩でゆく、とすれば、その困難は、いふ迄もなく、或は、不知火迄行くのさへ、むづかしいかも知れない。
『可矣』
『御承知下さるか』
『承知いたした』
『有難う存じます』
ウトーニンには、兩人の談話の全部は、よく解らなかつたが、更に佐藤から聞いて、くはしい事が解つたので、日本人の御互が、情誼の厚いのには、ひどく感心した。
三人の案内者を得て、いよ〳〵リヨナイを、出發する事になつた。ワシヨロへ着くと、幸ひにして船を得た。それは、不知火へ行く船で、例年の如く、物々交換を、なす爲めの船であつたから、佐藤の身に取ると、此上もない便宜であつた。佐藤は、不知火へ向つて、林藏は、跡へ殘つた。

生別は、やがて死別になるかも知れない。今迄に、多大の苦勞を、倶にして來た一人が、別れてゆくのである。ゆくものも、殘るものも、その淋しさは、同じ事であつた。

九

何が心細い、といふても、旅路で友を失ふ位、心細いものはない。況して、天涯萬里の孤客、見も知らぬ、蠻地にひとしいところで、艱難を共にして來た、只だ一人の伴侶に離れて、全くの單身孤獨に、なつたのであるから、林藏の淋しさは、眞に一と通りではなかつた。けれども林藏としては、覺悟の上でもあり、殊に有つて生れた氣性が、豪宕不羈であるから、一般の人のやうではないが、それにしても人間の事であるから、淋しいといふ感じの、起らぬ譯はない。流石に、林藏も、その一日は、空しく海を眺め、天を仰いで、默々として送つた。
ウトーニンからの紹介で、其處の酋長に、逢ふて居るから、土人の迫害は、免れ得たばかりでなく、却つて案内となる可き、慓悍な土人、五名を得て、案内者にすることを得た。一切の準備も整ふて、ワシヨロを離れ、風波の無い日を選んで、韃靼海の一孤島たる、ノテトへ渡つた。この孤島へ渡つたのは、結氷を待つて、對岸へ渡るつもりであつたが、意外にも暖氣がつゞいて、結氷が薄く、渡り得なかつたので、空しく日を送るうちに、三月あまりを費した。
米は、固より無いのであるから、多くは乾魚や、獸肉の堅いのを、草の根と、木實へ混て、定食にして居たのであるが、それも今は盡きて、いかんともすることが出來ず、心氣は衰へて、只だ寢るより外に、何の樂みもなく、假りに結氷を觀て、渡ることを得るにしても、この容子では、前途が氣遣はれるのであつた。林藏には、別に大きい望みがあるから、それを堪へる覺悟もあつたが、從いて來た土人には、珍らしい物を得たい、といふことの外に、何の望みも有つて居らぬのであるから、終には斷念て、ワシヨロへ歸る、といひ出した。
何といふても肯かず、振りもぎるやうにして、五名の土人は去つてしまつた。いよ〳〵林藏は只だ一人となつて、

この孤島に殘されたのである。此に至つて、林藏の大志も、絶望の外なく、天を仰いで、嘆息するばかりであつた。

『嗚呼、わしの望みも、之れで絶えたか。何人も企て得ぬ、大望を抱いて、今日まで苦勞した甲斐もなく、是れ、萬事休するとは、何といふ情ない事だ。只だ此上は、死生を、天に任せて、自然の成行を、待つ外はあるまい。それにしても殘念なるは、知遇を得た、幕府の人々に對して、充分な探險も、遂げ得ずして、空しく絶海の孤島に、この假を洒すことである』

と、いくたびか嘆聲を漏らしては、失望の淵に、沈み行くのであつた。夢のうちを、歩く人に似て、うつら〳〵と、また幾日かを、すごした。

天幕の外に、足音が聞えても、起き上がる力なく、恰て幻夢のやうに、それを聞いて居るばかりであつた。ぬツといつて來たのは、鹿皮の服をつけて、長い槍を携へ、その背後には、七八名の配下らしい、土人が、附いて居るから、この邊の酋長に違ひない。草の寢所から、半ば身を起して、ぢツと睨んだ、林藏の顏を見て、酋長は、先づ一歩を進めた。

『お前は、シヤモのサムライか』

その詞に依つて察するに、明かにアイヌである。

『オー、わしは、シヤモのサムライだ』

『どうして、此處へ來て居るのか』

『對岸へ渡りたいと、思つて、結氷するのを待つて居るのだ』

『結氷を待つて、居るといふのか』

『左樣だ』

『ふふーむ』

『お前は、何者だ』

『この土地の酋長だが、それを聞いで、どうするつもりか』

『土人ではなからう』

『……』

『お前の詞や、態度から見て、土人ではない、と思ふ』

『判るか』

『よく判る』

『起きたら、どうか』

林藏は、不精不性に、起き上つた。

『お前は、松前のものか』

『イヤ、違ふ』

『どこのものか』

『内地から來たのだ』

『内地から來た？』

『左樣だ』

一〇

今、此處へ、來たのは、ユニーといふ酋長であつた。元はアイヌで、あつたが、松前藩の苛政に、虐め出されて、この地へ遁れて來たのであるが、千辛萬苦の末、土人を征服してその酋長になつた。それであるから、松前藩のもの

を憎むことは、並一と通りでなく、林藏を、日本人と見て、すぐに、其れを糺すほどであつた。林藏が、松前藩士でなかつたのは、此上もない幸福であつた。若し松前藩士であつたら、すぐに殺されたかも知れない。

『お前は、わしを、松前藩のサムライと、思つたのか』

『よく判らないから、聞いたのだ』

『萬一にも、わしが、松前藩のサムライであつたら、どう爲るつもりか』

『殺してしまふまでだ』

『何故か』

『吾々の一族は、みな松前藩の爲に、殺されてしまつたのだ』

『お前は、遁れたのか』

『わし丈け遁れて、この地へ來たのだ』

『それでは、松前藩が憎いであらう』

松前の藩政が、アイヌを苦しめて居た事は、林藏も、よく知つて居たが、それほどに迄アイヌに、憎まれて居るとは思はなかつた。

『その後の松前藩は、幕府から斥けられて、蝦夷の地はすべて、幕府の支配になつた。わしは、お前のやうに、松前藩から逐はれて、國境を離れた人々を尋ねて、それを慰める爲に、歩いて居るのだ』

『アーさうでしたか』

ユニーは、槍を、傍らへ投げて、林藏の前に蹲いた。林藏が、口から出任せにいふたのが、ユニーの耳へは、神の福音の如く響いたのであらう。

『大人、わたくしの家へ、來てくれませんか』

『行つてもよい』

『どうか、來て下さい』

『荷物を擔ぐ』

ユニーは、配下の土人に命じて、林藏の荷物を擔がせた。疲れ果て居る、林藏は、土人に扶けられて、ユニーの住居へ、運び込ました。林藏が、斯うした機會を得たのは、全く天の助けであつた。ユニーの語るところに依れば、もうロシアの國境には近い、といふ。韃靼の首府ともいふ可き、テレンユへ行くにも、年に一度の便はあるといふのであるから、林藏の喜びは、たとふるに物もないほどであつた。

土人は、極端な男卑女尊で、女の權威あることは、可笑しい位だ。何事を爲るにも、先づ女の同意を求める。女がいけない、といへば、男はすぐ止めてしまふ。いかに珍らしい物を、手に入れても、女に見せてからでないと、自分の物にはしない、大概は、女の爲に、捧げてしまふのである。どうして、さういふ風俗か、といふに、女の數が、極めて少ない爲である。男は、極めて不器用であるが、女は、割合に器用で、男が出稼する間にも、何かと働いて、男の手助けもするし、氣性も強く、時には男に代つて、狩獵も行れば、海にも出かけるから、自然と男の方でも、女を、大切にするのであつた。

林藏はしばらく居るうちに、左樣した事情も能く知つて、女に取入ることを、しきりに努めたから、女の氣受けが良くなり、男には物を與へて、萬事を巧く切廻したので、部落のものは、林藏に對して、頗る信用するやうになつて來た。一日、海岸へ出て、網すきの手傳ひをして居ると、土人は、さかんに雜談を、やり乍ら、同じやうに働いて居る。

『オイ、いよ〳〵ラルノさんも、韃靼へ行くといふぢやないか』

『うむ、そんな話だよ』